

## ロシア極東の旅 I 凍土地帯、ソ連邦崩壊の夏—予備調査行\*

齋藤晨二

## 内容目次

1	はじめに.....	119
2	新潟出発、そしてハバロフスク..... みやげにバナナを買う バロフスク空港のスローガン 「死んだ人の涙雨...」 案内の2人が出迎え 改築中の宿 観光船	119
3	ヤクーツクで..... クニツキー氏の出迎え 永久凍土研究所の宿 地温計の設置 カメンスキー所長 市内の古 建造物 「古い物は地下へ沈む...」 ダラダラ工事の新築ビル	121
4	北極海（ラプテフ海）のまちチクシ周辺..... レナ川河口の東端軍事基地 研究所所属船が宿 北極海（ラプテフ海）の海岸へ ツンドラを歩く 海岸には大量の流木 エドマ層の氷の崖 やっと船に帰る ヴイコフスキー半島 崩れ出した墓地 集落の中で 「北方の人参」とウハー 材木のイカダ 山へ登る ポリゴン 魚の塩漬け ここで もウシを飼う 大陸間弾道ミサイル監視レーダー ヘリコプターをチャーターして マンモスの牙製品 中古の日本車 突然の嵐 嵐のあとの豊漁 ハラゴールの潟湖 墜落したヘリの残骸 マンモス の化石が散乱 チクシ空港で	125
5	ヤクーツクへもどって..... 日本でも学者は貧乏 好塩性植物 ロシア人農家の氷室 暑い夏のダーチャ クニツキー氏 宅で晩餐会 凍土の中の研究室	140
6	コリマ川のチェルスキー..... チョクルダフで ピューマツンドラ 港湾と空港 凍土上の森林 コリマ富士 研究者の自嘲的 不満 地下冷蔵庫 コリマ川の船で	143
7	またヤクーツクへもどって..... 民族学者イワノフ氏に会う ルサコフ氏宅で晩餐会	145
8	レナ川支流のアルダン川流域..... レナ川の風景 船内で また研究所所属船の宿 魚釣り 崖の調査 焚き火 休養日の豊漁と 野イチゴ狩り ヤクート人の村で 夏至祭り会場 農家に寄って ホトン民営の客船	147
9	レナ川東岸、内陸のアラースで..... アラースとピンゴ 牛馬の飼育 塩湖のアラース 放棄された牧地 コンバインで雑草も収穫 半民営の牛牧場	152

10	ヤクーツクでの日程を終える .....	155
	ヤクーチアの地下資源　マンモスの脚の標本　長距離を歩くロシアの人　ハムース(口琴)博物館 別れの夕食会	
11	オホーツク海に臨むマガダン .....	158
	雨のヤクーツク　水道、トイレ　旅立ちの茶会　カムチャツカ行きの飛行機で　雨で寒いマガダン ここにもマンモスの標本　イズマイロフ氏宅で　サケ獲りの人びと	
12	ベーリング海に臨むアナドゥイリ　モスクワでクーデター事件の報 .....	161
	遅れる飛行機　スモッグと寒さのアナドゥイリ　国際シンポジウムがあるとは　海岸でサケ漁をする 人びと　モスクワで大事件の報　シンポジウムは開催　福田氏の誕生日祝い　市周辺の見学会 日本へ無事を知らせる電報　ツンドラに農牧草地の実験場　アメリカのジャーナリストが殺された...？ クーデター事件終結のニュース　シンポジウムは続く　郊外へのエクスカッション　ミサイル監視用 レーダー　凍土の氷崖　ヴェズジェホードへ乗る　洗面器大の食器　テレビのニュース番組 「独裁は成功せず」のスローガン　シンポジウムの打ち上げ会	
13	ハバロフスクにひらめく三色旗、そして帰国 .....	170
	アナドゥイリ空港へ　ハバロフスク行きが来ない　約1日遅れで搭乗　マガダンで本機は運行 打ち切り！　ようやくハバロフスクへ帰り着く　日本料理への招待　塗りつぶされるソ連の スローガン　新潟へ	
14	おわりに .....	173
図1	調査地域概念図 .....	175
図2	レナ川三角洲 .....	176

\*本稿はロシア・中国方面を専門とする地理学者の斎藤晨二先生（元名古屋市立大学及び岐阜聖徳学園大学教授）が、1990年代前半に実施された研究調査旅行の際のメモを時系列的に整理されたものである。ロシア極東地域における本邦研究者によるフィールドワークがほとんど不可能であったソ連崩壊前後期の記録であり、ソ連崩壊につながるクーデターを調査中に経験された記述もある。歴史的な記録としても、この地域におけるフィールド調査の裏側の情報としても、当該地域をフィールドとする調査研究者にとり興味深いものが多く、ここに掲載することにした（但し紙数の関係から、写真は約半数に割愛）。もともとⅠとⅡの2部構成（Ⅰは1991年7-8月のサハ共和国を中心とする永久凍土開墾調査記録；Ⅱは1993年7-8月のサハ共和国エヴェン人トナカイ牧畜民の許での民族調査記録）であるが、本号ではⅠを掲載し、Ⅱは次号に掲載の予定である。（編者　吉田睦）

## 1 はじめに

本稿は1991年の7月から8月にかけて、ヤクーツクにある永久凍土研究所の招待で理科系、文科系の違いはあるものの地理学専攻出身の福田正己、斎藤晨二の2人がシベリアにおける現地調査の可能性を知るために行った、いわば予備調査の記録である。私はその旅行の間、毎日、日記風と走り書きのメモを書いていた。自分でも判読に苦勞するようなメモを同じくメモ代わりに撮影していた写真と見比べながら、なるべく詳しくその旅での見聞を綴ってみることにした。ソ連崩壊のきっかけとなったモスクワでのクーデター事件がこの旅の終わり近くに起こったのだが、その直前の日々にはシベリアの極地でも旧体制と新しい動きの中で、あるいはおもしろい、あるいは思いがけないハプニングがたびたび起こった。また、この旅行の当時、シベリア(あるいはロシア一般)の人びとのイメージでは日本はエレクトロニクスなどの先進国であり、日本人はみな金持ちだとされがちで、そのために戸惑うことがあった。私が持っていたポケットに入る二つの小さな機器(MDレコーダーとデジタルの気温・水温計)がめずらしがられたり放射能測定器かと問われたりしたこともあった。

凍土学の専門分野については素人の私にも分かる範囲に止める外はないので、むしろ日を追ってのさまざまな出来事を中心にして書きつづってみることにする。また、これ以前に私が参加した学会旅行での見聞も関連した事柄については随時織り混ぜてみたい。

執筆中、福田氏には情報をいただき、また、書き終えた時点で全文を見ていただいて、数カ所の補正、加筆を行っている。

\* \* \*

なお補筆するとシベリアなど極地では凍土層の融解が目立つことはたしかであるが、この予備調査時には、後に大きく報じられるようになった大気中の二酸化炭素の増加による地球温暖化説は、まだ話題になっていなかった。本稿ではシベリアの永久凍土の融解は1万余年前(氷河期後)から強弱をくり返しながらかつて続けている自然現象であり、凍土の存在は気温変動との微妙なバランスの上にあるとみなしている。一方では人為的な凍土の掘り返しや植生破壊による著しい凍土層の崩壊が起こっているのを目撃したが、他方では鉱山の廃土(ボタ山)に新たに凍土化が起こったり、凍土層内の氷楔が成長しているなどの現象もあるとの報告を読んでいる。

## 2 新潟出発、そしてハバロフスク

1991年7月23日

新潟発ハバロフスク行き10時55分発の予定がやや遅れた。B767 200型機。新しそう。座席は窓側から12kと13k。197人が乗ったそうだ。「ハバロフスクは曇り、気温19℃。所要時間1時間45分...」のアナウンス。

11時10分出発。11時半にはもう昼食を配りはじめた。五目飯にハム、トリ肉焼き、牛肉とタケノコの煮物、キウイの薄切りとオレンジの切ったの。オレンジジュースもあったがトマトジュースをもらう。緑茶...。これらは全部、新潟で仕入れた食材に違いない。

12時半(現地時間1時半)降下をはじめますが、全くの雲のなか。1時58分、人口62万のハバロフスクへ着陸。雨に煙っていた。

ЛЕНИН ЖИВЁТ ВЕЧНО (レーニンはずっと生きています)とのスローガンが空港ビルの窓枠の上に書かれているのが見えた。1972年にナホトカからの列車で初めてここを訪れてからあまり変わらない雰囲気だと感じたが、以後、何かと変わり始めているのが分かってきた。

雨の中をバスで1分、その建物のなかの待合室へ行った。入国検査に並んだが、あっという間に済んでしまった。韓国製のカートが並んでいたの、それを押して荷物が出てくるまで待つ。サハリンへ行く墓参団の人たちも混じっており、その一行のなかの一人の年配の女性がぶつぶつとソ連の悪口を言っていた。「これは樺太で死んだ人の涙雨だ.....」

30分ほどして、大量の荷物が積み重なるようにして、ベルトコンベアが回りはじめた。一緒に飛んできた乗客の重量より重いのではないかと思うほどの多さだ。これまでのロシアの空港の例で、荷物が出てくるのには

もっと時間がかかると思っている人がかなりいるのか、人気がなくなってきたのに、いつまでも引き取られないスーツケースなどが、まだいくつもグルグルまわっていた。

長蛇を作っている税関を通る列に加わる。ここで例によって長い時間がかかるだろうと覚悟を決めたところが、またたく間に列が短くなり、我われも何も聞かれず、あっさりと通過してしまった。

今回は、ロシア(ソ連)へ入国してから出国するまでの諸費用は、原則として先方がもってくる1ヶ月余りの旅行だった。ただ、ルーブル払いが出来ない場合は、ドルによって我われの分は自分たちで負担した。ソ連科学アカデミー・ヤクーツク永久凍土研究所の通訳のリリアさんと研究員のルサコフ氏が出迎えてくれた。この旅では英語とロシア語が公用語となったが、ヤクーツ人のリリアさんが、その後、英語とロシア語を高度の学術用語まで自由自在に使い分ける語学力のすごさには舌を巻くことになった。

いささか古めかしいワゴン車で市内へ向かった。市の中心部へ入る手前で大通りをそれて住宅地らしい地区に入り、12階建てのビルに着く。旧学生寮といった感じでその5階に泊めてくれるらしい。大柄のルサコフ氏が狭い階段を重い荷物2個を両手に持って、一気に登るのには驚いた。福田氏もそれにならって登り、かなり息を切らせる。私は、自分の大型スーツケースだけを持って、それでもかなり苦労して部屋まで運び上げた。「古い建物だが静かだなあ、」などと言いながら2時間ほど休憩。この建物は改装中らしく、この階までの途中の階は壁を崩したり、床をはがしたりしてある。

6時ごろ2人が迎えにきた。いつまで歩くのだろうと思うほどの距離を歩いて、ようやく戦勝記念広場の近くのレストラン「ルーシ」へ。ステンドグラスやランプなどが凝っていて趣のある内装だ。

ロシアのレストランでは苦しみられるロックバンドの生演奏がここにもあった。少しの間においては隣の人の話し声も聞こえないような大音響が耳をつん裂くように鳴りわたった。

キュウリとトマトにスメタナ(ヨーグルト)をかけたサラダ、後日、作り方が分かった塩辛いサケの薄切りに生のニラを添えた一品、それにテーブルの上に4人分ということか1カゴの黒パンと大きなガラスポットに入った赤いジュースという簡単な夕食にする。隣のテーブルのロシア人らしい2人連れが牛肉とジャガイモの皿をとったのを見て、すすめられた通りにあれにすればよかった...などと思った。

外へ出て少し歩くと「レストランさっぽろ」というのがあり、日本人観光客数人がカメラを向けていた。帰路は広場からバスに乗って、住宅地の一角で下車。そこから、またかなり歩いたが、西も東もわからず案内されるままに宿へ着いた。

部屋で計器の説明を福田氏がルサコフ氏にするのを聞いて、私の運んできた測機が新型の地中温度計だということが分かった。ルサコフ氏は永久凍土などの地中温度の専門だそうである。

風呂に入って洗濯をした。このような改装中の建物ではあまり期待していなかった湯が出るのに感激した。洗濯は、たいてい毎晩寝る前に洗面台で手洗いすることになっている。都合の悪いことに水を溜める栓のある宿は、ほとんどないので、いつもゴルフボールを持って歩いている。排水口を塞ぐのにちょうどいいのだが、転がって溜めた水が流れ出しやすいのが欠点だ。トイレもここは正常に作動するが、清潔とは言えず、便座がはずれるには用心が必要だ。

なかなか寝付けないので、MDのウォークマンでシューベルトの即興曲を聞く。夜中に蚊に悩まされた。

7月24日 曇り 朝25℃

昨夜、バス・トイレ室のパイプに掛けておいた洗濯物があまり乾いていないのは意外。部屋で湯をわかし、持参のティーパックの緑茶とパックの海苔、新潟の店で見本にもらったサプリメント、それにバナナ一本などでとりあえずの食事。

12時頃、ルサコフ氏が現れ、外国人がヤクーツクまで行くための航空券はルーブルでは買えなくて、ソ連の人の料金の50倍にあたる154ドルだと言われたとのこと。12時半に、空港まで行って交渉してもらい、航空券を入手したが、我われがドルを出した記憶はなく、料金の件がどうなったのかは不明。私のメモの別の個所にハバロフスク～ヤクーツク125ドルと朱書してあり、今となっては意味不明だ。

АКВАРИУМ(アクワリウム)というレストランに入って昼食。例によってパンはテーブルの上のカゴに積んである。キュリーのサラダ、トリ肉スープ、トリ肉焼きにジャガイモ添え、それにчёрная смородина(黒スグリ)のジュース。

食後しばらくの休憩中に外貨の両替をしようとしたが、なぜかやってくれない。ベンチにもどるとルサコフ氏が新札で50ルーブルずつくれた。

再び市内へタクシーでもどり、アムール川遊覧をすることになった。タクシーの運転席の計器の横に汚れたボルノ写真が貼ってある。川岸まで5ルーブル28カペイカ。

3時半までの1時間半を観光船に乗った。これまでに何回か乗ったこの遊覧船だが、大量の水がとうとうと流れるこの海のような大きな川には退屈しない。曇り空で少し風があって少し揺れるがまずは快適。シベリア鉄道の鉄橋の下付近まで行って引き返した。小さなボートが多数岸に見えるのは、対岸(中州)のдача(別荘)へ通うためのものだそうだ。帰ってきて入った川の駅(港)のトイレは猛烈なアンモニア臭がただよう。

河岸段丘をあがって市内に入り、中央通りをまとも歩きに歩いた。ジャムパン、アイスクリームなどを買う。絵画店があり、だれかの個展をやっていた。やはりここは都会だという感じがした。ようやく宿へ着く。

夕食はやめて、リンゴとブドウを混ぜたらしいジュース、シベリアでよく出てくる白樺のジュース(春先に白樺の幹に傷をつけて採取する樹液で薄い甘味のある飲み物)、先ほど買ったパン、ノリと茶と梅干などを口にした。

飛行機の出発が深夜なので、ソファーに横たわり、眠ろうとしたが、ウォークマンを聞いて時間をつぶすだけだ。外は風が強い。涼しいのにまたも蚊が飛び回る。

夜12時にルサコフ氏がやってきたので荷物をまとめた。エレベーターが動かないので、まとも階段で下まで自分たちでおろした。私は何もできずに人まかせだ。

事務所にカギを返し、風のなかで持参した蚊取り線香に火をつけてタクシー待ち。

中央通りを北へ向かって走る。暗闇の街路に明かりのついたショーウインドがちらほらあった。昼は気がつかなかったが、かなりの下り坂が続く。事故車らしいクルマの横にパトカーが停っているのが見えた。深夜なのにかんりのタクシーが走っている。座席へ無理に持ち込んだスーツケースのひとつをルサコフ氏が膝にのせていて窮屈そう。

空港に着いてみると、深夜とは思えない人の群れで混雑していた。

3時の搭乗手続きまで壁際にスーツケースを横に倒して腰を下し、またウォークマンを取り出す。2時ごろ、子供の一団が到着したりして、ますます混雑してくる。そんななかで待合室(コンコース)をネコが通ったり、イヌが2匹じゃれ合いながら通り過ぎたりする。

3時半になって、やっと搭乗手続きがはじまったが、超過料金も取られずにゲートを通過し、混雑を気づかってくれたのか国際線待合室へ案内された。荷物もそちらへ運ぶのにルサコフ氏が台車をとってきてひとりで忙しく働いてくれた。この待合室は閑散としていて、フランス人らしい10人ほどの年配の人たちの団体がいるだけだった。

### 3 ヤクーツクで

7月25日

4時25分離陸。すぐに眠ってしまい、気がつくと6時20分。もう着陸態勢に入っていて、福田氏がビデオカメラを回して外の景色を撮影していた。一面のタイガ(北方針葉樹林)のなかに大小のまるいくぼ地で湖や草地になっているのが散在している。алас(アラスカ語)とよばれる地下の凍土が溶けるサーモカルスト現象で出来るものだ。着陸してみると、晴れ、気温は9℃。時間を1時間戻して5時半。

永久凍土研究所の研究員で以後お世話になることになったクニツキーが出迎えてくれた。数日前までここでは夜でも20~25℃あったが、寒冷前線が通過して寒くなったそうだ。

なかなか預けた荷物が出てこないの、受け取りはルサコフ氏とリアさんにまかせて我われは先に宿舎

へ行くことにする。この研究所は、大きな研究所の表示塔のある位置から草ぼうぼうの荒地あり、アラスと思われる池あり、裸地ありの、かなりの道のりを通った先にある。研究所の前まで市内からのバスが乗り入れており、裏手には研究所員らも入居している住宅団地などがある。

市の西の郊外のその広い敷地にある研究所の近くにある瀟洒な白い建物に着いた。壁に大きくホテルの名前が**Фарус**(ファルス)と書かれていた。ギリシヤ語で灯台という意味だとか。内部はかなり広くて豪華な感じがする。クニツキー氏によるとによると、もともと共産党の所属施設だったが民営化されて1泊50ドルのホテルになったのだそうだ。この3人の女性職員は研究所にいた人たちで研究所員たちとは長いつきあいのある面々なので凍土研をたずねてきた人は気楽に泊まれるとのことである。



←写真1 マンモス型の噴水のある永久凍土研究所の前

食堂でミルクティーを入れてもらって飲みながら、福田氏が調査予定地の一つになるレナ川河口のチクシ周辺についてクニツキー氏にたずねる。

洗濯をしてから休息。

10時から福田氏と2人で朝食をとる。サラミソーセージ、目玉焼き、バター、白パンにトマト、キュウリ、レタスのサラダと紅茶。

凍土研究所のクニツキー氏とリアさんが迎えにきて研究所へ行った。(写真1)

研究所へ入って、2、3人の職員もいるところで、新潟から持ってきたバナナの大きな房をみやげとしてテーブルの上に出した。あのバナナはその後どうなったのだろうか。当地では、まず買えない珍品のはずだった。測定機を設置するための穴が2つ掘ってあった。20mのものと70mのものだそうである。70mの方に設置することにした。一定の間隔で、深い所から地表まで決められた時間内の温度変化を測定して自動的に記録しつづけるようにするのである。

私には設置作業で手伝えることが何もないので、草地にいる昆虫や花を見て歩いた。ハチ、チョウ、バッタ、トンボなど日本で見慣れたものと特に変わりはないようだ。草花も同様だが、幾つかを写真に撮った。

11時半ごろ、クニツキー氏の研究室で、シベリア研究の大御所がかねてから名前や著書を知っていたソロビョフ氏に会った。75歳だそうで、かなり老けてみえた。同氏とはほとんど挨拶だけで終わり、福田氏とクニツキー氏が凍土中にできる氷楔の議論をはじめた。

一人でホテルに戻り、周辺の景色などの写真を撮った。部屋へ帰ってみると、洗ってズブ濡れのまま吊るしておいたシャツがもう乾いている。かなり気温も高くなったが空気が乾燥しているらしい。

1時半。昼食だといって迎えがきてクルマに乗った。市内のヤクーツクホテルのレストランへ案内された。どういう人たちが何人くるのかと思いきや、クニツキー、リリヤの2人と我われ2人の4人だけ。メニューを見ていて、どうしたものかと迷っているうちに**КОМПЛЕКТ II**(コンプレクトII)にしようということになった。「定食2」ということか。キャベツのサラダ、**солянка**(サリヤンカ、野菜や肉などのごった煮スープ)、ペフストログノフ、茶(ほとんどどこでもカップからあふれそうな量の紅茶)。それに食事にはいつも出てくるパン(白か黒、または両方)。

食事の話で、クニツキー氏、リアさんの2人が、以後、我われの帰国まで同行してくれることがわかった。

研究所へ戻り、カメンスキー所長と会う。白髪の老紳士の感じである。今回の招待への礼を言い、今回の

調査の予定などの打ち合わせにつづいて、日本から預かってきた環境研究所や低温研の生物班からの手紙を渡し、共に共同研究を考えているなどの説明をした。またこの研究所員のゴロバロワ女史に気象データ、シャッツ氏には衛星データの提供を依頼するなど延々5時過ぎまで話し合いがつづき、福田氏のエネルギーシユなものには驚いた。

外へ出ると蚊の大群。気温が上がったためらしい。研究所の玄関前の噴水は、多分、実物大のマンモスの形をしているのだが、その高く上にあげた鼻先から水を吹き上げている。それでも、宿へ帰ってみると冷房をしているわけではないが、さほど暑さは感じなかった。

7時からカメンスキー邸で夕食会。研究所のすぐ近くの一戸建ての家で、キュウリやトマトの菜園や、花などを植えてきれいに手入れされた庭つきである。何年後にこの家は火事で焼失してしまったそうである。

カメンスキー夫妻とカメンスキー氏のお母さんが我われをもてなしてくれた。自家栽培の新鮮な野菜類のサラダの類に肉料理など豪華な料理の数々であった。カメンスキー氏のお母さんはフランス語が得意だとのことで、私にフランス語で話さないかとのことであったが、とてもその会話力の自信はないので、「いや、話せません・・・」

と言うにとどめてしまった。リアさんの達者な英語・ロシア語の通訳を介して、10時半過ぎまで話がはずんだ。

7月26日 曇り 朝6時の室内の気温19℃

8時に朝食。うまい食事だったが、食べる量をひかえる。特に異常を感じているわけではないが、旅行に出ると腹の調子を崩すので用心のためだ。

研究所前での測機の設置作業を再開。地下につづく何本ものコードが絡み合っている。終わるまでに時間がかかった。ブヨが群れているのでなおさら大変だ。

クルマで10時過ぎに生物学研究所へ行き、日本側との共同研究についての意向を聞くためである。当研究所から動植物の研究者6人が出席。日本側からの手紙を渡し、我われが帰国するまでに返事をもらうことにした。

ここで大判の「ヤクート自治共和国農業アトラス」をもらった。後年、これがトナカイ牧畜民の研究を行う際に役立つことになった。

昼はヤクーツクホテルのレストランで予約してあった食事をした。

午後、ソロビヨフ氏の案内で、シェルギンの井戸を見に行った。これは1827年から10年に渡って、深さ116.6mまで凍土層を掘ったという縦坑である。はじめはヤクーツクに来た商人のシェルギンが水を得ようとして掘りはじめたものだと言われている。ところが、どこまでも凍土層がつづくので途中で掘るのをあきらめたが、その後ロシア科学アカデミーの援助で凍土研究のために掘りつづけられたという。ついに水の出る層まで達しなかったそうだが、凍土研究の歴史上重要な意義のある記念物である。その科学的な価値をみとめて、最初にこれに上屋を造ったのは、広くシベリアや中央アジアの探検をした19世紀の有名な地理学者で動物学者のミッデンドルフだとされている。かれは1844年にヤクーツクで調査を行っている。

私がここをたずねるのは2回目だったが、前は1976年の学会のエクスカージョン(学会旅行)の一部になっていたためか、スムーズに見学できるように準備を整えてあった。井戸の上屋のドアが開かれ、四角なワクがはめられた縦坑の内部に照明がしてあって、井戸のなかの凍った壁面がかなりの深い所まで霜か氷でキラキラ光っているのが見えた。

しかし、今回は全く様子が違っていた。木造の無骨な丸太造りの掘建て小屋に不細工な扉があって、大きな南京錠がしてあった。キーをどこのだれが保管しているのか分からず、結局、錠前の付いた個所を力ずくで破って扉を開けるという強引なことをして中を見せてくれた。小屋の内側の壁面に図面が貼ってあって、地表から深くなるにつれてどのように温度が変化するかを説明してあるのなど、以前と同じであったが、肝心の井戸には木製のフタがしてあり、それをのけると半ば水につかった蓋か覆いがある、井戸は塞がれていた。ソ

ロビヨフ氏がそこに立つと膝上までほどの深さであった。ドアを破って入ったにはあつけない見学だった。

そのあとで、いま一つ歴史的建造物と思われる建造物の見学をした。17世紀の80年代に造られたとされるヤクーツクの砦の櫓の部分である。(写真2)もともと別の所にあったのをここに移築したというが、この市の東部に現存するのは、確かにかなり古そうだが、約200年前のものだということであるから最初の砦のものではなからう。詳しく調べるか聞けばわかるはずだが、それにしてもこのように放置されたような建物が長い年月の間、よく無事に残っているものだという気がする。



←写真2 残存していた砦の櫓（後に火災で焼失）

それはともかくとして、ロシアの東シベリア支配の中心をなしていた当時のヤクーツク柵(砦)は要塞兼役所であったが、今そこに残っているのは砦全体を囲んでいた木造の城壁の櫓のひとつだけである。櫓は、もとは城壁の4隅と城壁の中間にひとつずつの合計8棟あったらしい。

現在のものは郷土博物館の前の広場の丸太造りの四角な櫓で頂上に尖った屋根がのった古びた木造建造物である。それがあまり整備もされていない広場の一角に建っている。付近では子供たちが遊んでおり、その櫓も自由に入出入りできる。火災でも起こればたちまち跡形もなく焼失してしまいそうな状態であった。(福田氏によると、2000年頃、本当に焼失したようだ。)

中へ入ってみると急な梯子状の階段があり、上に登ると銃眼らしい窓があけてあつたりして、日本の小城の天守閣の内部によく似た感じである。床にはもとの砦を取り囲んでいた城壁と櫓の全体を復元したミニチュアの模型が展示してある。それを見ると外側は屋根付きの城壁というか塀になっているが、その内部は回廊になった細長い建造物だったことが分かる。そのほかに壁には城砦全体の建物の配置もわかる絵や建物の構造を示す図面などが掲げてある。塀(城壁)内には10棟余りの大小の建物があったことが分かる。

シェルギンの井戸も砦の櫓も歴史的な遺産として、以前は保存管理をしていたように思われるが、もう、その余裕も関心もなくなってしまうのであろうか。

さらにたずね歩いたのが、市内でもうひとつ、いまや消え去りつつあるように思われる木造平屋の民家などの古い建物である。シェルギンの井戸や砦の塔と同じように丸太造り、いわばロシア式のログハウスなのだが、急速に高床式のビルに建て替えられている。地下に凍土があるこの地方の古い建物の宿命とでも言おうか、家屋の土台が冬の凍結による盛り上がりと夏の融解による沈下のためにゆがんできて、建物全体が傾斜したり、たわんだりして年を経るほどに多くは次第に壊れていく。夏に床下が水につかっているのをテレビで見たことがあるが、あれはどこなのだろう。軒下に水溜りの溝ができている家があるが、とくにに泥に埋まったような様子をした家もある。地下の凍土層に水分(氷)が多いとそうなるのだろう。

なかには、長い年月を経て建物が沈下していった窓ワクの位置に地面がある民家がある。その半地下式になった家の部屋に人が住んでいるのが通りを歩いていると、足元に見えるのさえる。部屋にあるテーブルの面が地面より低いではないか。

1984年に、同じような現象を西シベリアのイルティシュ川からオビ川を船で下った際に見て、なぜ家がこんなに沈んでしまうのか聞いたところ、

「古いものは、みな地下に沈むのです。だから考古学は発掘をするのです。」

と真面目な顔をして答えられてしまったものだ。

凍土地帯の特異な現象としてこうした傾いたり沈んだりする建物は、見学や観光の対象になっているのだが、住んでいる人にとっては決して快適なものではあるまい。なかなか趣のある民家の並ぶ地区も残っているが、歴史的な遺産としてそうした木造家屋を保存するなどには難しいのではなからうか。



人口が20万近いこのヤクーツクでは昨年、鉄筋コンクリートの柱を地下の永久凍土層の中までドリルで穴をうがって埋め込み、その上にビルを建てる工事が各所で進められている。住宅も高床にして建てた集合住宅に替わってきている。(写真3)しかし、クニツキー氏によれば、この建築工事は非常に能率が悪く長い年月がかかり、完成した頃には配管が、もう錆びている状態で、そういうのを“долгострой”(ドルゴストロイ、ダラダラ工事とも訳すか)と言うとのことだ。宿へ戻って荷物のパッキング。



←写真3 コンクリートの高床式建造物 右に見えるのは古い木造家屋

#### 4 北極海（ラプテフ海）のまちチクシ周辺

夕方5時ごろ迎えのクルマがきた。北極海（厳密には北極海の付属海で、ラプテフ海）に臨むチクシへ行くのだ。スーツケースを研究所に預けて空港へ向かった。だれのか知らないがイヌが2匹同乗したまま空港へ着いた。かなり大降りの雨になった。

7時20分離陸。双発のプロペラ機48人乗り。バルホヤンスク山脈を超えたあたりから晴れてきた。バルホヤンスクの隣、砂利の滑走路のバタガイに降りて給油、その間20分ほど機外に出てみると、段丘の上のようであった。

再搭乗のためにゲートを通るとほとんどの人がブザーがなるので戸惑ってしまった。再離陸すると天気がよく窓からは樹木のない一面にツンドラ化した風景がよく見渡せた。

11時20分、チクシに到着。広大な三角州で知られるレナ川河口の最東端、三角州からはヴイコフスキー半島の付け根をへだてた東のチクシ湾に臨む重要な軍事基地のあるところだが、ここも一部を除いて砂利の滑走路だ。4個の大きな荷物を自分たちで下すのに苦労した。気温12℃。寒いのでアラクを取り出して着た。空港からネイェクロ湾という西にのびる細長い半島（ヴイコフスキー半島）によって北極海から隔てられている内湾へ向かうのであった。この湾内の水はレナ川の淡水である。

迎えにきていた相当に古びたクルマでデコボコ道を10分ばかり走って内湾の海岸（本当はほとんどレナ川の水らしい）に停泊していた凍土研究所の所有船へ到着。船腹にМЕРЗЛЮТОВЕД（凍土学者）号と書いてある。30トンの船だとのこと、ヤクーツクからここへ来るには、夜は5時間休憩しながら10日かかるそうである。この船の甲板下の会議室か客室らしいところを我われの宿泊場所としてあてがわれた。壁沿いのソファのところに私は占めたが、少しカーブしているので、あまり快適とはいえないが、まずまずといったところだ。ただ、北極圏の夏なので、時計では夜の時刻になっても外からは昼のような太陽の光が差し込むので、寝る時には鉄の丸窓を閉めることにした。そうすると、ほとんど真っ暗になる。(写真4)

チクシとは「会う場所」とか「集まる場所」という意味で、この付近は北緯70度のやや南、人口は7,000人の基地のまち（ロシア語の直訳では都市型集落）だ、などという話を聞きながらの食事が、なかば宴会になった。一緒にヤクーツクからやってきた4人のほかに、先に来ていた研究所員たちが集まった。日本から持参したウ

イスキーが減って、先方が出してきたコニャックが一向に減らない。ハエがむやみと多い。



←写真4 移動・宿泊に利用した研究所所属船

2時ごろ、散会したので、備え付けのシュラフをひろげてみたが、何か湿気がある感じがするし、暑いので、これはシーツ代わりにしてアノラックを掛け布団のように使うことにした。

ここはもう軍事基地のすぐ隣なのだそうだが、船から降りてその敷地内を通っても何の咎めもないどころか、兵員

も軍用車両も全く見あたらない草原でしかない。

7月27日 快晴 朝の船内 20℃

6時半頃目が覚めたが、もう一度眠って8時起床。散乱していた物をまとめてソファの下に収めた。

9時。この部屋へみんな集まって簡単に朝食。長身の船長ヴェレゾフスキー、ほかアフアナシエフ、グリゴリエフ(名前がミハイルなので通称ミーシャとよばれることになる)らを紹介された。

この地域についての概要の説明をうけた。ここはチクシの市外の北西にある空港から北へ数キロの海岸で北西に細長く延びる台地状のヴイコフスキー半島によって北極海から隔てられている内湾(ネイエクロ湾)に今この船がいる。ヴイコフスキー半島の北側つまり北極海に面したところには水面から40mほどのマーモントワヤ・ハヤタという凍土の崖があり3.5~3.8万年前のKalginsky Interstadial(カルギンスキー亜間氷期)の地層というのだそうだが、崖が融解して海岸線が数mほどずつ毎年後退している、など永久凍土に関する話がつづいた。また、野生トナカイを獲るのに1頭45ルーブルで狩猟許可証がもらえるとミーシャが話してくれた。

10時半、ヴイコフスキー半島の真中付近を徒歩で北へ横断して北極海側に出てみるために船が海岸を離れた。青い空に青い海で快適。ほどなく半島の陸地が真近に迫って、サンドイッチ状に白く氷が横に入ったように見える地層が海辺に露出して数mの崖をなしている。東西につづく地層全体は水平と言うよりは大きくうねっていて、海に向かって大きく崩れている個所がある。この崖の生成期について説明を受ける。崖の上は平らな草原になっていて樹木は1本も見えない。水際までその草原に覆われているように見える所もある。

12時過ぎに船から船外機付きの赤いボートを吊り下して、それに乗り移った我われ2人とクニツキー、ミーシャ、リアの5人が上陸するために岸に向かった。

氷が溶けたあとの黒い土が海に崩れ出している個所にボートを着けて上陸した。崩れた崖の斜面を登って上の平地になったところへ出たのだが、崩れ落ちている黒い土の崖には、はっとするような赤、黄、青、白の草花が咲き乱れていた。私は思わずカメラを取り出して、あれこれとその草花を撮っていて、他の4人を上でしばらく待たせてしまった。

上のツンドラの平地へ出てみると、一面の草原だが、白いワタスゲらしいのが点々とあるが、それほど多くの花は咲いていない。樹木は1本もないとは言っても本当はあるのだと、クニツキー氏が指差すのを見ると、たしかに広葉樹の葉を数枚つけた小さな木が草むらのなかに生えていた。谷間など、くぼ地にも小さなヤナギカカバの一種の灌木が少し生えている所がある。

いよいよ北極海側の海岸へと歩きはじめる。かなりデコボコして、おまけにフワフワの草原で歩きにくい。地下20~30cmには硬い氷の層があるのだが、その上に枯れた草やコケが腐敗せずに分厚いマットを敷いたように堆積した草地で、サッカーボール大の丸い草の株(ヤチ坊主)を一面に並べたような地表面の部分もかな

りある。

そんな草原が見渡す限りどこまでもつづいている。空は青く風もない。蚊が多いと予想して顔から首を覆う蚊避けの網のついた帽子を日本から持ってきたのだが、全くと言っていいほど蚊はいなかった。

福田氏はスニーカー、私はキャラバンシューズをはいていたが、研究所の人たちはゴム長靴であった。ヤチ坊主の間はジメジメしているか水がたまっているので長靴の方が良いのかもしれない。20～30分も歩くと疲れるというよりはうんざりしてくる。たまに一抱えほどの大きさの石が地面すれすれに出ているのがあって、その上に立つと足裏に固さを感じてホッとす。

平原の所どころに亀裂が入ったように谷が刻まれている。幅が数mから10mほどで、深さは2m余りである。そんな所へ行き当たると谷へ降りて向こう側へまた登らなくてはならない。谷底に白く残る雪らしいのは冬の残雪かナーレジという地下水が冬季に流出しながら凍結してできたものかもしれない。小さな流れには透き通った薄い氷が張ったりしている。谷壁の草のかげから水が流れ出している。紅茶のような色の水だ。

クルマが一両通ったらしい跡が細長い水溜りになっているのがあった。ツンドラをクルマが走るとたちまち植生が破壊されて沼地化するといわれるのが、これだけでもそのことが分かる。

時々、腰をおろして休憩する。たいして重い物は入っていないがリュックを背負って歩いていると少し汗ばむ。相変わらず単調なフワフワの草原がつづく。いつまで歩けば海岸へ出るのか見当もつかない.....。

それでも所どころにきれいな花の咲いた草株がある。鮮やかな紫色をした花の株はトリカブト、かわいらしい薄いオレンジ色のはアイスランドポピーだそうである。

ようやく海が見えてきた。青い海の沖の方にタンカーらしい大型船が1隻航行していた。

歩いてきた草原が突然途切れて数mの崖になっていた。崖の壁面は地表から20cmほどまでが草の根のはいった土壌、それから下は真っ白な氷である。崖下には崩れた土壌が堆積しており、てっぺんにもとの草原の草を残したまま柱状に残った土塊もある。堆積している土壌の下の方は泥になっていて氷が溶けて流れ出す水が細く流れている。その先には少し砂浜がある。(写真5)



写真5 ツンドラの北の果て 左上に北極海がみえる



写真6 海岸に堆積した流木

崖を下って2時40分に海岸へ出た。干潮の時刻なのか海はずっと先に見え、海岸には大量の流木が乱雑に積み重なってあたり一面をおおっていた。(写真6)大きなものはマツらしい。嵐の際に海から波で打ち寄せられるのだ。おそらくこれらの多くはレナ川から流れ出した流木で川の上流で伐採されたものが大部分であろう。小さな木片から電柱ほどのまでであるが、不思議に汚なさはなく、むしろきれいだ。人が捨てたゴミは見当たらず、ドラムカンの錆びたのがひとつ遠くに見えるだけだ。海水を舐めてみたが塩気がないようだ。

そうこうしているうちにもう3時半。リアさんが崖下によく乾いた小ぶりの流木を集めて焚き火を始めた。そし

て食事。湯をわかして紅茶、牛肉のカンヅメ、トマト、チーズ2種類、それにパン。クニツキー氏とミーシャがもってきてくれた昼食だ。カンヅメの肉がうまい。

大きな丸太の流木の上に横になって一休みすると、谷川の流れるような音がする。そう気がついてみるとそこからは海は見えないのに、かなり騒がしい波の音だ。

翌年の7月、環境研究所の井上氏(注:当時の所属)にヤクーツクで会った際、チクシまで観測機で行って来たが、北極海は沿岸まで氷が押し寄せ、かなり寒かったということであるから、暖かい晴天のこの夏は特別だったのかもしれない。

海岸沿いに崖をなして崩れている最中の凍土層を見て歩いた。氷を多量に含んだこれらの地層は「エドマ層」とよばれていて、シベリアの北極圏に広く分布しているが、その成因については、いろいろと議論されてきた。氷河時代に形成されたのは確かだが、1万年ほど前に終わった氷河期のどのような自然環境のなかでこの凍土層ができたかについて、大別して2つの説に分かれる。

氷河期の寒冷・乾燥の気候条件下で氷河のなかった地域にはマンモスなどが生息する広大な草原があり、そこには風によって吹き飛ばされてきた砂塵が積もったレス層(風成層)があった。その堆積層のひび割れ(凍裂)に霜が付いたり融雪水が入って凍結して、地中に氷ができたのだ、という言う説と、いわゆる氷河期にあった間氷期の湖や沼沢地が次の寒冷期に凍結して埋もれたのだという説に大きく分かれる。

1979年にコリマ川中流のドワンヌイ・ヤールで水面から50m近いエドマの絶壁の下でソ連の研究者を中心にその2つの説それぞれの論者が激論を戦わせるのに居合わせ、エドマという言葉をはじめて聞いた。それが「腐食されつつある大地」という意味のロシア語の方言から来ているとモスクワから来ていた氷河学者のフチュリン氏から教えてもらったのだった。まさしく凍土の崖が腐食して崩れ行く光景であった。ちなみにその崖の下に氷河時代の動物の化石が数多くあり私もそれらを数個ひろった。

この議論の際に風成説を強く唱えていたトミルディアロ氏はその後しばしば私に手紙をくれてエドマ風成説に関する文献を送ってくれたのだが、私自身は凍土学や第四紀学の専門家ではないので何とも評価のしようがなかった。いずれにしても、たかが1万年ほど前までの氷河時代のシベリアに広大な草原があってマンモスなどの群れがいたのか、間氷期の川か湖沼のほとりの草原にそうした動物たちがいたのか、よく分かっていないというのは私など素人には意外なことであった。そのドワンヌイ・ヤールの崖には雪を固めたような白い氷が露出している個所と、透明なガラスのような氷が出ている個所があり、一方の主張は砂塵の層の堆積物が顆粒状をなしていることと亀裂に霜が付くように、あるいは雪を固めたような空気の泡を大量に含む白い氷が証拠だとしてこの地層は風成だと言い、他方は透明な氷は湖や川の水が凍った証拠であり、泥炭の層もあるから水成だ、というのであった。両方の成因がありうる、と妥協案を出すアメリカの研究者もいた。

後年、福田氏らと永久凍土研のグループを中心にした、このエドマ層などをテーマに大がかりな凍土の調査プロジェクトが発足することになった。

とにかく今はそれが夏には盛んに融解・崩壊しつづけており、場所によっては年間に数十mも海岸線(河川流域では河岸)が後退していると言われる。

人の気配はないが、北極キツネの猟にくる人がいるらしく、ドアを閉じた小さく粗末な狩猟小屋があり、昔から極北の先住民が使っている丸太の重しが落下して獲物を捕らえるワナの壊れたのをひとつつつ見かけた。

かなたには沼地が広がり、その真中に高く盛り上がった頂上部がギザギザの円錐形をしたピンゴとよばれる地形が見えた。地下の氷の塊が成長して地面を押し上げてできるものである。

流木が堆積する遠浅の海岸を離れて、海沿いに西へ向かうと、20～30mの高さのエドマの断崖が水際まで迫っている。その崖がずっと先までつづいている。私もリュックに入れていた長靴に履き替えたが、膝下までのものなので、崖下のぎりぎりの所を歩かないと靴の中に海水が入ってしまう。他の人たちは、みな膝上までの長いゴム靴なので、ずっと歩きやすそうだった。福田氏も長い長靴に履き替えた。凍土地帯を歩くには、膝上までのゴム靴を用意するのが常識らしい。私はそれを持ってきていなかったのだが、幸い波がほとんどなくて助かった。

用心しながら恐る恐る水際を歩いて行くと、崖下には一辺が数メートルもあるような大きな氷の塊や、氷が溶けたあとに残った黒い土の塊がどこまでもつづく。解け残った細長い高い土と氷の塊のてっぺんに、もとのツンドラの平原の草が生えたままになっていて、それが太陽の逆光をあびて黒い影になっているのが、いかにも頭の毛を逆立てたサルがそこにいるように見えたりする。数日足らずで溶けて崩れてしまう面白い自然の造形がその他にもいろいろある。(写真7)



←写真7 サルの頭のように溶け残った崩壊崖

いつ上から氷や土塊が崩れ落ちてくるかもしれず、海水のなかへ足をとられるかもしれない危険な海岸を歩きつづけた。こういう場所にはマンモスなど氷河期に生きていた動物の化石類が出てきているかもしれないのだが、そんなものを探してみる気持ちの余裕はなかった。(写真8)

やっと崖が少しなだらかになった個所から上のツンドラの平原に登って休憩。気温15℃、少し北風が吹いてきた。もう午後8時だが、まだまだ昼の明るさであった。

そこから、また、ツンドラのフワフワの草原を歩いて船まで戻らなくてはならない。船のところまで、どれくらいかかるのか、とたずねると、クニツキー氏が、“Ещё три часа!”(もうあと3時間!)と言う。



←写真8 崩落する氷崖

みな無言で、ひたすら南へ向かって歩いた。太陽がかたむいて、やはり、少し夕暮れのようになってきた。だれが言い出すでもなく、時々、腰をおろしては休むこと数回。私は疲れてもきたが、空腹を感じて、昼食の時に紅茶に入れた角砂糖が残っているはずだと思い、クニツキー氏にそれをねだった。彼のリュックから昼の残りのチーズやパンも出てきて、他の人たちもそれらを食

べた。

3時間はかからなかったが、10時にやっと船が係留されている内湾の海岸に到着。大声で呼びかけて、朝乗せてきてもらったボートに来てもらい、10時半ごろ本船に帰り着いた。疲れて部屋でうたた寝。トイレでシャワーができると言われて入ったが、狭いので衣服をどう脱いで、また、それをどこに置くのか困る。頭だけ洗ってそれでもスッキリした。

夜の12時、夕食。酒類はない。この付近の水域は内湾とはいっても、レナ川の水のために淡水らしく、我われが留守の間に捕った淡水魚のオームリ、チル、ムクスンなどがフライになって食卓にのぼった。小骨が多くて食べにくいがあるが、うまい。クニツキー氏が生のものを持ってきて見せてくれた。

7月28日 朝9時半 薄曇 無風 18℃

7時頃、目が覚めたがウォークマンを聞く。ハエが顔のまわりを飛んでうるさい。

9時に起床し、荷物を整理した。昨日の疲れが残っている感じ。また横になって、持参した「三国志」の続きを読んだ。

11時過ぎ、朝食。いつもそうだが直径30cmほどのアルミの洗面器が食器だ。(それを洗面器と思うのは偏見かもしれない。)昨夜の残りの魚フライ、ジャム類、チーズ2種類サラダ菜、ネギ、トマトジュース、パンそれに紅茶。

食後、船縁からバケツに縄をつけて水面にたらし水を含み上げ洗濯をした。多少濁っているが、汚水の感じはない。

ヴイコフスキー半島の西端まで行くことになり、赤いボートをまた吊下し5人で出発した。進行方向の右手が半島の海岸である。

しばらく進んだところでエンジンの不調で停まってしまった。船外機を引き起こして、クニツキー氏があれこれ点検した結果、エンジンのプラグを取り替えて、めでたく修復が成功し、再び西北方向へ湾内を走った。午後2時ごろ、高い航路標識が立っているのが見えてきた。水面上、23mほどだそうである。この半島の先端は、レナ川航路と北極海航路の中継港になっているとのことである。半島の海岸部分は、凍土が露出して崩れかけた崖がつづいているが、崩れて水際に堆積した土の上に茎が太く背の高い黄色の花を咲かせた草が多く生えている。少し広い砂浜のようになったところに流木が打ち上げられている。ボートで流木を集めにきているらしい家族連れがいた。薪にするのだろうか。アラースでできた広いくぼ地のゆるい斜面に平屋根の家が見える。

午後2時20分、半島の最西端、ヴイコフスキー村に着いて港より少し離れた海岸にボートを繋いで上陸した。人口は約1000人で、ヤクート人の魚類加工コルホーズもあるそうだが、製材所か薪を切っている所なのか、エンジン音と動力ノギリの音がしていた。この港の村の暖房はヤクーツクより少し下流のレナ川のカンガラーズの石炭を使っているとのことである。港はかなり大きな規模で、クレーンが何本も立ち、大型船が数隻停泊していた。ヤクーツクへ向かうタンカーや北極海航路のコンテナ船などである。



←写真9 崩壊する墓地

海岸の道に沿って歩き、半島の先端をまわって北極海側へ出る。そこでクニツキー氏が“Печальный вид”(悲しい光景)を見せてやる、と言った。何かと思いついて行くと、昨日から見てきたのと同様な黒い土の崖崩れが起こっている場所であった。崖の上は墓地で、崖の黒い土の斜面に遺体を収めた棺が2つも3つも出ていた。赤い棺がひとつついやに目立

つた。バラバラに壊れた棺もある。遺族が、すでにどこかへ引っ越してしまった人たちの墓なのだろうか。(写真9)

その先で海岸の道路を離れて台地の上へ向かった。途中の斜面に何本もの柱の上に建てた高床式の家のように見える廃屋が1軒あった。これも凍土が溶けて崩壊して、土台として打ち込んだ木の柱が剥き出しになってしまった無残な姿なのであろう。

台地の上に登ると先ほど見た墓場の正面に出た。十字架を建てた墓が多く、ロシア人の墓地のようである。その一角にまだ建てて新しそうなデンマーク船の遭難慰霊碑があった。高い四角な木柱で頂上の屋根の付いたところには小さな十字架上のキリスト像が見える。

ヴイコフスイキー村のなかへ行って見た。港で働く人たちがその家族などが住んでいるようだった。一戸建て家屋が無秩序に何軒も建っている。板壁の家あり漆喰塗りの家ありだ。

いずれも窓の形などロシア家屋のたたくまいである。アンテナの大きなのを屋根に立てた家もある。電気はディーゼル発電によっているようである。家と家の間に断熱材を巻いて木の板で四角に覆ったセントラルヒーティングか水道のパイプが通っている。しかし、何軒もの家に屋根まで届くほどの大量の薪が積んである。かなり太い松の木のような。

この地方には、木など生えていないから、いずれもレナ川上流のはるか南の森林地帯から川を運ばれてきた木に違いない。先ほど聞いたノコギリの音はそれを切って薪にしていたのかもしれない。昨日見た海岸の流木の中にあつた木片はここから出たのもありそうだ。レナ川を下ってきた材木がこの港で外洋運搬船に積み替えられているから、その一部が薪にも利用されているのだろう。

地下資源開発などでツンドラを走るのに使われて、ツンドラを破壊すると問題視されている戦車のようなキャタピラ付きの車両 *вездеход* (ヴェズジェホード。「どこでも歩き回るもの」の意味)が一台、捨て置かれたようにある。後日、この同型車両には、お世話になることになった。

板を立てかけただけのような粗末で大きなイヌ小屋があった。いかにも獰猛そうな大きなイヌが激しくほえたてる。20匹以上いるようであった。冬のソリ引き用のイヌか。その周辺にはきたない水溜りがあつてゴミがいっぱい浮いている。このような寒冷な地域では下水の浄化設備を作っても夏の一時期以外は有機物の分解ができないと本で読んだことがある。雑排水の処理ができずに、こうして放置されているようだ。

村のある台地の上から港まで斜面に板敷きの通路があつたので、そこを歩いて海辺のボートを繋いでおいた場所へ戻った。午後3時45分だった。

4時に出発して帰路についた。ところが30分ほどして、またもエンジン不調でボートが停まってしまった。手漕ぎで帰らなくてはならないか、などと言っているうちにやがて回復して走り出した。曇って寒くなってきたのでアノラックを取り出して着た。なかなか船へ着かない感じがしてきたが、6時少し前によく帰船。7時前に“обед”(アベート)だと言われた。瞬間、えっ、昼メシ!と思ったが、この言葉には一日のうちの正餐という意味があるのに気がついた。食卓にはコニャックものっていた。

食後、甲板に出る。船長が舳先にみんなの方を向いて腰を下し、ハムース(アイヌの間に伝わるムックリと同じ原理の金属製の口琴 — 後に触れる)を弾いて聞かせてくれた。甲板には20cmほどの乾魚が数匹置かれていた。コイカフナのように少し幅広なのがソローガ、細長めのはイェーレツというのだそうだ。

「エリツインじゃないぞ。」

とだれかが言う。間もなく大統領になった人物がここでもかなり話題になっていた。

## 7月29日 曇りのち晴れ

昨夜は疲れて10時に寝たが、朝7時になって起こされ、あわてた。昨夜入れておいた魚網を引き上げるといので、急いでボートに乗って見に行くことにした。同乗したリアさんは*северный женьшень*(北方の人参)というのを採りに行くと言って、途中でボートをおりた。あとで採ってきたのを見せてもらすと、肉厚の葉で茎がピンク色がかかり、くすんだ赤い花を咲かせていて、高麗人参によく似た根をした植物だった。この根が高

麗人參と同様の万病の薬だそうだ。

それから少し先までボートを走らせ、網を仕掛けたところへ着いて引き上げにかかった。かなり大きな刺し網の一種のようである。あまり漁獲は多くなく数匹だったが、昨晚、甲板でみた乾魚とは別の70～80cmのチル、それより小さ目のオームリ、ネリマなどが上がってきた。シベリアの淡水魚の和名を調べようと辞書を引くと、「サケの一種」などとあってよくわからないのだが、オームリというのは、「白サケの一種」と辞書には書かれているうまい魚である。

8時半、朝食。テーブルの真中に置かれたのは、木のトレーに積んだ、いずれもあまり新鮮ではなさそうな厚切りのパン、大きなバターの塊の大皿、野菜のサラダの大皿、人数分のホウロウ引きのマグカップ(紅茶用)。それに今回は「ウハー」と称するここで獲れた新鮮な魚のスープをずん胴鍋ごとクニツキー氏が運んできて洗面器状の器に取り分けてくれた。このスープは、以前、オビ川でもインジギルカ川の川原でも焚き火を囲んで食べたことがあったが、川の水をバケツ(もちろん金属製)に汲んできて獲ったばかりの魚をぶつ切りにして投げ込み、塩を少々加えて焚き火で魚の身が崩れるほどまで煮る、といういささか乱暴な料理であったが、生臭さなどなくて非常にうまいものだった。

インジギルカ川の時、「日本へ帰って、海の魚と水道水で真似てもうまくはないぞ。」と自慢されたのだ。

この朝食に出てきたのは、いま少し上品にジャガイモの細切りが入り、ベイリーフが浮かんで、塩コショウで味付けがしてあった。もちろん、味は上々である。

ヤクーチアは後にサハ共和国とよばれるようになったが、「サハ」(左派)でウハー(右派)を食う、という駄洒落をだれかが言い出したものだ。

やがて船が湾内を西に向かって進み始めた。みな疲れたり寝不足で横になっているようだ。私も少し眠ったり「三国志」のつづきを読んだりして過ごした。この旅行に出る前に心配した腹の調子は良好だ。

ふと窓の外を見ると、周囲一面に材木が浮いていた。電柱ほどの長さにそろえてあり、それよりすこし太いものかなりある立派な材木で、どうやらマツの木のようなのだ。日本の赤松に似た樹皮である。レナ川のはるか上流からはるばるイカダに組んで下って来たものだ。イカダのままチクシまで行って船に積まれるものもあるそうだ。(写真10)

11時に着岸。大きさの見当がつかないが、幅が数10m、長さが数百mほどに思える材木を組んだイカダのところにボートを着けて下り、丸太の上を渡って岸へ上がった。イカダの端の方には台所が寝室らしいのや白い布を垂らしたトイレらしい木組みの小屋が乗っている。よほど長い日数をかけてここまで来るのであろう。炊事をしているらしい女の人がいる。



←写真10 上流から来たイカダ

これから目の前にある山へ登るといふ。高さは181m。一面に芝生状に草が生えている。少し海から離れた位置でスコップを使って50cm四方ほどに芝生の地面を切り込む。深さ50cmほどのところまで切り込んで立方体の黒い土の塊をそっと取り出した。土塊を掘り出されたあとの地層の面を見ると30cmほど下からは凍っている。この時の気温は22.5℃。凍土層の観察を終えて、土塊はそっと穴へ戻し、もとの芝生面に修復した。



山を登り始めた。ここは割合に草が豊富で色とりどりの花が咲いている。それに小動物がいるらしく、斜面の草のかげに丸い穴が空いていたり、シャコ(鳥)が吐き出した未消化物だという小指大のものが数本1個所に落ちていたりする。

斜面はなだらかで、凍土現象でできたものらしい、階段状あるいは等高線状に土砂がたまつたようになった構造土の地形をしていて登りやすい。頂上に近づくにつれてゴツゴツの尖った岩が一面に広がり、植物がほとんどなくなった。おもしろいことに、頂上の端にある岩の割れ目に「北の人参」が生えていて空中に花が揺れている感じである。午後2時になっていた。

四方を見渡すと、陸側はレナ川の三角州の東端に当たり、この山と同じほどの薄緑の山あるいは丘がゆるく起伏してつづく雄大な景色である。登ってきた側を見下すと、一面の内湾だと思っていたのに細長い中州やごく浅くなった部分は何本も見える。やはり川の一部だということがよく分かる。船が航行するには、そうした浅瀬を避けなくてはならないはずで、なかなか操船がむづかしいだろうと思う。我われが上陸した際に船を着けた大きな材木のイカダの全貌が見え、もうひとつ同じようなイカダが岸より離れたところに浮かんでいた。

3時に船に帰り、昼食。魚スープ(ウハー)の残り、魚フライ、細かな赤いイクラ、リンゴジャム、パン、バター、紅茶。

4時、チクシ方向へ戻り始めた。船長の水路図によるとこの付近の最深部は97mもあるが、かなり起伏の多い川底だ。航行中にシャワーをあびた。今回は要領がわかって全身を洗うことができてさっぱりした。

夕方5時、船が陸に近づき、高さ3mほどの土の崩壊した個所に停まった。上陸してみると、そこはみごとなポリゴン(多角形土)の中であった。これはツンドラ地帯に分布する典型的な地形で、要するに冬の乾燥・寒冷な気候下で平らな地表面に凍裂(ヒビ割れ)ができ、夏にそこへ流れ込んだ水が凍って地面を押し上げ畝状になるのだが、一辺が数mのそうした畝が地面にたくさん出来て、日本の圃場整理をしていない昔の不規則な田んぼが一带に広がっているようになるのである。ところが、なぜか不思議に不規則ではなく整然と四角な田んぼが並んでいるようになっている場合がある。

日本の水田のようだとは言っても水田より畦が高く幅もある地形で、もちろん、稲ではなく草が一面に生えていたり、水を湛えているものもある。木の柱のような物が斜めに立っていたので、少し登って見渡すと水田と池に似た風景が広がっているのが何となく分かる(後述のように後日、この地形は空から見て撮影できた)。船をつけた場所はその田んぼが崩れて3mほどの崖になっていた個所である。

1時間ほどして、再び船に戻り8時まで走った。我われに気を使ってくれて、米飯を炊こうとしてくれたので、水加減など、私も手伝ったが、水加減など家でやるのとは万事勝手が違って、結局、芯のある飯になってしまった。もとの停泊地点へ帰る途中で魚を獲るための網を入れた。

7月30日

7時半起床。快晴 気温20℃、水温15.3℃。

昨夜、仕掛けた網2枚を揚げた。一方の網には60cmをこえるような大型のチル7匹、オームリ1匹、ネリマ1匹、など。他方の網にもオームリの大きななど7匹が入っていた。すごい!という感じ。突然、甲板上が忙しくなった。網から魚をはずすのが一苦労だ。

魚はすぐ解体し始める。腹を裂いて出てきたイクラは大きな洗面器状の容器に取り分け、内臓を出してからぶつ切りにし、頭もいっしょに、すぐにウハーにするためにずん胴鍋に投げ込む。大部分の魚は腹開きにして、塩をまぶす。それをどうするのかと思って見ていると、高さが50~60cmほどの木の樽が持ち出されてきて、手早くそれに塩まぶした魚の身を漬け込む。船尾から投げ捨てる内臓や骨をめがけてカモメが何羽も集まってきて飛び回った。樽がいっぱいになるとその上に塩をさらにふりかけて、きっちり蓋をする。レストランなどでも、よく前菜として食卓に出てくる塩辛い生の魚と思ったのは、こうして保存しておいたものらしい。

9時、朝食。早速ウハーが出てきた。野菜のストックが切れたらしく、ジャガイモ以外の野菜なしの食事となった。リンゴのジャムがある。

食後、魚の塩漬け作業がさらにつづいた。この国の人たちは、菜園づくりや野イチゴ狩りをいかにも楽しそうにしているのをよく見るが、凍土研究所の연구원たちも例外ではないようだ。

12時半、「茶」だということで、軽食のあと、船長は狩に行くといって銃を持って船をおりて出かけ、我われはいつものメンバーでボートに乗って半島に沿って岬とは反対のチクシ方向へ向かった。左手が半島の海岸だ。氷が溶けたあとの黒い土が尖塔をいくつも並べたようにつづいている。**байджарах**（バイジャラーハ）とよばれものだが、もとはヤクート語だとされる。(写真11)かと思うと地表の草原の端が白い氷の崖の上に覆い被さるように崩れ落ちかけた所もある。(写真12)水際の崩れた土の上には黄色い花がたくさん咲いている。花の名前は「クレストーヴニク」と聞いたので、あとで辞書を見ると **крестовник** という単語があって「きおん属ひめはぎ」と見える。それと同じ植物かどうか分からないが、アオイに似ていなくもない。崩れた崖のところに木の根っこが集まっているのが見えたが、それは現在は絶滅した白樺の根だとのことだ。



写真11 バイジャラーハ



写真12 沿岸の氷の崖（上は草原）

上陸して崖の上に出てみると、そこには半径1kmほどはありそうな広いアラースの湖沼であった。きれいに澄んだ水で、水生植物も生えていた。南風で真っ青に晴れた空に緑の草原や澄んだ水の湖沼が美しい。

4時15分、帰路に就こうとして、またエンジントラブル。出発できたが、途中でガソリン切れで、それまでの右のタンクを左のものにつけ替えた。南風がかなり強い。5時前に船へ帰りついた。

船長も帰ってきたが、狩は不首尾だったそうである。みんな甲板へ出て、ジャガイモの皮むき。船長は塩水に漬けたイクラをほぐした。

休憩。ウォークマンでシューベルトを聞いたり「三国志」のつづきを読んで過ごし、少し睡眠。

6時、夕食。ジャガイモを蒸したのが大盛りになって出てきてこれにバターを混ぜる。先ほど塩をしたばかりのチルの切り身。私は飲まないが、ウオトカ1本を9つのグラスに分ける。

食後、強風となり波が立ってきた。チクシ港へ行くため船が走りはじめた。9時に無事に港へ接岸した。風は風いできた。河岸の砂地のところで軍人らしい男がタバコを吸っていた。このまちは人口が約7,000人でその半数が軍人だというのが、そうするとその家族を加えると市民の大部分が軍関係者にならないか。まちでひとりの軍人にも出会わなかったが。

日射しが強くて昼のようだが、もう夜の9時半。横になって睡眠の準備。「三国志」を読みながら、ウォークマンを聞く。ピアノ曲ばかりどうしてこんなに何枚も持ってきたのだろうと思う。鉄窓を閉じて暗くしたが、なかなか眠れず、音楽を聴きつづけた。MDのディスクをとりかえるのにカチャカチャ音がして、福田氏に迷惑にならな

いか気になった。

7月31日7時起床。快晴 24℃

あまりの晴天つづきに驚く。気温も高いせいかわエも多い。

残り物の朝食。ジャガイモ、イクラ、魚スープ、ジャム、パン、紅茶など。

夜の間、少し沖へ停泊していた船を港の岸壁へ接岸させていた。防犯のためだったのかもしれない。強い南風で、朝食前に洗っておいた帽子がもう乾いていた。

11時半に古びたトラックが迎えにきた。今日はチクシ郊外の研究所へ行くことになった。

50分ごろ、空港前へ着いた。空港の入口の横に1930年代に北極圏の調査・探検をやったパーペニンの飛行機が記念物として、保存されている。

12時45分、市街から7kmほどのところにある宇宙研究所に着き、その敷地内に地温計を設置する作業にはいった。1時間ほどその作業がつづいた。ここへ来る途中の市の郊外で、畜舎らしい細長い建物の外の草地に数十頭のホルスタイン種と思われる乳牛が放たれていた。こんな北極海沿岸でも牛が飼えるのだ。

市の方向の山の上に湾曲した巨大な四角な網のようなものとお椀形のものが並んでいる。

### →写真13 チクシ港から見えるレーダー・アンテナ

アラスカから発射されて北海極を越えてくるミサイルを探知するために設置されたレーダー基地だそう。バカなものを作ったものだ、というようなことを言う人もいた。(写真13)

さて、帰ろうというわけでトラックでガタガタ道に盛大に砂埃をたてながら、空港まで来た。ヘリコプターが数機見えたので、福田氏が「天気が良いから、あれをチャーターしてツンドラを空から見よう。」

と言った。クニツキー氏は即座に「とんでもない！そんなことが許可されるはずがない。許可がとれるにしても、相当な日数がかかる。」と言うのであった。

こちらは無知というか、能天気というのか、試しに空港の事務所へ行ってたずねてみると、何と、その場でOKだ、と言われた。これにはソ連体制下で生きてきたクニツキー氏の方が驚いてしまった。

料金はとなると、1時間で1,550ルーブルだとのこと。その時のレートで30ルーブルが1ドルだから51ドル、日本円に換算してみると、1万円弱ではないか。これは名古屋空港から私の自宅までのタクシー料金より安い、と思った。そこで、そのチャーター料は我われが持とう、と言ったのだが、クニツキー氏は「気を使わなくてよい」と言い、結局、我われはただで乗せてもらうことになった。

ほぼ快晴で気温は26℃。オレンジ色のソ連のヘリコプターで3時20分発。なぜか滑走路をしばらく滑走してから離陸。たちまち海上に出て数個の氷が浮いているのが見えた。小さな細長い島の先端に白い灯台がある。

それから、西に進路をとる。苦勞して歩いて横断したヴァイコフスキー半島上空をその北岸に沿って飛んでもらった。

北極海に臨んで黒い崖あるいは崩壊した土砂の海岸がつづく。崖の上は平らで薄緑の草原だ。ほどなく黒い崖に真っ白な氷が露出しているのが見えてきた。(写真14) 白い氷の崖に大きな黒い土層が点々と入っている、というような崖もある。かねて福田氏に聞いたり、写真でみているエドマの典型的な地層だ。水面から



40mほどの高さの崖で「マーモントワヤ・ハヤタと言いつい3.8～3.5万年前のカルギンスキー・インタースタジアの堆積層」だと聞いていたところらしい。離陸以来、福田氏はビデオカメラ、私はステルカメラのシャッターを切りつづけていたが、私のカメラが肝心なところでフィルム切れになってしまう感じで、フィルムの入替えている時間がもどかしい。

#### →写真14 エドマ層の露頭

徒歩で到達した個所が見え、その付近一帯の様子がよく分かる。先へ進むと半島の先端が近づき、何とあの崩れている墓地の下の斜面に現れていた赤い棺がはっきり見えるではないか。ヴァイコフスキー村や港のクレーン、それに船舶も目の下だ。



#### ↓写真15 水田のようなポリゴン



さて、これからどうするのかと、そのままさらに西へ飛んだ。せまい海峡をこえると、レナ川の三角州だ。そこはまさに低地のツンドラの典型的な姿であった。一面のポリゴンだ。網目模様の光景とも言えるが、薄緑ないし薄い黄色の土手あるいは畦によって仕切られた日本の田植え前の水田地帯のような光景が視界の限り果てしなく広がっている。(写真15)その間にレナ川の分流が大きくうねっていたり、大きな緑の島をつくって流れたりしている。田んぼが沢山あるような島もあり、その島の縁がクッキーを割ったように切れて崖にな

っているのもよく見える。あれも凍土層が溶けて崩れている垂直の崖に違いない。1枚1枚の田んぼは、不規則な多角形か円形に近いの多いが、四角な区切りになって連続しているところもあり、自然の造形には不思議な現象だ。よく晴れた空を映して、田んぼの形のくぼ地には真っ青な水をたたえて光っているのが大部分だが、水がなくて全体に草原化したものもある。

規模はここよりは小さいがこれに似た光景は、1979年のエクスカッションの折にコリマ川の下流に近いチェルスキーから川の上流へ向かうヘリコプターに乗って見たことがあったが、その時には上空からの写真撮影は禁止だと厳しく言われた。人もクルマも建物も、およそ人の気配は全くないのになぜかと参加者のひとりが聞いたのに対して、案内係りは、「法律による」としか言わなかったものだ。

さて、ほぼ 30分 が過ぎたところで、ヘリコプターはUターンしてチクシ空港へ向かった。帰路は半島とは湾を隔てて南岸の山がちな地域の海岸沿いである。先に登った山から見た地形とほぼ同じく、ゆるい起伏の緑の大地であるが、低い樹木が生えているように見える山もあり、谷間にかなりの残雪があるところもある。川が蛇行していてその川沿いが白く光っているのも雪か氷であろう。

空港が見えてきて、ほどなく着陸。4時20分。きっかり1時間の飛行だった。

思いがけない幸運な1日を終えて、ガタガタ道をトラックに揺られ、5時20分、船に帰った。昼食ぬきで、キャラメルを3個なめただけだった。夕食はパスタの一種と言うべきか、コンビーフとバターを混ぜて炒めたлапша(そうめん)が出てきた。

夜の8時なのに日射しが強く無風状態で、気温は27℃にもなる。湿度計を持っていなかったのでのどのくらいの湿度か分からないが洗濯をしてもすぐに乾く。

8月1日

8時、起床。早朝に福田氏がハエを追い払うために蚊取り線香をたいしたのは気がついたが、十分眠った感じ。今日も快晴ですでに24℃。1600年代にここへ来たオランダ人、デ・ロンクの記念十字架がチクシの西方にあるが、なぜか立入り禁止になっているなどの話を聞いた。

9時に朝食。食卓にパン、バター、ジャムもあったが、каша(牛乳で煮た粥)と紅茶。米ソ戦略核削減条約が昨日調印されたそうだと、言いながらルサコフ氏が食卓についた。

9時45分、トラックが来た。今日は運転台に乗せてくれた。乗り心地はこの方がずっと快適だ。11時前に、また、宇宙研に着き、測機のテストをした。この付近はわりに空き地が多い殺風景な場所だ。

ジープに乗せてもらって、港にある凍土研究所の基地(ヤクーツクの永久凍土研究所は各地に支所や観測基地をもっているようで、ここもそのひとつ)でしばらく休憩した。茶とアメのサービス。

12時半ごろ外に出て港の方へ歩いて行くと、外国人がきたという話が広がったとかで、カンカン照りの広場の一角に細長いテーブルを据えて、マンモスの牙の彫刻品を並べて待ち構えていた男に呼び止められた。こういう人たちはドルを手に入れるのが目当てだ。ごてごてした人物像、ナイフの形をしたもの、細かな彫刻品など20点ばかりがある。福田氏は前にどこかで見たのより安いと言う。せっかくここまで来たのだから何か買おうと思ったが、少し大きな物はかなり高価なので敬遠し、100ドルでどれか買えるか、とたずねると親指ほどの、いま少し小さいマンモス像、同じく小さな少数民族の守り神の像の3個だと言う。もうひとつ何かくれば買おうと言うと革ひものついたフクロウのペンダント2個を加えた。あまり安いとも思わなかったが、それで手を打つことにした。テーブルにハエがいっぱいたかっている。こうしたみやげものを製造販売することになったのだと、絵と品名を手書きしてプリントしたピラをくれた。カンカン照りで暑く温度計を見ると32℃になっていた。雑然とした港の中を歩き回る。「引越サービス」と日本語で書いたままのコンテナが物置か倉庫になっていたり、中古のトヨタ車が停まっていたりする。港の管理棟の食堂に入ってみたが、ずいぶん汚い。そこでひと休み。パンが1個75カペイカ。

また少し市内を歩いてみた。人通りもクルマの通行もあまりないが、たまたまエベンキ人だと名乗る中年の男に出会い写真を撮らせてもらった。汚水がたまつたくぼ地のそばを、ここには不似合いな真っ赤なワンピースを着た女性がひとり真新しい乳母車を押して行く。

福田氏が観測基地で気象の専門家との打ち合わせを終えるのを待ち、食料品店で買ったなま暖かいジュースを飲んだりして船に帰った。5時半。

部屋で蚊取り線香をたいてハエ退治。船から下りて湾(川)の水で上半身を拭き頭を洗い、ついでに洗濯もした。いつの間にか風向きが北西に変わったためだろうが、流木や木っ端が岸に集まってきて、はなはだやりにくい。

7時半、夕食。魚肉(生ではない)の入ったマッシュポテトがうまい。それに生のニンニクをかじる。チクシ市内で買った瓶詰めのコンポート(果物のシロップ煮)も出た。

雑談をしながら食べていると8時過ぎになって、天候が荒れてきた。今までの大陸内からの乾いた暑い空気にかわって、北極海側からの風向きになったのだ。

船が岸に打ち寄せられ、みんなで甲板へ出た。船のエンジンを全開にし、30トンもある船にどういふ効果があるのか分からないのだがロープを砂に埋まった岸の大きな流木にむすんで支え、そのロープを甲板の上でみんなで引っ張った。船が横倒しになるのを防ごうというのだろうか。私の力などは、役に立たないと思いながら、とにかく一緒になって綱引きをした。そのフリをしたに過ぎない。クニツキー氏は、その場面をさかんに写真に撮れ撮れというが、この場合それでは他人事のように傍観していることになるような気がして、それは出来ない。北極海沿岸の厳しい夏が顔を覗かせたのだろう。

無線連絡をしたのか、沖の方から救援の船が現われ、ロープに浮き輪をつけて流してよこした。なかなかその浮き輪が届かない。30分近くたったか、ようやくそれが流れついたところでサーシャが水に飛び込み、その浮き輪をつかまえてきて船に繋ぎ、救援の船に引かれて沖へ出た。危機を脱して船は北進し、高波のない湾の北岸で投錨した。もう10時半過ぎだ。寒さが強まってきた。

8月2日 8時起床 霧 11℃

無風で波もなくなっていた。東の方の台地に見えるバイジャラーハの頂上でタカのような大型のトリが鳴き交わしている。канюк(カニューク)というトリでレミングを餌にしているそうだが、後で調べてみると辞書には「フクロウ属の鳥」とか「たかに似た鳥」としか書いてない。シベリアのトリにはたいい和名があるはずなのだ。[補注:канюкはヨーロッパノスリ(*Buteo buteo*) タカ科ノスリ属の猛禽類の鳥]

9時、朝食。牛乳で煮たうどん(スパゲッティというべきか)に大量にバターを加えて食べるようにすすめられ閉口した。パン、ジャム、紅茶もある。どうしたのか聞かなかったが、昨晚の嵐で奮闘し、ずぶ濡れになって乗船してこなかった人たちが食事の席にいなかった。福田氏がエドマ層の話をして、来年からの予定などの相談になった。シベリア内の交通費はチャーター機が6,000ドルになるとか。

クニツキー氏とリアさんがチェスのコマを使って子供の遊びだというのをやって見せてくれた。船長も加わってカードゲームになったが、我われ2人は見ていただけだった。

午後3時ごろ、霧が晴れてきて船が動き出した。もとの停泊地へ戻るのかと思っていると、いつ仕掛けたのか魚網の引き上げが始まった。またまた大型の魚が今度は30匹以上もの大漁だ。嵐のせいで魚がたくさん網に入ったというようなことがあるのだろうか。甲板の上に網をひろげてみんなで魚を網からはずした。9.5℃に気温が下がった中での作業はなかなかたいへんだが、みな嬉しい気分だ。(写真16)



←写真16 大漁

5時過ぎからの食事にさっそくウハーが出てきた。クニツキー氏がずん胴鍋を運んできて、例のみな洗面器に取り分けてくれる。

食後、獲れた魚の塩漬け作業。樽がいくつも出てきてそれらに漬けていく。こうして漬けたのをヤクーツクまで持ち帰って、多分、冬まで保存するのだろう。

8時、曇っているが見通しがよくなり、もとの停泊地点

の方へもどるためボートを取り込んで出発した。結局、もとの位置ではなく1kmほど北の船着場へ着いた。そこにあったタンカーの廃船にのぼってみたいした。

10時過ぎ焼き魚が出てきて夕食。みな獲れた魚からとったイクラを、それぞれどんぶり鉢一杯ほど食べるのには驚いてしまった。

クニツキー氏が自分の家族のことなどを話す。先日はリアさんに日本事情や日本の家のことを聞かれたのだった。

8月3日

8時 起床。16°C、曇り

少し晴れ間あり。寝言をいったりしていたらしい。体調は良好だが、まだ、旅程の3分の1ほどだ。今晚ヤクーツクへ引き上げることなので荷物のまとめをしておく。昨夕、水に飛び込んで浮き輪を拾ったミーシャが帰ってきた。

11時に朝食。船長やクニツキーが出てこず、牛乳で煮た粥がたくさん残ってしまった。

ヴイコフスキー半島の付け根付近のハラゴールという所へ行くことになった。気温は20°Cに上がったが、上空に黒い雲が出て小雨になった。また南風になった。

迎えのクルマが来ず、船のキャビンに戻る。「三国志」(上)を読了。2時半になり、天気は良くなってきた。ボートで出かけることにして、2時45分に出発。水温17°C。今日は、我われ2人とリア、クニツキーの4人だ。東へ進みししばらくするとまたエンジンが止まるが、ほどなく回復。

4時にハラゴールのラグーン(潟湖)の岸に着いた。この一帯にもおびたしい流木が堆積散乱している。直径30cmほどもある材木になるようなものもあるが、ここは細かな木っ端が多い。やはり、ここでも汚物は見当たらない。岸に近い所にあった太い丸太の流木にボートを繋いで上陸した。ここは膝下までの長靴でも大丈夫だ。付近一帯には1辺が数mの大きなポリゴン(多角形土)の中に1辺が1m以下ほどの小さなポリゴンが多数できている。いろいろの形の座布団を敷きつめたようになっていて、それぞれにコケや草が生えている。これらの小さなポリゴンは現在の冬の凍結現象で出来るものだそうである。湿地のせいかわいらしい草花があるが、とくにワタスゲの白い穂が目立つ。小さな水溜りがあちこちにあり、大きな沼にはシギの群れが餌をあさっている。

この平原の真中に、焼け焦げて錆びた大きな鉄の塊のようなものがあったので近づいてみた。墜落したヘリコプターの残骸であった。

「日本だったら、こんなに放置したままにはしておかないだろうなあ。」

というのが我われの感想だ。以前に地温調査のために掘ったというホールがあった。

また曇ってきた。チクシの裏山には金があつて将来が有望だなどという話を聞きながら帰りを急いだ。ツンドラを歩くのはやはり疲れる。

8時過ぎにボートのところに着いた。ふと見ると、さざ波が寄せている水際に大きな骨のようなものがあった。クニツキー氏によるとマンモスの下顎だという。付近に歯が2、3個と足の関節の部分だという骨などが散乱していた。このへんに1頭分の化石があるのではないかと言う。記念かみやげに拾って行け、とすすめてくれたのだが重いので歯を1個と関節の部分というのだけにした。(これらはずっと後年に群馬県の自然史博物館へ寄贈した。残念ながらこの場面の写真はない。カメラのフィルムが尽きていたのかもしれない。)

その後船へ帰り着いた。我われの帰りを心配して船長が双眼鏡で見くれていたようだ。

夕食はうどんのコンビーフ煮、パン、ジャム、茶と слива (スモモカ)のコンポート(砂糖煮)。あわただしく、船長ほか船のみんなに別れのあいさつをして迎えにきた古びたバスに乗った。

10時前、空港着。偶然なのか事前に約束があったのか、私は知らなかったのだが、待合室でモスクワ大学のアルハンゴロフ氏に会い、福田氏が熱心に話を聞く。それによると来年あたりから、地方政府が外国の調査

隊から外貨をとる制度を発足させるということらしかった。中国がやっているのと同じ方式か。

搭乗手続きをクニツキー氏とバスの運転手に任せて、ベンチで休んだ。福田氏がリアさんをはさんでアルハンゲロフ氏と地下水論をさかんにやっている。この待合室を見まわすと、チラチラする白黒テレビに歌番組が映っている、錆びた暖房用の放熱器が取り外されて三段重ねにしてある、釘の付いた板や角材が乱雑に積み上げてある、ビュッフェは開店する様子なし、雑誌などのキオスクも閉まったまま...

11時30分、ようやく荷物の計量が始まった。大量の荷物を、苦勞してX線検査装置にかけて通過した。フィルムとカメラは装置の横の台に置いてだけで済んだ。

## 5 ヤクーツクへもどって

8月4日

0時12分に我われの乗ったヤクーツク行き機のエンジンが始動。ひどく蒸し暑い機内に、まもなく冷房が始まり、白く霧が冷氣口から噴き出すように見える。以前、ある人が夏にソ連機に乗って、これを暑い蒸気が噴射されると誤解していたが、前もって客室内の冷房をしておくサービスをこの国ではしないようだ。

3時20分、ヤクーツク空港に着いた。気温21℃とのアナウンスがあった。小雨だった。空港前に停まっていたクルマに乗って市内を走り、途中でリアさんを降ろした。自宅がその付近らしい。粗末な木造の平屋が密集した所の細い路地に入っていくのが見えた。

先日、木造家屋を見て歩いた時、リアさんに同行してもらったのは何か悪いことをしたような気がしてしまった。

先日と同じ宿に着いた。部屋も同じ。さっそく洗濯と入浴をした。コックをひねると、錆びの混じったひどい茶色の水がしばらく出つづけて、ようやくきれいな水になった。

朝の5時近くに寝て10時に起きると、すでに朝食の用意ができていた。コーヒーはどうかとすすめられたが、シベリアでうまいコーヒーにありついたことがないので、紅茶にしてもらった。目玉焼き2個に細いアスパラガスが2本、肉入りパンと食パン、バター。上品な感じの初老婦人スベトラーナさんが給仕してくれた。

ジェジュールナヤ(廊下にいるカギ番)の椅子にもと研究所運転手氏が座っていて、私に、おれのダーチャ(通常、「別荘」と訳されるが住居付き菜園)へ来いとか、マンモス牙を買えとか言う。一応、断ったのだが、すぐにクルマ(古いベンツ)から5kg余りの丸太のような牙をとってきて、1kgあたり1000ルーブルだと言う。日本人は金持ちだと思っているかもしれないが、日本人でも学者は貧乏なんだ、私もそのひとりだ、と言ってその交渉は終わりにしてもらった。話のついでだがヤクーツク、モスクワ間の航空運賃は200ルーブル(外国人はその50倍なのか)、ダーチャは3000ルーブルだとのこと。借りのか、買うのか聞き忘れた。1ドルが30ルーブルで、だそうだ。

昼はヤクーツクホテルで、久しぶりのトマトなど新鮮な野菜のサラダが出た。

午後は市の北の郊外へ行った。ジャタイという造船の町があるそうだが、そこへは行かず、目的は郊外の放牧地周辺にある凍土現象を見て歩くことであった。クルマがかなり走っている道路脇に、高さが10mほどの丸い丘があって、その頂上に記念碑が建っている。ヤクーチアにおけるソビエト政権のために忠誠を捧げた清らかな心に頭をたれよ...、というような意味の碑文がある。その丘は地下の氷が押し上げたピングゴだそうである。近くに川の三日月湖の小さいのがあり、その下のターリクと呼ばれる、かつての不凍泥土がその氷のもとになっている、というわけだ。周辺の草地をよく見ると好塩性植物つまり、塩分の強い乾燥地に生えるヨモギの一種(アルテイミアと言ひ、苦いが牛は食べるそう)など、中央アジアの砂漠に近い地域とも共通するような植生である。牧地のずっと遠くからホルスタイン種と思われる白に黒いブチの牛の群れが近づいてきて道路を横断して行く。馬に乗ってムチを手にした牧夫がひとり、群れのあとを追ってきた。ロシア人の男だ。200頭の牛を交代で放牧しているコルホーズ員だそうである。

このレナ川中流域は昔から豊かな草原で、トイマダ・ステップとよばれヤクート人たちが牛や馬を放牧していた地域だ。「トイマダ」の語源は広い谷という意味だとか、場所という意味だとか言われている。



道路沿いにキムジャムツイ村という数戸の家が並んだ集落がある。そのうちの1軒に寄ってみた。屋根の天辺にテレビアンテナの立つロシア風の農家だ。ここに30年住んでいるというゲルグ・ウラジーミロヴィチ氏61歳のお宅であった。個人では家畜を持たずコルホーズ員で、息子さんは市内に勤めており、買い物などもほとんど市内まで出かけるそうであった。

ずうずうしくもお宅の中まで入って部屋を見せていただいた。ご本人だけでご家族の方々は留守だった。

案内されて入ったのはそれほど広くない居間で壁から天井まで白く塗られている。壁際にソファがあってそこに半分は壁まで掛かるシカの刺繍のしてある豪華な絨毯が敷いてある。部屋の真中に丸い柱があってそれに紡ぎかけの糸のたまが結んである。暖炉があってこの時期でも火を焚くことがあるように炊き口が開いて燃えさしがある。まだ、シングルベッドのある部屋やキッチンなどまで見せてくれた。

それよりもクニツキー氏が頼んで見せてもらったのは、床板を上げたその下に作ってある地下室である。木製の階段があって下へ降りられるようになっている。かなり大きな物置というか冷蔵庫にもなるだろうか。前に読んだ本に、シベリアへ行ったロシア人がモスクワへ送った手紙で、当地では夏でも地下が凍っていて、床下の地下室が掘れないと言ってきた、という意味のことが書かれていたが、こういうものことなのだと分かった。

裏庭へ出るとかなり広い菜園がある。庭の一角に片屋根の小さな小屋のようなものがあり、主人にそこへ案内された。上から垂らした日除けの白い帆布を捲り上げると木の扉があってそれを開くと、何と地下深く延びる斜坑があった。氷室(ひむろ)だ。下の方は凍土層であろう。冬に湖の氷を切り出してきたのを夏まで保存するのだそうである。

ふたつ目のピンゴに登った。周囲には柵をめぐらせた畑がたくさんある。先の方には小屋のような小さな家は何軒も見えた。ダーチャ(別荘)の団地のようなところか。夕日を浴びながら畑仕事を終えて帰宅するらしい人が三々五々、細い道を家の方へ歩いているのは、だれかの絵にありそうな風景だ。



←写真17 「おおきなかぶ」を掲げたダーチャの家

クニツキー氏のダーチャへ案内された。随分広いではないか、と思った。日本では見られない野菜類が茂っており、ジャガイモもたくさん植えてある。奥の方には、これもかなり大きな温室がある。その中へ入って見るとニンジン、トマト、キュウリなどが非常によく育っている。先ほどの農家とは違って、研究所員を勤めながらこれまでやるのは、ただたんに趣味だとか好きだとかいうだけでは

できないだろう。隣は同じ研究所の仲間だという人のダーチャであった。ここの小屋というか家は凝っていて、玄関の上の屋根にロシア民話「おおきなかぶ」にある、おじいさん、おばあさんから動物たちまでが連なって大きなカブを畑から抜こうとしている、という様子を板で切りぬいてきれいに着色したのを掲げてある。(写真17)

ダーチャの家というのは、それぞれ工夫を凝らせて「積み木のオウチ」のように手作りでも何ヶ月もかけて造るそうであるが、シベリアの冬の寒さに耐えられるようなものではなく、大抵は夏しか住めないそうである。

こうして栽培される野菜類は、ほぼ自給できる種類や量だそうで、研究所員の給料が遅配だとか、食料品店に物がないとかわかれても、だれか飢え死にしたというような話を聞かないのは、こうしたダーチャを持っている人が多いからだろう。

北緯60度以北にある、この中央ヤクーチア内陸部の冬は $-60^{\circ}\text{C}$ になることがしばしばあり、年平均気温は

-10℃なのだが、夏には+30℃を越える日もあり、高温と長い日照時間によって、ほぼ同緯度のヨーロッパ・ロシアよりは植物生育期の積算温度が高く、植物の生育は旺盛である。カラマツを主とする大森林(タイガ)も永久凍土層の上に生えている。ただ、降水量は少なく乾燥が激しく、レナ川からポンプ揚水をして灌漑をしている畑地もある。

このような地域から北へ風が吹くと先日のチクシ付近のツンドラでも晴天に恵まれ、気温も高くなるわけだ。

その晩は、6時からクニツキー氏宅での晩餐会であった。研究所の裏にある団地の集合住宅(官舎)にお宅があった。奥さんと2人のお嬢さん、それに隣の家の青年、リアさんと我われ2人の合わせて8人の会食である。

新鮮な自家栽培の野菜を豊富に使ったご馳走が次々と出された。肉や魚の料理もウオッカ、コヤック...などのアルコールも出た。私は、ほとんどアルコールはだめだが、ここに限らず、どこでも酒類を無理強いされないのは、ありがたい習慣だ。

宴もたけなわになると、青年がギターを弾く。準ミス・ヤクーツクだという上のお嬢さんのマーシャが占いの本を持ち出してきて星占いを始める。私はこの手のことを全く知らないのだが、彼女は私の生まれた月日を聞くと、その本をめくりJ E B (獅子座)のページを開きその1箇所を指さして幸運を喜んでくれたが、残念ながら何のこともさっぱり分からなかった。以前、私はおとめ座だと聞いたことがあったから、なおさらだ。

それからマーシャ嬢はイヌのプーニャというのを抱いて写真を撮ってほしいとのこと。クニツキー氏は飼っている白いラットを腕から肩へと這わせて見せてくれたりする……

にぎやかな宴会がつづいて、もう11時になった。帰りぎわにお嬢さんたちが福田氏と私にプレゼントをくれた。私は金色のスプーン、ホフロマ塗りの木の匙、盆をもらった。帰路、一家でホテル前まで歩いて夜道を送ってくれた。これも来客へのもてなしの習慣のうちなのだろうか。恐縮してしまった。

ズボン、シャツ、下着まで全部を洗って寝る。朝までには、だいたい全部乾く。

8月5日 曇ったり晴れたり 午後には28℃になった。

8時起床。朝食は目玉焼きとトマトのサラダ。

9時半から研究所で所長も同席して打ち合わせ会。カメンスキー所長にチクシでの感想を聞かれ、お礼を言った。この席で同所長は、当地では研究者も含めてロシア系の住民はヤクーツ系住民やその他の少数民族といかに友好的にやってくるかが非常に重要なのだと強調された。

ソ連科学アカデミーシベリア支部の組織の話の中でヤクーツクの研究所には総勢370人がいるそうである。ポポフ氏という78歳の研究所員がその席にいた。その他にノボシビルスクの支所のこと、マガダンの極東生物学研究所のことなどについても説明を受けた。ついでながら、ヤクーツク大学の学生総数は7,000人だとのこと。

これからの我われのための日程について聞いた。今日の午後にコリマ川沿いのチェルスキーへ行くこと、その後、レナ川支流のアルダン川をチクシのとは別の研究所の船でさかのぼること、オホーツク海沿岸のマガダンから、ベーリング海沿いのアナドゥイリへ行き、そこからハバロフスクへ戻って帰国するとのことであった。

私のメモ帖にはこの席で聞いたこととしてツーリストのレートは100ドルが60とか39ルーブル、マーケットでは2,760ルーブルである、などとあるが、聞かされた、あるいは人によって違うので、わけがわからない。マガダンから先の航空運賃はドル払いになることを聞いた。この旅程の終わり近くにモスクワでクーデター事件が起こり、緊張する事態になった(後述)。為替レート以外にいろいろ混乱した情勢だったわけだ。

研究室の地下に掘られている永久凍土層のトンネルの奥の研究室・実験室を見せてもらった。いくつかの実験器具が備えられている。壁や天井は霜が厚くなってデコボコに氷の塊で覆われたようになっている。このトンネル内は-4℃だから、外気とは30℃以上の差があることになり、暑さのなかで防寒服を借りるという変わったことをする。ただ、低温室というのは、現在では研究施設だけでなく、食品の冷蔵倉庫などで日本でも各

所にあり、自由に温度を変えられるから、このトンネルは自然の凍土層にあることに、研究上意義があるであろう。(写真18)



←写真18 凍土層の中、研究所の地下実験室

クニツキー氏宅でペリメニ(水餃子に似た料理)の昼食をごちそうになった。

2時すぎにホテルへ戻り、荷物を研究所へ運んで運搬を託してから空港へ向かった。空港では外の日差しが強いベンチで待った。台を据えて指輪を売る女性、タシケントから来たというスイカ売りの男性がいる。

## 6 コリマ川のチェルスキー

4時になって搭乗が始まった。40分してようやくエンジンが始動した。離陸して窓から見るとエンジンカバーが開きかけたようになってフラフラしている。双発のプロペラ機でアントノフ24-Bというのだ。

レナ川の左岸にある空港を出るとすぐ眼下にレナ川が見えるが、川筋が何本もあって中州というのか島というのかが多く、どれが本流か分からない。これらの島は豊かな牧草地である。

やがて樹木のないツンドラになり、そのなかを河川が大きく蛇行したり、三日月湖をつくったりしているのが見えてきた。

7時50分にチョクルダフへ着陸した。給油のためなのだろうか。周辺は一面のツンドラだが、集落がある。狩猟、漁業、トナカイ飼育などを営んでいるという。空港の建物の外に無骨な形をした三輪のバイクが2台停まって子供連れの家らしいのがそれに乗って談笑している。

ここは昨年(1990)年のシンポジウムでインジギルカ川上流の山の中へヘリコプターで飛んだ時に中継点になり、この空港の砂利の滑走路の一隅でヤクートの毛皮の民族衣装をまとった男性2人、女性4人の歓迎式を受けた。老人の男性は上部にウマの彫刻の付いた錫杖を突き、若い男性はハムース(口琴)を弾き、女性たちは木彫りのチョロン(ジョッキ型の酒盃)を捧げていた。祝詞を唱えながら火に酒をそそぐ儀式で客を歓迎する意味があるとのことであった。

また、福田氏によるとこの予備調査の後、本格的調査の際、この空港の滑走路付近で高レベルの放射能を検出したという。地下に放射性廃棄物でもあったのではないだろうか。

8時半、給油を終えて再発進。ほとんど快晴。インジギルカ川からコリマ川にかけての一带は有名な「ピューマツンドラ」(豹紋ツンドラともよばれる)の湖沼地域であるそれが見えてきた。豹の毛皮のように丸い湖沼が一面に分布していてそれが視界の果てまで広がっている。ああ、これか！と感動したが、もう薄暗くてカメラは使えず、窓に顔を擦りつけるようにして眺めていた。冬は、おそらく、ここは果てしない白い平原になるのだろう。そのうちにガスがかかって見えなくなってしまった。

9時50分、コリマ川右岸の縁にあるチェルスキー空港へ着陸。出迎えてくれた現地の研究者ダトロフ氏に車で平屋の ГОСТИНИЦА ПОЛЯРНАЯ (ポーラーホテル)へ案内された。極圏ホテルの意味なのだろう。時計を2時間進めた。

チェルスキーに来たのは2回目だが、街はいやに殺風景で、集合住宅が目立つだけで、あまり見るべきと

ころはなさそうな感じである。人口は7,000余りの都市型集落。とはいえ、このまちの中でも人通りはほとんどなく、クルマもあまり走っていない。スーパーのような雑貨屋へは行ってみると、がらんとした商品はあまりないのに、なぜかヴェトナム製の醤油の小瓶ばかりがたくさん置いてある。たまたま輸入されて来たのを並べた感じであった。

ダトロフ氏宅で夕食をごちそうになった。クニツキー氏がみやげにヤクーツクで買ったタシケント産のスイカを出した。甘くてうまい。この食卓でも塩漬けのからい魚が登場した。ヴェトナムの醤油が瓶のままテーブルに出っていたので味わってみるとかなり違和感があった。魚醤の一種なのか。氷の専門家だというセルゲイ・ラズモフ氏も同席した。当地の観測基地にはスタッフが10人いるとか、下コリマ川地域の海岸では凍土の融解による海崖の侵食が年に8～20mにもなるなどの話を聞いた。

8月6日 チェルスキー時間で8時半に起床。快晴で風が強い。

昨夜は、よく眠れず何度か目を覚まして、明るいので電灯をつけずに「三国志」を読んで時間を過ごした。

食事は РЕСТОРАН ОГНИ КОЛЫМЫ (レストラン コリマの火)と書いた看板の食堂だった。メニューには別に変ったものは出てこなかった。今日は私の妻の誕生日で原爆記念日でもあるという話をしてみんなに驚かれた。

チェルスキーの市民には航空関係もいるが70%が港湾関係で、夏の北極海航路とコリマ川航路の中継港だとか、この付近の川幅は広いところは3キロあるなどと聞きながら、近くの中を案内してもらって歩いた。川に近いところにはヤナギの一種がある。森林限界はこれより30キロほど下流だそうで、森へ入ってみると、それほど大木はないが、カラマツのかなり豊かな森林地帯で地床植物も灌木類がよく茂っている。ブルーベリーがよく目につき、採っては口に入れた。食べてはみなかったが赤い野イチゴのような実もある。まだ熟していないコケモモもある。

20～30mの崖になっている谷の縁へ出た。対岸を見ると、森林が崖の縁まである。その樹木が崖が崩れるにつれて根こそぎになって下へ倒れ落ちている。崖の面を見ると地表面から1～1.5mほどから下が凍土層になっている。

クルマで川の上流方面へ向かい、Зеленый мыс (「緑岬」ということか)の観測基地へ行った。名前の通り、コリマ川へ突き出したような岬のきれいな草地にあった。大きくうねるコリマ川のかなたに富士山型の山頂が雪で白い山が見える絶景である。

1976年にこの川を船で下ってチェルスキーへ来た時、「チェルスキー山」、正式名称は、г.Белая(白山)975mと聞いたが、その際に4人一緒だった日本人の間では「コリマ富士」と呼んだのだった。その学会旅行の時は、ツンドラの上空からの撮影を禁止されたり、先述したように高さ50mほどの崖下でその凍土層は水成か風成か、つまり水底に泥が堆積したものか、砂塵が堆積したものかについてソ連の学者を中心にした大論争があって驚いたり、マンモス、野生ウマ、トナカイなどの化石を拾ったり、別の場所では真っ白な氷の崖のそばの砂層からバイソン1頭の化石の発掘を試みたりしながら船で6日かけてこのチェルスキーまで戻った。チェルスキーの少し上流のニジネコリムスクにコリマ地方の最初の探検をしたチェルスキーを記念するオベリクスがあると案内者が説明した。当然、そこへ立ち寄るものと思っていたところ、沖合いを全速力で通過してしまい、オベリクスらしいものが遠くに見えたような気がしただけだった。同行のアメリカ人たちが「強制収容所でもあるのだらう」とぼやいていたものだ。

この基地には英語で、極東地理学研究所生物観測基地という意味の表記がしてある。グリチンスキー氏他3人のスタッフがいて大気中の二酸化炭素の観測などを行っているとのことで、ソ連製のガス分析器があった。茶、ケーキ、ビスケットなどが出て専門的な話のほか、いろいろな雑談もした。このあたりでは冬の積雪は1mほどだ、チェルスキーでは建設工事がいやに多くて、それがいつまでも終わらないのは、ソ連経済が病気になるっており、社会主義の結果なのだ、いや、問題は主義ではなくて人の信頼が失われていることだ、など

など.....

昼食をごちそうになった。うどんスープ、焼魚(ネリマという魚)、ポテトフライ、トマトにニンニクを擦りおろしてピネガーをかけたサラダ、大きな餃子、リンゴジュース。当地の地方商業がどうこうという話があったが、この結構な食事は研究所だから特別だというわけではなかろうと思った。

市内に戻って、地下冷凍庫を見学した。先日ヤクーツクの郊外の農家で見たのと似たところがあるが、あれより大規模だ。段丘の下の所に大きな斜坑を掘ってあり、それがかなり深い。壁面には冷凍機のパイプが通っているから、自然の凍土層の低温をさらに補って温度を下げているのであろう。トンネルの奥には広いスペースがあって凍った魚がそのまま積み上げてあったり、肉でも入っているのか大きな布袋が積んである。しかし、私の温度計は $-12^{\circ}\text{C}$ までしか下がらなかった。

5時半から遊覧船を貸切りで借りて1時間ほどコリマ川を周遊した。岸には多数の小型のモーターボートが並んでいる。水上を走っているのも数隻ある。みな市民のレジャーボートらしい。こういう僻地に勤務すると給与は高いが使い道がなく、こうしたボートなどを買っていると、この前ここへ来た時に聞いた記憶がある。

北風で気温 $16^{\circ}\text{C}$ 、アノラックを着ないと外には出られなかった。波もかなりある。この川の水はかなり澄んでいる。操舵室で航路図を見せてもらおうと最深部は28mほどである。

少し上流へ向かうと水面から右岸をやや高く築いて作った空港があり、川沿いに滑走路がある。この空港の入り口に大きな一本柱が立っていて、チェルスキーとロシア文字を縦に並べて書いてあるが、前回その柱を入れて空港の写真を撮ろうとしたらだめだと言われ、空港に背を向けて柱だけ1枚撮ったものだ。

8時からСТОЛОВАЯ 1(食堂 1)と書かれた所で夕食。当地のダトロフ、ラスモフの両氏も同席した。自国の社会の不能率、研究体制の遅れなどを自嘲気味に話すのには不快感を感じる。見ていると、この食堂の客でタバコを吸いたい人は席をはずして外に出る習慣が徹底しているのには感心した。9時過ぎになると、ここでも楽団が始まった。大音響で話も出来なくなるのはどこでも同じか。

## 7 またヤクーツクへもどって

8月7日 7時半起床。 $20^{\circ}\text{C}$  晴れ ほとんど無風。

8時にホテルを発って、まず昨夜の食堂で朝食。プリン(薄焼きホットケーキ。クレープの一種というべきか)、トナカイ肉のフライにコウリヤン添え、パインジュース、紅茶。

9時、またアントノフ24-B型機。30分して離陸。今度はピューマツンドラの大小の湖がよく見える。ピンゴらしい丘ないし島のある湖もあり、それらはやはりポリゴンなのか。写真も何枚か撮ったが、後で見ると高空から、しかもガラス窓越しだったので、あまり鮮明には写っていなかった。(写真19)



←写真19 ピューマツンドラ(約1万m上空から)

11時にチョコルダフに着陸給油。 $19^{\circ}\text{C}$ の南風。12時離陸、時計を2時間もとに戻した。1時15分、ヤクーツクに着く。曇り空で気温 $22^{\circ}\text{C}$ 。

昼はレストランでたいして変わりなし。翌日からの予定などを聞いてから、ホテルへ戻り、湯が出ないので水シャワーを浴びた。

夕食は、8時から10時まで、またもク

ニツキー氏宅でご馳走になった。

8月8日 晴れ、22℃。

8時に朝食。アメリカからの客がきたとかで、従業員の人たちは何かあわただしそうだ。ひとり先に着いて、あとからもう2人くるのだそうだ。

研究所へ行き、所長と打ち合わせ。福田氏はそれまで休暇をとっていたというニーナ研究員と先日設置した測機のチェックに行った。

ここで所長から、サイトー・サン(この研究所関係の人たちには日本人には苗字にサンをつけて呼んでもらうことにしていた)は文科系の人のようだが、よかったら語学・歴史学研究所(後に人文学研究所)の所長で民族学者のイワノフを紹介するがどうか、との提案があった。

ぜひそれはお願いしたいと言うと、その場で電話をしてくれて、さっそくリアさんの案内で出かけることになった。私の知らない間に、カメンスキー所長とリアさんの打ち合わせで、以後のこの午前のスケジュールが立てられたらしかった。

クルマで走り市内の地質学研究所についた。そこの2階に間借りしているのが目指す研究所であった(後年、独立した建物を新築した)。

どうやらイワノフ所長はじめ、みなヤクート人のスタッフらしい。所長は私ほどの年齢の方でにこやかに迎えてくれ、挨拶をすませた。私はもともとシベリアの少数民族、とくにトナカイ飼育民に強い関心がありその現地調査が出来るような態勢作りがしたい旨を話した。すると、イワノフ氏もぜひともその共同研究をやりたいとの返事で、すぐに英文の書類を一枚渡された。それは、とくに私が訪ねるから作ったのではなく、外国との学術交流を始めようという機運になっていて、いずれかの外国の研究者とのコンタクトのために作成してあった書類のようではあったが、そこへ私がかたま訪ねたように思う。とにかく私は日本に持ちかえって十分検討することを約束した。書物を1冊プレゼントされて退出した。

ソ連崩壊後、1993年からその研究グループを作ることが出来て現地でのシベリアの民族学的研究がスタートしたが、それにはイワノフ所長の力に大きく頼ることになった。

市内の書店に寄って、数冊の本と地図を買った。さらにリアさんに案内されて歴史・文学博物館というところへ行く。ヤクート人の伝統文化を知るためのさまざまな展示がしてある。江戸時代の漂流民、大黒屋光太夫の述べた牛糞を塗って造る冬の家、というのもコンクリート製ながら野外に造ってある。今はホトンといって物置や家畜小屋として使われているが、この実物を最初に見たのは1976年に学会旅行で、凍土の観察に行きレナ川をここから下った右岸の森林の中のサルダーハ・アラースであったが、ろくに写真も撮させてもらえなかった。ここは極北で例外なのだ、これがソ連だと誤解されては困るのだと案内者に言われたのだった。しかし、そのような時代が終わろうとしているのだ。

打ち合わせ通りのクルマの迎えが来ないということで、バスに乗り、さらに通りかかったジープに乗せてもらってホテルまで送ってもらった。

翌日からのレナ川右岸の支流アルダン川行きのために荷物を整え、それをクニツキー氏の研究室へあずけに行き、そのあと、いつものヤクーツクホテルのレストランで昼食。

小雨が降ったり強い日射しがあつたり不安定な天気だが、涼しくなった。

研究所へ戻って、クニツキー氏の研究室で福田氏がクニツキー氏とポリゴン論をはじめたが、私は途中で退席してホテルへ帰り、明朝4時出発と聞いたので休息をとった。

5時半過ぎ、福田氏が戻り、今晚はルサコフ氏宅でご馳走になることになったとのこと。

クニツキー氏宅と同じ団地にある同じような間取りのお宅へ招待された。奥様と小学生の女の子さん、そ

れに近所の中年の男性も同席した。

ここのご馳走も自家栽培の野菜類をたっぷり使ったいろいろな料理が並んだ。アルコール類もちろん何本か。お子さんが可愛いおもちゃなどを見せてくれる。奥様からは、ご自分で作ったガラスに挟んだ花の咲いた野草の押し葉をプレゼントされた。帰りには、お嬢さんが大きなイヌと一緒に外まで見送ってくれた。

## 8 レナ川支流のアルダン川流域

8月9日 薄曇

午前3時半起床。昨夜準備した3個の荷物を持って出た。4時にくるはずのクルマがなかなか現れない。そこへクニツキー夫妻が旅行の服装でやって来た。クルマも来て出発。途中で例の木造平屋住宅の集まった所でリアさんを拾った。遠慮深い母親らしい小柄な人が見送って来ていたらしくチャリと路地の奥に見えた。

レナ川の港で、4時45分、定期航路の客船に乗った。乗客はほとんどヤクート人でみな大きな荷物を持って田舎へ帰る様子である。前から2列目の席に座る。5時出航。大きく港内を旋回して下流方向へ向かった。左手の岸壁には大きなクレーンが林立している。本流らしい広い水域に出ると大きな貨物船が航行しているのが見えた。水はきれいだ。

水位が上がれば水没しそうな島か中州が次々と現れる。草原らしいのもあれば砂州になっているものもある。先日、河口付近で見た大きなイカダもこれよりずっと上流からこの豊かな流れを下って行ったのだろう。

8時、右岸の大きな支流、アルダン川との合流点に達して、船は右に回ってこの支流へ入る。これもかなり大きな川だ。

席の前方の壁にテレビが置かれていたらしい四角な枠があって、通る人が先ほどから、何人もそれに頭をぶつけるのが気になる。

この客室の出入り口のドアに注意書きがある。法律用語か読みなれないロシア語だが、

飲食厳禁、 可燃物・爆発物の携行禁止、 違反者は下船を命ずる。 水上交運公社
---

というような意味らしい。

8時17分、最初の港へ停泊。54分には次の港。

9時過ぎ、朝食。クニツキー氏の大きなリュックから、キュウリ、トマト、揚げパン、ジャム、ゆで卵、紅茶の入ったまほうビン、カップなどが次々と出てきた。飲食禁止では、？

酔っぱらいの男が前の席の2人の女性のところへ来てはクダを巻くのがうるさい。船内は27℃だが、暑さを感じない。しかし、外へ出てみるとかなり寒い。トイレが意外に広くて清潔。

10時50分、港に停泊。12時に停泊した港では給油のため20分停まる。出発して20分でハラオダナと読める港に停まった

1時、昼食。またまた大きなリュックから次々と現れるゆで卵、ソーセージ、チーズ、パン、キュウリ、トマト、自家製のジュース、紅茶のまほうビン。クニツキー夫妻が空いた最前列の席で準備してくれる。大きな重そうなリュックを担いで来たわけがわかった。

1時半、ウスチ・タッタ港に着く。タッタ川との合流点か。船を係留した浮棧橋だ。しかし、ここまで港の近くには人が住んでいる気配がなく、ここまでに船が停まった所で下船した人びとはどこへ行ったのだろうかという感じである。川からかなり歩いて行くのだろうか。



←写真20 宿泊した研究所の船

ここにも研究所の所属船ГЕОКРИОЛОГ号(凍土学者、この語は多分ギリシャ語起源)が待っていて、それに乗りかえた。先日のチクシの船より小ぶりだが、新しそうできちんとした寝室があり、窓には蚊よけの網も張ってある。森林地帯(タイガ地帯)だから蚊が多くて、これが必要なのだろう。船尾の船倉には冷蔵庫が2つある。(写真20)

2時45分に船が動き始め上流へ向かった。寝不足で疲れていたのので昼寝をした。4時頃起きてみると、みんな茶を飲んでる最中であつた。

シャワー室があり、それを使わせてもらった。まだほとんど水しか出ないのだが、チクシの船より広くて利用しやすい。

6時過ぎ、高い崖が左手に見えてきた。マンモスヒルという断崖である。これは上層部近くまで氷ではなく岩の崖だ。昨年(90年)に地質シンポジウムで来た時に見学者のために作ってあつた仮設のハシゴが残っているのが見えた。

7時半、本流を離れて島かげに停泊して夕食になる。カンヅメの魚入りのライスに野菜サラダ。朝からの食べ物、みなクニツキー夫妻が持って来てくれたようだ。

船に乗り組んでいたのは船長を含めて5人、うち研究所員は2人だと紹介された。

晴天、無風。10時前に就寝。

8月10日

晴れ、6時に起床。室内21℃、外気19℃。

起きて見ると、朝から船べりで魚釣りをしていた。ミミズを餌にしている。ほとんど入れ食い状態で小魚が次々と釣れている。大型の魚を釣ろうと小魚を餌にした人もいたが不首尾。クニツキー氏が手早く魚の内臓を出している。

銃をもって森へ入っていた船員が、獲物はなく赤い смородина (スグリ)の実が沢山ついた枝を持って帰ってきた。

9時から朝食。釣ったばかりの魚がフライになって食卓に出てきたが、小骨が多くてなかなか食べられない。10時過ぎに7人でゴムボートに乗る。ひもを引っ張って起動させるエンジンがなかなかかからなかったが、やっと出発。大きくカーブして3mほどの垂直になった土の川岸に近づくど地表近くから1.5mほどに白く楔状の氷が見えていた。教科書的なポリゴンの氷楔というのだ。

反対側の高い崖に向かい、昨年登った仮設ハシゴのあるところでボートを下りた。

このハシゴや階段はシンポジウムの現地見学者のために主催者があらかじめ生木を切って水面近くから高い崖の上まで設置したらしい。Мамонтова гора (マンモスヒル)と言われている崖で、大きな崖 Лёкe-хая(リョーケハヤ)と、もともとはよんでいたそうである。マンモスの化石が出るという意味の崖というわけではないらしいが、昨年来た時には崖下の岩の上にカラカラに乾いたマンモスの脚などの化石らしいのが数個標本のように並べてあつた。

水面から50mもあろうかという高い岩の断崖である。水成の堆積層らしく細かな砂に砕けて風で飛ばされるのがチョークの粉状だ。10~20mおき程の間隔で崖に上から楔形の谷を刻んだようになっている。もとは氷の楔があつた跡なのだろうか。



崖の上は草や樹木が茂っており、その地面の下には凍土があって溶け出している部分がある。この地域には450m以上の厚さの含氷層(凍土層)があるそうで、木の化石があった。

崖っぷちにヤクートのシンボルとも言える、昔の馬繋ぎの柱を再現したのが建てられ、それにひもが横に張られてそれには腕時計のベルトとか安物のネックレス、布切れのようなものなどが吊るしてある。本来はヤクートの人の自然崇拜あるいはまじないを示すものだが、これは今年のシンポジウムの際に飾りとして作られただけのものだ。

12時過ぎに船に戻った。気温は20℃、水温を計ってみると17℃であった。船に残っていた人たちは、また、釣りをしていたらしく横縞のある20cmほどのオークニのほかソローガ、イエーレツなど朝食にフライになって出てきた魚がバケツに何匹も入っていた。

12時半に再び下流へ向かってボートを出発させた。右手に高い崖が続いているが、下の方は水成岩、その上がice complex(含氷層)、さらにその上に樹木の生える活動層という構成の崖である。この付近で水深がもっとも深い所は38mもあるとのことである。

小さな島をまわって別の崖下にボートを着けて上陸した。この付近の森林にはカラマツにトウヒが混じっている。

船に戻って2時から昼食。ボルシチが出た。気温が上がって暑くなってきた。

またボートに乗って出発。今度はクニツキー夫人も同行し、3時にまた別の崖下に着いて上陸した。

航路標識が建っている尾根沿いに登った。小さなポリゴンのクラック(亀裂)があったり、クモの巣がかかっている歩きにくい。ウサギの糞があるところを見ると、今朝、銃を担いで出かけたのは、ウサギを狙ったのかも知れない。ここでも不思議に蚊がいない。

3時半、森林火災に遭ったあとのカラマツ林に着いた。黒く焼けこげた直径5~10cmほどの枯れ木がましく林立している。火災に遭うと地面の下の凍土が溶けやすくなるらしく、小さなアラースのくぼ地が崖際では逆三角形あるいは楔形の崩壊谷になりかけている。溶けて崩れかけた崖の縁を2、3m恐る恐る下りてみると、白い大きな氷塊とドロドロに溶けた黒い土がむき出しになっており、泥はるか50mほど下の川の縁まで黒い色の帯状に流れ落ちている。この崖も下の方は湖底堆積物だという。

5時頃、船へ戻った。クニツキー氏は、すぐにミズをとってくるというて出て行った。船べりから岸の草が茂ったところの水面にカエルがいるのが見えた。冬にはマイナス数10℃にもなるのにミズやカエルはどうして越冬するのだろうか。こうしたことは生物学か生態学の人でないと興味を持たないらしく、ここでだれに聞いても答えがなかった。

今朝から私も10匹ばかり魚を釣ったが、みんなの分を合わせると50~60匹にもなった。また、みな暇をみては森、というより藪、に入っていくのは木イチゴの類を採るのに熱心だ。スグリ赤いのと黒いの(フレップ、トラップというのがこれか)が随分たくさん採れる。

8時、夕食。ピローグ(ピロシキ)、野菜サラダ、釣った魚。ジャム、紅茶...

夜、暗くなった川原で福田氏が焚き火を始め、釣った魚を串刺しにして火の周りに立てていた。串にするのに適当なものがなかったので、流木の小枝などを使っている。焼けたのをもらって食べると、なかなかうまい。これで、塩があるといいのになあ、と言うと、リアさんがさっそく塩を持って来てくれた。こんな魚の食べ方は珍しいのか、何人もが試食に来た。

クニツキー氏は暗闇の中を遠くまで釣りに行ったらしい。奥さんが“ Где (グジェ)クニツキーサン?” (クニツキーサンはどこ?)などと我われの言葉使いをまねて、さがしに行った。

8月11日

6時半、起床。快晴無風、15.6℃

クニツキー氏が何かおしゃべりをしながら、もう魚を釣っていた。日曜日なので、今日は休日にするとのこと。昨夜、川に網を入れておいたそうで、それを引き上げたボートが帰って来た。チクシでみたのとは種類が違

い小ぶりな魚が多いが豊漁だ。60cmほどのシチューカ(カワカマス)数匹、シーク、10数匹、オークニ数匹、ナリム(ナマズ?)その他。 (写真21)ここでも、また、塩漬け作業になった。私はもう一眠りしようと思って船室へひきあげた。



←写真21 比較的大きな魚。左上から右下に見えるのがシチューカ(カワカマス)

9時半頃起こされ、デッキへ出て紅茶と布林、さっそく作った赤スグリのジャムをごちそうになった。そのあと、朝食だというわけで、朝、獲ってきたカワカマスがフライになって出てきた。これはなかなかうまい魚だ。

11時過ぎ、イチゴ採りに行くとのことで、6人でボートに乗って出かけた。

昨日見た森林火災の跡の崖の下へ着いた。見たところ、かつて火災で焼けた跡地には好日性の広葉の灌木が生えて藪になり、そこに木イチゴ類もたくさんある。

クニツキー夫人が水着姿になって、その灌木の茂みのなかで一生懸命イチゴを採っている。以前、夏のシベリア鉄道沿線で水着姿の女性たちが農作業をしているのを見たことがあるが、作業のあと、水浴びをすればさっぱりして、衣服も汗まみれにならずに着られ、合理的だなあと考えたものだが、そうした習慣が北ヨーロッパにも広くあるらしい。しかし、こんな藪ではトゲがあつたりして擦り傷だらけにならないのかと思った。(紫外線は有害だという話になるとまた別の問題もあろう。)

私も黒スグリを選んで採ってみたが帽子以外に入れる物がなく、30分ほどでそれがいっぱいになってしまったので藪の斜面を下って川原へ戻った。福田氏はひとりで別の崖の崩壊箇所を見に行ってきたようだ。

水中翼船が通過して大波が岸に押し寄せて驚く。

3時半頃になって、ようやくみんなが帰って来た。それぞれバケツにスグリをいっぱい採って来た。赤いのと黒いのを分けて2つずつバケツをさげている。だれかの黒いスグリのバケツに私が摘んで帽子いっぱいにしたのを入れてあげた。これらのスグリは家へ持ち帰ってジャムにするのだそうである。

持参してきた茶とビスケットでしばらくくつろいでから船に帰った。

3時50分に船が出発し昼食をとる。今朝獲ったオークニの皮はぎをしてボイルしたものが出来た。こうしないと食べられないそうである。水中翼船や大きな貨物船が下流から通過して行く。58キロの航路を2時間近くかけて5時40分に、先日定期旅客船を下りたウスチ・タッタへ着いた。

6時過ぎに船を下りて上陸した。クニツキーがこれからウスチ・タッタ村(正式には「ピョートル・アレクセーエフ名称ソフホーズ」というそうだ)へ案内すると言う。東から西へ流れるアルダン川に真南から流れてきて合流するタッタ川の段丘が上がった。そこには5mほどの高さの円錐形で模様を施したテント様のウラサ(ヤクート人が夏の放牧地、採草地で使った住まい)とそれを取り囲むように派手な模様を描いた高さ2mほどの馬繋ぎの柱が何本も建ててあった。いずれも祭りのために様式化されていて実用になるものではない。舞台らしい板敷きがあり、それらを取り巻くように観覧席らしい背もたれのない木のベンチも並んでいる。6月25日に行われるヤクート人の夏至祭り(uissuyakhと言うのだとの説明)の会場として設定されたものだ、その日にここへ来るとウオッカやクミス(馬乳酒)を飲まないで写真など撮らせてもらえないのだ...などの話をクニツキー氏から聞きながら村へ入った。木造の農家らしい家が数戸見えてきた。畑がありウシもいる。直径が2~3mもありそうな

饅頭形の起伏で白樺もまばらに生える草地(ポリゴンか)に茶色と白のぶちの仔ウシが数頭草を食んでいた。かなり広い牧地を丸太の柵で囲ってある。

冬の防寒のために牛糞を壁に厚く塗った畜舎もある。昔はヤクートの冬の家であったが今では物置やウシ小屋に使われ、ウシが2、3頭入る大きさが普通だ。ホトンと呼ばれる。(写真22、23)



写真22 ホトンのウシ小屋



写真23 ポリゴンの草地と仔ウシ

ネウストロフ家へ立ち寄った。17年前にクニツキー氏がたずねたことのある家だそうである。窓ガラスは1重だが、と聞くと、冬には2重、3重にするのだという。家の主はもう亡くなったがクニツキー氏と同年だったそうで、マトリョーナ夫人(56)が出迎えてくれた。ヤクート人の家は日本と同じように玄関で靴を脱ぐ習慣だった。客室内の様子はすっかりロシア風でペチカがあり、テーブルの上には使用中のサモワール(炭火を使う湯沸し)がある。壁に大きなクマの毛皮が貼ってある。家族が何人も集まってきた。みな日本人と変わらない容顔の人たちだ。言葉はみなロシア語だ。

このソフホーズの模範農家だそうで、表彰された勲章を見せてくれた。彼女自身は10人の子供を育てた「英雄」だそうである。長男夫婦も含めてそこにいた7人の記念撮影をしてあげた。

このソフホーズで記念に編集したという写真集を見せてもらった。それにはこのソフホーズの紹介記事もあった。何年のものかはメモし忘れたが総人口1,286、畑134ha、採草地5,112ha、ウシ1,440頭、等々とあり、肉、牛乳、毛皮、穀物(燕麦か)などを生産するとある。

この家では自家用にブタ、ウサギを各1匹にニワトリも飼っていた。ブタは当地では寒さのために冬を越せないそうで秋には屠殺するそうである。ウサギは子供の冬の帽子の毛皮用だとのこと。家族の生活をソフホーズが助けてくれるようなことはないので、何でも自分たちでやらなくてはならない...などの話を聞きながらサモワールの湯で入れた紅茶をごちそうになった。

家の外に小石のおもりをつけた投網があったので聞いてみると、それはもう古くて博物館行きだとか。ホトンの写真も撮った。その饅頭型になった屋根は草ぼうぼうだ。向こうの方にたくさんの家畜が入りそうな大きなホトンもある。やがて暗くなってカメラはやめた。家畜の柵にもたれてしゃべっていた初老の夫婦に見送られて8時過ぎに船へ帰った。

すぐに船が動き出すので、定期船の停まる波止場へ行くかと思うと、少し離れた中州へ停泊した。安全上の配慮か。クニツキー氏は中州に上がってスプーン投げの魚釣り。

9時半、軽食。蒸したジャガイモにパセリの葉をまぶしたの。ウオッカ、ワインも。

8月12日

6時半起床。快晴無風。外気15.8℃。何となく秋の気配を感じる。エンジンが始動し中州から栈橋のある港

へ移動。

7時半になって、あわただしく朝食。コーリヤンとコンビーフの混ぜ飯、プリン、まだ新鮮なキュウリ、トマトがあった。紅茶。

お世話になった船に別れをつけて、8時半から浮棧橋の手前の陸上で定期旅客船を待った。こんどはラケータ(水中翼船)だとのこと。55分に来た2隻のうち空席の多い方には乗らず、かなり乗客の乗っている方へ乗船することになった。船内は排気ガスの臭いでムンムンする。分散してそれぞれ空いた席に座った。座席の配置は旅客機を思わせた。

乗っていた乗客はほとんどヤクーツクまで帰る人びとらしいが、みなバケツにネッカチーフや新聞紙で覆いをしたのを座席の横や下に置いている。昨日採ったような木イチゴを採って帰るところらしかった。ジャムにして冬まで保存するそうだが、それにはイチゴと同量の砂糖が要するというからヤクーツクの砂糖の需要がたいへんなことになるのだろうか。

9時半、ハラオラ着。

10時15分、(港名不祥)。給油のため20分停船。乗客は往きと同様ヤクート人がほとんどだ。大部分の人がウールのセーターを着ている。食事(おやつ)に揚げパン2枚の間にチーズを挟んだのと紅茶をクニツキー氏が配ってくる。

船の注意書きに飲食禁止とは書いてはなくて、禁煙とゴミを散らかすな、とだけある。

11時20分、港に近づいたが乗降客がなく停船しない。

この船は民営だそうで、公営の船より料金が安いのだそうである。乗船の時に見た空席が多かった船は公営だったのだろう。この船は船長が買い取ったもので50人乗りだとのことだ。

1時前に停泊、すぐ出発。前の席に母親と小学生くらいの可愛い女の子と幼い男の子の2人の子供がいた。日本の田舎にも居そうな様子の3人だ。母親のほうは先ほどからビーズ玉を使った刺しゅうをしている。そのデザインが民族色というかヤクート風でおもしろい。

4時にまた停泊。2回目のおやつを配ってきた。どんぶりのような大きな茶碗に紅茶、それに1枚のパンにチーズ、サラミ、キュウリなどを重ねたので、とても食べきれない。

5時半、ヤクーツク港着。クルマの出迎えがあり、そのままクニツキー氏宅へ直行して、また、夕食をごちそうになった。

## 9 レナ川東岸、内陸のアラースで

8月13日

朝、曇り20℃ 4時半のモーニングコールで起きた。

5時半にこの日はクニツキー氏の代わりにアレクセイ氏が乗った迎えのクルマが来た。リアさんの家を持って乗車してもらい、ヤクーツク港へ。乗船を待つ間、小さな蚊かブヨがまとわりついてうっとうしい。虫が出るのは時間によるのか天候のせいかな。

6時半発のフェリーでレナ川の対岸、つまり東岸へ向かった。かなり大きな船だ。乗客の大部分は黒っぽい作業服を着た男たちだが、乗船後、みなすぐに最前部にあるビデオ室へ入ってしまった。

6時7分出発。船室から上のデッキへ出てみると、風が寒くてだれもない。気温を測ってみると16℃であった。港で切符切りのおにいさんと思ったのは対岸に着いてからのクルマの運転士とわかって苦笑い。

レナ川はこの中流域でも川幅が広くて海のような感じだ。つぎつぎと島や中州が現れる。

7時10分、1時間かかってようやく対岸のニジネ・バスチャーハへ着いた。ここも古い船を係留した浮棧橋だが、フェリーに乗せてきたトラックなどはその近くの砂浜のところに板を渡して下ろしている。

ここから東へ向かって内陸へ入るジープ型の4輪駆動車が待っていてそれに乗った。このレナ川の東岸から内陸はレナ・アムガ両川間とよばれる地域だ。すぐに急坂になって段丘(アバラスカヤ・テラス)に上がるとベスチャハスカヤの集落がある。ここはアラースではない。そこを通過すると乾燥した草地の多い比較的平らな

所へ出た。道路の整備はされているが、舗装はしてないので振動が激しい。それに対向車とすれちがうとモウモウと立ちこめる砂埃で前も横も見えなくなってしまう。こちらのクルマも盛大に砂埃をたてながら走っているわけだ。ほどなくカラマツの森林の多い地域に入った。トゥギュルンスカヤの集落で森に囲まれた草原のアラースだ。道路の面から8～10mのくぼ地で乾燥期には水がかかることがあるとのことだが、50mと300mほどの楕円形の湖と5mほどの高さのピンゴの丘がある。丘の上にはカラマツが数本生えている。樹齢200～300年だそうである。ピンゴの斜面の草むらには大きな茶色のバッタや日本のアキアカネに似たトンボもいた。(写真24)



←写真24 アラースの中のピンゴ この左手に湖沼

ここでアラースの形成過程の説明を聞いたが、現在の姿になるまでに3,000～5,000年を経ているという。地下の凍土が融解してくぼ地になって湖沼や草原が出来るものだが、その原因は必ずしも明確ではないものの気温の上昇、日射が強くなることなどが大きな要因とされるとの説明である。中央ヤクーチアのタイガ(北方針葉樹林帯)には森の中

に点々と大小のアラースの草地や湖があり、もともとヤクート人たちはそうした森の中の草原で牛馬を飼い集落を造っていたとされる。この日の話でもそうだったが、現地ではアラースの成因については森林の焼失、伐採による人為的な要因というのは強く否定されるのが通例である。とくにヤクート人による牧地や集落の造成を原因に加えることは、民族問題にかかわるのかもしれないと疑ってしまう。しかも森林の中を通過している道路脇が陥没して水溜りが出来ていたり、氷の溶けたあとに残る円錐形の土柱、バイジャラーハが出来ていることについては、道路建設が原因だとはっきり言うから矛盾を感じてしまう。その結果、道路脇に連続して立っている電柱の根元が水につかかっていて、柱が右に左にと傾いているのを、電柱が酔っ払っていると言うのだとのことだ。

8時50分、かなりの急斜面を下ってマイヤという大きな集落のあるアラースに着いた。この付近の中心地とも言えるところでちょっとした町でガソリンスタンドもある。その周辺には広い牧場ないし畑地があり、これがアラースとはなかなか分からない広さだが、9,000年ほど経過したアラースなのだという。

9時半、300頭ものウシを飼っている別のアラースへ立ち寄った。茶と白のぶちの乳牛で機械式の搾乳機を取り付けて搾乳中であった。生乳のままヤクーツクへ出荷するという。

タバガというポショールク(町)があり小さなスーパーの様な店をのぞいてみた。缶詰、瓶詰その他日用雑貨がつつましく並んでいた。外では大きなウシの枝肉をリヤカーに乗せようとしていた。

砂埃をたてながらさらに東へ向かうと森が途切れてまた別のアラースの草原が現れ、そこにはウマが数頭放牧されていた。ウマはヤクート人の間では役畜としての利用が減って食肉用になってきているらしい。以前、馬肉ほどうまいものはない、と言って凍った馬肉を薄切りにしたのをヤクート人のウマ牧場で出されたことがある。

10時半過ぎ、今日の目的地になるアバラハ湖のアラスへ到着。ここにあるのは塩の湖である。なぜ塩湖になったのかは不明だそうだが、道路の面から10m余りのくぼ地になった幅1.5キロ、長さ数キロの大きな楕円形をしたアラスに数個の池が点在するほかは、ほぼ全面が真っ白な塩の結晶に覆われている。



写真25 塩の結晶に覆われたアラス



写真26 つむじ風で舞い上がる塩の粉末

塩に覆われたくぼ地に降りる土の崖の一部には凍土の氷塊が露出している。下に降りてみるとガリガリの塩が波形に広がっている。湖というよりは水溜りになった所へ近づいてみると、水際にハエのさなぎらしいのがいっぱいいる。試しに水を舐めてみると、ひどい塩辛さとニガさでたまらない味がした。食塩になる塩化ナトリウムのほかに塩化マグネシウムなど「にがり」が相当混じっているのだろう。

塩の結晶のない個所には赤い茎の色をした好塩性植物が生えている。こんな所でも昆虫や植物が生きているのかという感じである。魚か何かもいるのかカモメの群れも飛んでいる。

開けば、傷ついたカモがこの湖に飛んでくるというので、付近の住民は腰痛などに薬効があると言ってこの塩を採って行って風呂に使うという。ほとんど原形を留めない木造の建物らしいものの跡が湖畔にあったが、かつて、ここにクロールト(保養所)があった跡だそうである。湖の間の砂地に小屋があるのは秋にカモ猟をするためのハンター小屋だとのこと。崖の一角にパイプから水が湧き出ている、ひどく冷たいので水温を計って見ると1.2℃であった。この凍土層の厚さは400mあり、水は500m下から出てくる被圧地下水だとのことで、毎分600リットル湧出するが、凍らないように電気で暖めていたという。この冷水も強烈な硫化水素臭がする。この水をサンプルとして採る。この日はもう1箇所アラスの水もサンプルに採った。

11時半過ぎ、崖を上がって上の草原にビニールシートを広げて昼食。クニツキー家のプレゼントだという白米の飯がうまい。まほうビンの紅茶、ゆで卵、トマト、パンもある。

食事をしながら湖の方を見るとつむじ風で白い塩の粉が巨大なじょうご状に巻き上げられながら移動している。

1時過ぎ、帰途についた。カラマツのかなり密生した森林に囲まれたアラスの草原のところで停車し、森へ入ってみた。ここでも下生えの灌木類がしげっていて、秋になってから採取するという直径が5ミリほどのコケモモがたくさんあった。

森の中を通っている道路沿いの凍土の融解した水溜りと泥の堆積(パイジャラーハ)はかなりひどい。小さなアラスの草地と森の境に廃屋になったホトンがひとつあり、牧柵も残っている所がある。こういうのは農牧業の集団化が行われた際に放棄された個人経営の牧地跡のようだ。

広い草原が開けてきたと思ったら、そこには広い畑があり、大型のコンバインが燕麦の収穫をしていた。しかし、麦を刈り取りながら進んでいる大きな機械の前にあるのは見たところ麦より雑草の方が多い感じだ。

タバガーという集落のあるアラースに立ち寄った。ピンゴの丘に戦没者の碑が建てられていて「決して誰も忘れない」という意味の一語が書かれている。

ここにも夏至祭りの会場が設けられていた。ウラサ(天幕)をここのは大胆に様式化してしまい2mほどのコーンに脚をつけて立てたようなのが3つほど並んでいた。ヤクートの伝統的な行事、といっても地域によってさまざまなやりかたをしているらしい。

大きな湖と広い草原のアラースに茶と白のウシの群れが放たれており、ウマの畜舎や牛糞を塗ったウシ用の大畜舎があった。畜舎の中の柵に囲まれて子ウシが数頭見えた。「バジリキ飼育場」という意味の看板が出ている。聞いてみるとソフホーズ(国営農場)ではなくて аренда (賃貸借)だ、つまり半民営で、春にウシ100頭を買って育て、秋にソフホーズへ売るのだとのことで、自分たちは冬はソフホーズで働くことも出来るという。ブタが1頭いたが、これは自家用だそうである。

大きなピンゴがあって上が墓地になっている。木製の墓標というか家形の墓が多く、100年以上前の墓から、近年、亡くなった人の墓もある。

そうこうしているうちに3時になった。秋の気配というのか、虫(バッタ)のジージーという鳴き声がうるさいほどだ。切られた灌木の先に日本のアキアカネそっくりのトンボがとまっている。ブタをたくさん飼育している所を通った人が不在で何も聞けなかった。クルマの中の話ではジャガイモをかなり栽培しているのはブタの餌にするためだそうである。ブタは冬を越せないというからには、秋に屠殺して売るのだろう。

4時20分、レナ川河畔のアバラアハという所に着いた。朝から往復160キロ、ガタガタの道を砂埃を上げながら走った。蚊の群れに囲まれて茶を飲んでしばらく休憩し、ジープと運転手はフェリー乗り場へ行った。朝と大違いの気温27℃で暑い。

5時半発の船でヤクーツク港へ向かった。よく見ていると30分近く下流へ航行し、それからUターンするように上流へ向きを変えてヤクーツク港へ着いた。所要時間45分。

遊覧船か、大きな客船が入港して来た。

クニツキー氏との連絡がなかなかとれず小1時間ほど待った。物乞いの男ふたりが現れたりする。

ようやくいつもの乗用車チャイカでクニツキー氏が迎えに現れた。電話が切れてつながらなかったとか。

リアさんをお宅付近で降ろしてホテルへ戻ってみるとかなりにぎやかな宴会を大勢でやっている様子。ところが、水道が断水。聞けば町中の水道が出ないそうであった。下着まではこりまみれだが、シャワーも洗濯も出来ない、汗とほこりの1日となった。

8時半、クニツキー氏が迎えに来て、そのままお宅で夕食のごちそうになった。肉入りの混ぜご飯がうまい。下のお嬢さんのカーチャを入れて記念写真。リアさんがいないので話がなかなかスムーズに運ばなかった。

ホテルでは断水をしきりにあやまれた。宴会はまだつづいているらしく、歌声などが聞こえた。11時に水がでたので、急いで冷水シャワーと洗濯を終えたが、30分ほどでまたも断水！雨が降り始めた模様。

## 10 ヤクーツクでの日程を終える

8月14日 曇り 18℃

水道は出ていたが、なぜか非常に冷たい水だ。昨夜のソ連人宿泊客が多かったらしく、福田氏の部屋で朝食。

9時、研究所へ行き、クニツキー氏の研究室で資料や本を見せてもらい、凍土関係のスライドも見た。ついでにあれこれと雑談。

リアさんの給料は〇〇ルーブルだ、クルマを買うのに申し込みの順番があってクニツキー氏は26年待って155番だ、運転するには3ヶ月教習所へ通う必要がある、売上税(消費税?)は5%だ.....。

地質学研究所を訪れ、ヤクーチアの鉱物資源の話聞いた。

ダイヤモンドと金が有名だとして、西部には石油、ガス、ダイヤモンド、東部には非鉄金属と大まかに分けられる、未開発のものが多く開発されていても採算がとれていない、それでも2,000の鉱山がある、しかし、ヤクーチアにはソ連領内のダイヤの97~99%があるが、700本の縦鉱を掘削してもダイヤの出るのは10本程度だ、錫はバタガイに大産地がある、アンチモンは90%がヤクーチア産出だ、その他に石炭、亜鉛、南部の雲母の産地がある、ヤクーチア特産のチャロイット(紫色の縞模様のある岩石で彫刻品などとして知られる)はレナ川最上流の支流チャラ地方の産である.....

この地質博物館をこの日はなぜか見学しなかったが、翌年の7月23日にここを訪れており、その時のメモと写真ではマンモスの前足の毛皮も肉も付いたものが、ホルマリン漬けになって縦長の大きなガラスケース(瓶)に入っている。足の上端部が斜めに切断されたようになっているのが不思議だ。(写真27)1万3,000年前のものでベレリョホ川流域で発掘、などとメモしてあるからそんな説明を受けたのだろうか記憶にはない。

また、マンモスの写真があって、44,540~38,590年前のもので人が食べて捨てた跡、などとメモしてある。さらに、発掘されることが少ない毛サイの全身骨格もあり、2万年前のものとのメモもある。(写真28)



←写真27 マンモスの足

→写真28 毛サイの骨格



ひとりでホテルへ戻った。広いばかりで荒地の多い凍土研究所構内の写真をもう少し撮りたくて出かけた。クルマで通過しただけの研究所構内の入り口にある大きな表示塔の所まで歩いた。向こうからマーシャ嬢がどこからか手ぶらで帰って来たのに出会った。

「写真を撮っているの？」

「そうです。」

それだけの会話だったが、荒野に立つ美女の1枚でも写して上げればよかったのかもしれない。研究所の前にバス停があるのに遠くから歩いて帰ったようだった。この国の人たちはすぐそこと言って数キロもの長距離も歩くから別にどうということもないのかもしれない。

ホテルへ戻って荷物の整理。福田氏も帰って来た。

7時半から、また、クニツキー氏宅で夕食のごちそうになった。カゼだったというが疲れていたと思われ今日は休んでいたリアさんも出席した。

帰路はもう暗い。街とは反対方向の空がボーッと赤くみえるのはオーロラだそうである。

8月15日

7時半起床 16℃ 曇り、午後は晴れる。朝、少しノドが痛かったがやがて忘れてしまった。断水は完全に復旧していた。福田氏の部屋で朝食。コーヒー、目玉焼き、パン、バター、チーズ、サラミ。



9時、クニツキー研究室。レナ川流域の空中写真を見せてもらった。ついでに図書室で雑誌などを見た。なかなか興味深い。

10時、生物学研究所へ行き、先日の北大生物班への返事の手紙をもらった。11月にここの研究所員が来日するそうである。この地域の植生図、農業関係の地図などを見せてもらった。菓子と茶を出されしばらくおしゃべり。「ヤクーチア農業アトラス」モスクワ、1989年版をもらった。

リアさんの案内でハムス(口琴)博物館へ行った。最近造られたには木造平屋の粗末な建物だが、内容は立派だ。世界口琴大会を記念して造ったということである。シベリアの金属製口琴の古い発掘品から新しい製作のものまで展示してある。(写真29)この楽器が発掘あるいは使われている地域の分布図が掲げられてあり、北海道のアイヌ民族まで含め、ユーラシアに広く使用されてきた楽器だということがわかる。

女性の館員がヤクーチアの民族衣装に着替えて実演をしてくれた。(写真30)二又になった金属棒の間の薄い金属の細い板のついたのを口にくわえて板を弾くだけなのにさまざまな音色がしかも大きな音で出せるのには驚く。口腔と舌を使って共鳴を変えるのだろう。自分で試してみると、頭にガンガン響いてどうにも耐えられない。かなりの練習と慣れが必要だと思った。

→写真30 ハームスの演奏

↓写真29 ハームス(口琴)



店でサンプルの水を入れて運ぶための袋を買ってホテルへ戻った。凍土研究所で福田氏がもらった空中写真の一部を接写させてもらい、生物研でもらった2冊目のアトラスは表紙の色が違うが内容は前にももらったのと同じであった。

2時から、ヤクーツホテルのいつもの2階のレストランで昼食。キュウリ、トマト、ピーマンを細く刻んだサラダ。トリ肉入りのボルシチにライスが少し入っている。牛肉のシチュウにうどん(無味のマカロニー)添え。ひとり当たり10ルーブルだそうである。食事の雑談で大学生が **кооператив** (協同組合) でアルバイトをする傾向があるが、給与に10~20倍もの差があるなどと聞く。

3時から、カメンスキー所長との最後の会談。ハラリ島という所には現在も生成中の氷楔がある、などの話の後、この3週間のまとめと当研究所と北大低温研との来年度からの調査の予定、手順などの打ち合わせになったが、私はこれには直接の関係はなさそう。

終わって、所長から我われ2人にピカピカのサモワールをそれぞれ記念のみやげとして贈られた。220ボルトの電熱式であり、かさばるのでどうして日本まで持ちかえるか内心当惑した。(結局、これは日本まで無事に持ちかえて置物になった。)

8時から別れの夕食会。快晴無風の涼しい天候だった。クルマ — こういう場合、人数が乗用車1台に収まらなると古い中型バスになるのが通例 — に6人が乗り、レナ・ホテルのレストランへ向かった。みなに合わせて私も服装をスーツにネクタイとした。なぜかひどく暗い照明だった。我われも予約席に座ったが、10席は

どあるテーブルがほとんど満席。

ここでもバンドの大音響が鳴り渡り、演奏の間は話が中断してしまう。カメンスキー氏ほか研究所員がてんでに踊りながら盛んに写真に撮るように催促するのだが、フラッシュの光源が弱くてとてもまともには写せなかった。

なぜか前菜にハムと冷たいボイルした牛肉のあと、また、牛肉料理。ただし、柔らかくて非常に美味だった。みなアルコールでご機嫌。

10時過ぎにお開きとなり、またバスに乗った。リアさんがお宅付近で下車し、ホテル玄関前で我われが降り、さらに宿舎の方へバスは向かったらしい。これまでの丁寧な対応に感謝。

夜、下着などの洗濯。ジャンパーとカメラのストロボを紛失したと思ったがジャンパーはベッドのカバーの隅に発見した。フラッシュは仕方がないとあきらめた。

## 11 オホーツク海に臨むマガダン

8月16日 朝、起きて見るとめずらしく雨！ 16℃

9時に朝食を頼んであったので8時半に起床。今日からはマガダンを経てアナドゥイリへ行く日程になる。出発のための荷物の準備はほとんど終えていたが、たいへんな重量だ。

朝食は福田氏の部屋でとる。ピロシキ、ジャムパン、食パン、トマトのサラダ、チーズ、バター、インスタントコーヒー。

部屋へ戻ったところへクニツキー氏が現れ、昨夜のバスの座席に私がストロボを置き忘れていた、と親切にも届けてくれた。あきらめたつもりだったがホツとした。

昼まで休養。ゆっくり荷物整理をし直したり「三国志」を寝転んで読んで時間を過ごした。窓の外の少し先で水道管の腐食箇所を取り替えて溶接をしているのが見える。先日来の水道の不調の復旧工事が。

一時晴れ間が見えたが、またすっかり曇ってしまった。風はなく静かだ。毎度ゴミは小さいビニール袋に入れてプラスチックのゴミバケツに入れていたが、バケツがいっぱいになった。

このホテルは見かけは立派だが、トイレの便座がなく、風呂、洗面台の栓がない。風呂の栓はだれかが引き千切って持ち去ったあとのビニール紐が残っている。この国にはよくあることなので、いつも持参しているゴルフボールで代用した。湯船の壁際のタイルも剥がれたのを並べたまま放置してある。

1時半すぎにクニツキー氏が迎えに来た。ルサコフ氏が直接ハバロフスクへ先に行行って我われを見送ってくれるので、重い荷物は預けるようにとのことなので、拾った化石とカメンスキー氏にもらったサモワールを預けることにした。

ヤクーツクホテルへサーシャのクルマで昼食に行った。リアさんが来るまでレストランの入り口のソファで待つ。かなりの雨が降ったらしいが、天候は回復してきた。

午前中、あまり動いていなかったので食欲なし。冷肉・ソーセージの薄切り、魚のフライに米ライス添え(これはいつもうまくない)、紅茶。

ホテルへ戻って休んだ。

4時半、クニツキー宅でお茶の会。親しい人が旅発つ際には、こうして一家で集まって茶を飲む習慣だとのこと。その席での話題：日本の正月行事の話、日本の方言の話(ロシア語にも方言、とくに発音に違いがあると言ってクニツキー氏が幾つかおかしそうに発音してみせてくれたが、あまりよく分からなかった)・・・。

下の子のカーチャに日本の電器器具店でもらった招福人形付きのキーホルダーをあげた。上のマーシヤには日本の昔の女の子のための布製小袋を上げたのだが、同席していた彼女のフィアンセに渡ってしまった。

みなさんと別れの挨拶をしてホテルへいったん戻った。

6時、カメンスキー所長が公用車を自分で運転して見送りに来てくれる。サーシャも自家用車で来てくれて、2人とも空港まで見送ってくれることになった。

空港へ着き、外国人用なのかきれいな待合室へ案内された。壁に英語、ドイツ語、ロシア語のほか横書きを縦にした日本語の広告がある。他の言語とは不似合いに大きく手書きのたどたどしい用語と表記で、「私たちの生産能門はいつでも御用を勤めます。国際の電話とテレビファクス」と読める。後の半分は企業名を和訳してあるらしい。

7時40分、スーツケースの計量検査が始まった。私のは25キロ、福田氏のは35キロ。あわただしくカメンスキー氏と別れのあいさつを交わして、一般乗客の待合室へ移り、急いで搭乗。ツボレフ154B2型という大型機。通路をはさんで左右とも3席ずつ並んでいる。モスクワ発、クラスノヤルスク経由で来たそうで、ヤクーツク、マガダンを経てカムチャツカ半島のペトロパブロフスク・カムチャツキーまで行く便だそうである。

前のほうの座席はほとんど満席で最後部近くの空席に座った。

8時に発進。空港にいる時から鳴りっぱなしのやかましい音楽がいつまでも消えない。

1部4ルーブルでРОСТОВ-ПАПА(ロストフ・パパ)とかいうタブロイド版数ページの新聞を売りに来た。

8時半、乗客が寝られるようにか電灯が消されても音楽はそのまま。しかし、エンジンの音が大きくなって、ビート音だけが聞こえる。左後部の座席に大きなシェパード犬がいるのに気がついた。夫婦と子供の3人連れの飼いイヌらしい。

9時15分にもう降下のアナウンス。後部座席なのでトイレに立つ人がしきりに通ってわずらわしい。レモネードのジュースを配られたが飲まない。機内灯がついたが、ペトロパブロフスクまで行くらしく、眠ったままの人が多かった。

なぜかすごい騒音をたてて9時37分にマガダン空港へ着陸。

10時に機外へ出て、スムーズに荷物を受け取ったところに当地の凍土学者、ベルンSTEIN氏が出迎えに来ていた。同氏の運転するクルマで長い長い坂を下って1時間、ようやくホテルへ着いた。空港は海岸部の市街から離れた山か台地の上にあるらしい。

時計を2時間進めて、午前1時。手続きに小1時間かかった。ヤクーツク発以後の航空券は我われの自弁でドル払いと言われたが、マガダンから次のアナジリまでの搭乗券代として、また210ドルを支払った。

4階のツインの部屋となった。テレビは置いてあるが不調。クニツキー氏、リリアさんと4人が集まり、クニツキー氏持参のピロシキ、ジャム、パンとジュース。

2時過ぎに寝る。洗濯もついに省略。

8月17日 曇り 15℃

9時に福田氏に起こされた。大急ぎで1階のレストランへ行行ったが、閉まっていた。4階のビュッフェでハンバーグ、イカを刻んでスメタナ(ヨーグルト)をかけたの、ケフィール(ヨーグルト)コップ一杯、パン、紅茶。

オホーツク海沿岸の夏は天気が悪いらしいが、今回も1979年の学会旅行で来た時も、同様に霧が立ち込めた寒い雨の天気だった。

街を歩いて科学アカデミー科学センターという所へ行行ったが、まだ開いていなかった。この街は坂が多いがなかなかきれいな街並みである。人口は13万とのこと。

センターが開いてベルンSTEIN氏らにこの地方の気候や凍土層などについて話を聞いた。年平均気温は-4℃というから、ヤクーツクの-10℃よりは海岸にあるだけにかなり高いと言える。凍土層も深い所では300mに達するが全面的に凍土が存在するわけではなく、断続的だという。

海岸へ降りてみた。水際に海草や生活ゴミが打ち寄せられていて、北極海とはいちじるしい違いがある。海岸の崖下に湧き水があって、かなり冷たいので測ってみると、3℃だ！

割りに天気がよいと思っていたが、たちまち霧が立ちこめて細雨が降り寒くなった。

地質学博物館へ案内された。ここは1979年の学会旅行でマガダンへ立ち寄った時に唯一、見学した所で、地質学者のイズマイロフ氏の説明があった。

あの時は、マガダンが外国人の立ち入りが厳しく制限されていて、乗っていた飛行機が着陸すると、すぐに制服制帽の軍人が税関職員かが乗りこんできて、参加者全員が座席に座ったままでパスポート検査を受け、分かっているはずなのに、ここへ来た目的を代表者が質問されたりしたのだった。

さまざまな鉱石や化石の標本が豊富に展示されており、巻貝の大きなのが沢山入った石灰岩、大きなアンモナイトの化石、特に大きくて珍しいとされ固有名詞付きのメノウや1トンもあるという隕石も置かれている。博物館はどこへ行っても、大きな物の展示で人を驚かせるようになっている。

さらに珍しいことに1986年にコリマ川支流のアンヌイ川流域で地下4mほどのところから発掘されたというマンモスの毛皮も肉もついたままの足が展示してある。ガラスケースの中に横たえた大きな毛深い丸太のような形である。防腐処理がしてあるのだろう。いまひとつ、1977年に砂金の採掘場の凍土から発掘された半ばミラー化した仔マンモス(ジーマという名称がつけられている)もレプリカとともに展示されている。

19世紀から20世紀中ごろにかけての北東シベリアや極東北部における探検の先駆者の功労者、チェルスキーとオブルーチェフの肖像のレリーフが掲げられている。

イズマイロフ氏とはあの学会旅行の際に名刺を交換したことがきっかけで、以後、何通かの手紙をもらっていた。私から今回のシベリア旅行のことを知らせてはあったが、マガダンへ行くとは私自身が知らなかったのだから、何も彼は知らないはずだと思っていた。

ところが、意外にも彼とヤクーツクの永久凍土研が通じていて、ご本人が自宅で昼食をご馳走してくれるとのことで福田氏と2人でお宅へ招待された。私の手紙を見てイズマイロフ氏が凍土研へ問い合わせたのかも知れないが、その辺の事情は聞かなかった。

共同住宅(マンション)で、さほど新しくはないお住まいであったが、家具調度でいっぱいの感じの部屋へ案内された。ご本人夫妻とお子さんご夫妻にそのお子さん2人という家族で、特にマガダン料理というわけではなかったが、前菜もスープもついたご馳走であった。ヤクーツクの最後の日ごろからストロボの調子が悪く、後で見ると記念に撮って上げた写真が暗くてだめだった。

あれこれと雑談をしたが、終戦直後に日本人捕虜が近くにいて、森林の伐採や炭坑での採炭に従事していたこと、マガダンへはアメリカからの直通便があり、国際空港になってから、治安がわるくなった、市街ではカメラを肩に掛けたりして歩くのは危険だから、止めたほうが良い、トナカイ遊牧民に興味があって調べたいのなら、この地域の山の中にもいるから、つてをたどって斡旋してやる...

彼もペレストロイカ、グラスノスチの風潮の中で、外国との交流を望んでいらしかった。それが必ずしも学術的なものに限らず、観光客の誘致にも関心があるらしいと私には思えた。

午後はベルンステイン氏に案内されてクルマでマガダンの郊外へ出た。雨と霧に煙って、周囲がよく分からない。丘の上のような所へ登りつめると高い樹木がなくなり灌木ばかりになった。雨の中で木イチゴやキノコを採って帰ろうとしていたおばさんたちを途中までクルマに乗せてあげた。オラ村という所で知人だという人をひとり乗せてさらに走り、泥道を海岸まで下った。

そこには、かなりはげしい雨の中で、雨合羽を着てサケ漁をしている人びとが大勢いた。彼らの中へ入って行くと、大きなサケを2匹裂いてイクラを引き出して食べる、と勧められたりウオッカを野イチゴのジュースで割ったのを飲まされたりした。恐らく、この漁は違法行為なのだろうが、みなそんなことにはかまわず土曜日を楽しんでいる様子であった。帰ろうとすると獲れたばかりのサケの大きなのを突き出して、持って帰れという。当惑したが断るわけにゆかず、もらってクルマに乗った。(この場面、風雨が激しくカメラを取り出せなかった。また、このサケをどうしたものかと困ったが、ベルンステイン氏宅へ置いてきた。)

雨の中の悪路を走って市内に戻り、ベルンステイン氏宅で夕食のご馳走になった。イズマイロフ家と同じような集合住宅にあり、ご夫婦と学齢前のお子さんの3人暮らしのお宅であった。いろいろのご馳走を出してくれたが、なぜか食欲がなくてあまり食べられない。

お子さんが福田氏のビデオカメラにすごく興味をもち、さかんにレンズを覗いたり、写せとせがんだりした。

10時過ぎまでおしゃべりを続けて、ベルンSTEIN氏にホテルまで歩いて送っていただいた。ひどい雨降り、ズボンも靴もズブ濡れになってしまった。

朝から顔も手も洗ってなかったので風呂へ入り、塗れた衣類をハンガーに吊るし、靴を立て掛けてから寝る。

## 12 ベーリング海に臨むアナドゥイリ モスクワでクーデター事件の報

8月18日 7時起床。20℃ 晴れ間の見える天候。

幸いなことに昨夜濡れていた衣類も靴さえも、ほとんど乾いていた。今日はベーリング海峡に近いアナドゥイリへ向かう日だ。

急いで用意すると7時半にもう例によって中古の中型バスの迎えが来た。また坂を登って行く。晴れ、曇り、霧、と安定しない空模様だ。

8時20分に空港へ着いた。運転手が聞いてきたところによると、9時45分発の飛行機が11時発になるという。バスの中で荷物の上にキュウリ、トマト、チーズ、パン、ハンバーグ、ミネワダー(ミネラルウォーター)などを並べて朝食とした。

アナドゥイリ行きが今日は飛ばないとか、11時よりさらに遅れるとか、わけがわからないまま、駐車場のバスの中で「三国志」の下巻をなかばまで読む。

それでも11時半頃になって、搭乗手続きが始まった。時計をさらに1時間進め12時になる。検査を終えた人は建物の外へ出るように言われて出てみると、日射しがきつい。そこで待つこと1時間余り。ようやくツボレフ156Bに搭乗。1時45分に動き始めた。後ろから2列目に5つの席があり、我われとリアさん、クニツキー、ベルンSTEINの両氏が座った。わりにきれいな飛行機で内装も新しい感じだった。

窓の下は雲で何も見えないので眠る。

3時20分、降下のアナウンスがあり、アナドゥイリ空港の気温は13℃とのこと。ツンドラの火災か、盛んに煙が上がっているのが見えた。街もスモッグがかすんでいた。

3時40分、着陸、薄曇り。4時40分頃になってやっと荷物が出てきた。寒風が吹いている。ガタガタのバスに乗った。街は狭い海峡(アナドゥイリ川の河口につづく湾口)を隔てた西の対岸にあるので港へ行き、フェリーに乗って渡ることになる。

小さな船に乗船客が多く、荷物を運び込むのに苦労した。雨まじりの寒風の中でベルンSTEIN氏が持参の袋からアノラックを取り出して着せてくれた。

5時になってフェリーが動き始める。甲板まで人でいっぱいだ。間もなく高い崖が見え、その上に街があるらしい。

30分ほどで対岸の港に着き、急いでクルマに乗ってホテルへ6時前に着いた。

ГОСТИНИЦА ЧУКОТКА(チュコトカ・ホテル)というのであった。チェックインに時間がかかり、1時間ほどしてやっと3、4階に別れて、それぞれの部屋に入った。濡れた衣服をハンガーに掛けたり顔を洗ったりして8時過ぎに近くのレストランで夕食。特に変わったメニューはないが朝はバスの中の簡単な食事で昼食はなしだったので、やっと食事にありついた感じ。20数人の人が集まって食事中であった。モスクワ大学の地質関係の同窓会だとかいうことであった。食事中、このアナドゥイリ(普通、アナジリと言い習わしている都市型集落)は人口が1万3,000人ほどで行政、軍事、港湾関係者が多いと聞く。

ひとり部屋へ戻って10時前に寝る。寝不足と食事が不規則だったせいか疲れた。

8月19日

6時起床。曇り 11℃

日本での冬の衣服を着ることにした。風もあってかなり寒い天候だ。

水も湯も出るのだが、紅茶色というのが麦茶色というべきか、これでは洗濯もしかねた。

このホテルはシャワーが個室にはなく共同シャワー室なのでカギを借りて使う。

8時半に下のロビーに集まり、9時から少し下がったところにある公園の向いにあるビュッフェで朝食。飲食物は種類が少ないがセルフサービスでそれぞれ盆にとってレジで金を払う。果物・野菜類がない。

私は知らなかったのだが、翌日から凍土関係の国際シンポジウムがあるそうで、アメリカ人も10人ほど来ていた。それらの人たちと一緒に10時から迎えにきたバスに乗った。スモッグか霧の中で周囲がよく見えない。車内が次第に暑くなってきた。ツンドラの沼地に高さ3mほどに割り石を盛って築いた堤防のような道路を走った。舗装してないので振動が激しい。この道路をダンプカーなどがしきりに行き交う。約1時間走ってようやく遠浅の海岸と並行に道が走る所に来て停車し、みんな降りた。

カモメが多数飛んでいた。プーニャ、プーニャと鳴いているように聞こえる。海岸は砂浜だが、ここにも、さほど大量ではないが流木が打ち上げられている。堤防状の道路の通っているところから砂浜までの間は人の膝までほどの灌木の藪である。この灌木の藪に熟したブルーベリーがかなりあり、うっかり腰を下ろすと紫色の汁でズボンにシミが出来てしまう。まだ、十分に熟していないが赤味を帯びたコケモモもチラホラ見える。そのほかにも食べられるのかどうか分からない赤や黒の実がなっている小さな植物がある。ロシア人もアメリカ人も、ただ寝そべて休む人もいるが、熱心にブルーベリー摘みに没頭する人たちがいて、なぜそれほどまでに一生懸命になるのかという気がした。

遠浅の海岸ではサケ獲りで一生懸命の人たちがいた。岸と直角に沖へ向かって刺し網を建ててある。魚が岸と並行に泳いでくのを捕らえるようにしているのだ。干潮時でかなり沖の方まで干潟になっているが、その水際からさらに200mほど沖まで歩いて行けるほどの水深らしい。少年2人が沖の方で網を持ち上げて大きなサケを網からはずしているのが見える。彼らも含めて魚をしているのはみな男性のようだ。聞けば小企業のサケ漁地域だそうで、個人でライセンスを取って、朝8時～夕8時まで漁が許可されているという。サケは1匹3ルーブルだそうであった。ところが、密漁を取り締まることになっているのか、爆音が聞こえた方を見ると監視のヘリコプターだというのが飛んで来た。魚をしていた人びとが急いで陸に上がって来る。みなライセンスがないのだろうか。しかし、そのヘリコプターは上空を少し旋回しただけで飛び去ってしまい、砂浜へ上がった人たちは、また漁を始めた。

午後1時、気温は16℃に上がっている。水際を歩いてみると、浜に上げたゴムボートの中に獲れたばかりのサケが8匹入っていた。日本の魚店でもよく見る種類のものが獲れることが分かる。広げた帆布には10匹ほど置いてある。ボートがまた網を上げに出ていって、5匹獲って帰って来た。

2時頃、潮が満ちてきて干潟が水没し始めた。同行のロシア人たちがサケを買い取ったのか、それをさばいで例のウハーを作っていた。鍋として使うバケツ2個や水は持参したのだろう。流木を使った焚き火で煮ていた。用意が出来るかと砂浜近くの草原にシートを広げて20人余りで日、米、露の国際昼食会となった。パンも用意して来てあった。

3時にバスが迎えに来て、4時半にホテルへ帰り着いた。順番にシャワーを浴びた。茶色の湯だが、広いシャワー室で湯もたっぷり出るので快適だった。

ところが、何か重大なニュースがあるとかで、リアさんが福田氏の小型ラジオを借りて来た。テレビのスイッチを入れてみると1チャンネルだけになっていて「白鳥の湖」などのクラシックの音楽とどこか野原の風景の画面だけが延々と続き、時々、音楽が途切れて男の声で、「これは、やむを得ぬ緊急の処置である……」というような意味の一言のアナウンスがあるだけだ。やがて、何か分からないが劇映画の場面が変わった。

モスクワでクーデターが起こったということらしいが、みな何かはつきり分からないニュースを話題にした夕食会になった。アラスカから来ているアメリカ人もソニーのラジオでアメリカの放送を聞いている。ゴルバチョフ大統領が拘束され、だれかが政権を握ったということのようだ。

食後、クニツキー氏、リアさん、我われ2人で集まり、福田氏が新潟から持ってきたウイスキーのジョニ黒を開けた。クニツキー氏が政治情勢のことを気にしながら、我われの帰国や安全について非常に心配してくれた。

「こんなにマスコミが活躍し、情報が行き渡る今の世界では、それほど心配はないのではないですか？」

「いや、それはソ連共産党の怖さを知らないから、そんなことを言えるのです。」

というような会話が行われた。街の様子を見ても特別の変化は何もなさそうだ。

部屋へ戻って寝たが、夜中に目が覚めて、ふと、帰国のこと、予約の取れていないその飛行機のこと、家族のことなどが気になった。

8月20日 薄曇り 14℃だが風がないので暖かく感じる。

朝のテレビで各国の反応を一応伝えているところを見ると、それほど過激なことは起こらないのではないかと思われた。天気予報を見るとハバロフスクは雨続きだそうである。

8時半より朝食。昨夜と同じレストランで、米飯に甘味をつけたバターかけ、プリンのスメタナ(酸っぱいクリーム)かけにジャム、コーヒー(インスタント)。昨日来の事態の推移について、どのテーブルでもボソボソと話し合っていた。

ホテルへ戻ってから10時半に凍土学のシンポジウム会場へ出発。役所の3階がその会場になっていて、各国・地域の席が決められていた。シンポジウムの参加料はクニツキー氏が払ってくれてあった。

会議が始まると、まず、当地区代表の挨拶が長々とつづく。この地方にとって凍土の問題は非常に重要だ、アメリカ、日本からの参加に感謝する、現在起こっている政治的事態については万全を期するから心配しないでほしい、ソ連の凍土研究において今年が50年目の記念すべき年である.....。

アメリカからの出席者というのはワシントンのナショナル科学フェンドで来ている、とのこと(日本からというのは我われのことだが、私は本当は部外者だった。)

それから、ひとり20分の持ち時間であると決められ、途中のティーブレイクをパン1個と紅茶であわただしくすませて、シベリアやカザフスタン各地を例に凍土の起源、生成過程、氷の性質・構造、人類との関係、アラスカのポイントバーローにおける凍土現象のスライド紹介などがつづいた。3つの発表が終わったところで、もう2時になっていた。またまた、あわただしくレストランで食事をとり、結局、7つ目まで私も席について、理解できる範囲でメモをとったり図を写し取ったりした。

疲れただろうと言われ、内心ほっとして退席してホテルへ帰り、洗濯をしたり物の整理をしてから休んだ。

アナドゥイリからハバロフスクまでの航空券代金を2人分750ドル前払い、25日発と決定して、ひとまず安心した。

7時から夕食だと、クニツキー氏が呼びに来た。リアさんが辞書をくれた。福田氏の誕生日だということで、昨夜飲みかけたウイスキーをクニツキー氏が持ってきて、周囲の人たちへも注いでまわった。食後、山へ登って誕生日を祝うのだということになり、マガダンから一緒に来た5人で近くの丘へ登り始めたが、暗いので途中で登るのはやめて、だれかが持ってきた花火をあげた。赤い火が噴き出す筒を手を持って高く掲げるのだったが、こうした誕生日の祝い方をすることを初めて知った。この辺は数10cm下から凍土だというような話を聞きながら斜面を降りた。明日は天候がよければ、市内と郊外へエクスカージョンだと聞く。

8月21日 11.6℃

ここへ来てすぐ目にしたツンドラの火災がまだ続いているそうで、過去2ヶ月雨がなく沼地も干上がってしまったためだという。スモッグで外がまだぼんやりして見えた。

テレビのスイッチを入れると、放送統制のアナウンスのあと、ウラジオストクで中国との貿易によって野菜が入荷していること、少数民族関係の展覧会があるなどのニュースが流れたあと、イタリア民謡が変わった。

8時半、ホテルのビュッフェで朝食。パン、バター、レバーのすり身にバターを置いたもの、チーズ入り餃子の如きものにスメタナかけ、茶、コーヒー（インスタントではなさそうなのが珍しい）などがあるが、いつも朝食には野菜、果物はなかった。

エクスカージョン（学会旅行）。風が強く冷たいというので、長袖の下着、ウールのシャツ、ジャケット、アノラック、毛糸の帽子、手袋、ゴム長靴と、日本での冬支度にした。

市内のコンクリート建物の建設現場で土台にする鉄筋コンクリートのパイルの説明を聞いた；12～20m下の岩盤までパイルを打ち込むか、-4℃の凍土層に打ち込み、温度監視用のパイプを入れるとか、1986年から建設中の火力発電所で地下に横向きの空洞をコンクリートで造り、冬の厳寒の冷気を導入して凍土の強度を増し、夏は密閉して溶けるのを防ぐ構造にする（この構造は、かつて1976年にヤクーチア西部のミールヌイのダイヤモンド採掘場へ行った時、チェルスキー・ダムのでん堤で見たのと同じ原理だ）、この火力発電には現地の石炭を使うが硫黄の含有量は8～12%だ、夏はディーゼル発電のみでまかなっている……など。

アナドゥイリに上水を供給するダムでは堰堤に1.5m間隔でフロンガスを入れた冷却パイプを最も深いもので25mまで打ち込んであり、年間5ヶ月作動させて氷楔のある堰堤の地層を保護しているなどの説明を聞きながらを見て回った。この様なパイプは凍土地域の都市の建物の外壁の脇などに見かけるものだ。このダムは1972年に建設したものとことだが、貯水量が見たところ少なくこれだけで間に合うのだろうかと思った。

（この午前の見学会は私には難しくよく理解できなかつたというのが正直なところだ。）

2時にビュッフェへ戻り、食事。サケの蒸したのにスメタナかけ、ボルシチのスープ、トナカイの肉のベフストロガノフ風料理……

福田氏と散歩に出て少し歩いた所に電報局が見えた。ソ連の政変ということで、恐らく日本でも大きなニュースになっていて、大学や家族が心配しているだろうと、電報で無事を知らせようということになった。北大の低温研究所宛にしようということになり、受け付けで、最初はローマ字の日本語で電文を書いたが、受付の女性局員が奥へ行ってしばらくして戻り、何を書いてあるか分からないから、英文にしてくれと言われた。そこで、Everything is OK. Return to Japan on schedule. Fukuda and Saito.（すべてOK。予定通り帰国する。福田、斎藤）と書いた。再度、それを出した。再び局員がそれを持って奥へ行ったが、やがて戻って来て今度は受け付けてくれた。検閲をしているらしかった。2時半少し前のことであった。

ホテルの外の道路の向い側に煙突から盛んに煙を出している工場らしい建物があった。カメラで写していると通りかかった中年の婦人が、ここでは撮影をしてはいけない、という意味のことを遠慮がちに言う。こちらが意外そうな顔をしたのを察したのか、恥ずかしそうに去って行った。撮影禁止が建前になっているのだろう。

3時より、またバスに乗って見学会。郊外へ出てツンドラの7,000haの沼地を干拓している所へ着いた。ブルドーザーで表面の泥炭層をはがして排水し、施肥を行なってから草地化するという。すでに草地になって1m近い草が生えている個所があり、そこは排水溝も設置されていた。播種する草の名前は”редиска”（レジェスカ）と聞こえたが、それではハツカダイコンと言うような意味になってしまいそうで多分、私の聞き違いであろう。それとは別に、農作物の栽培を試みている個所もあり、木の板で作ったプランターに葉ものの野菜の芽が出ているのもあった。ここには研究者や作業員などが生活しているらしく、鉄道の古い客車（どうして運んできたのが不思議だが）や貨車を宿舍とか実験室にしており、「ホテル」などと書いた看板を掲げたのもあった。

ツンドラの沼地（アラーヌに出来るサーモカルストの湖）を干拓して牧草栽培をすれば極北に広大なウシの牧場か酪農地帯が出現する、現にチュコト半島でその実験をやっている、とは例のエドマ層の風積説を唱えているトミルデアロ氏の著書に書かれているのを読んでいたので、



「これのことか！」

と私は思った。しかし、こんな人跡稀な地域でだれが、どうして酪農などを営めるのか現実問題としては考えられないと、かねがね思っていることである。

このツンドラの灌木の藪にもブルーベリーや黄色の木イチゴ(マローシカとか聞いた)がかなりある。草原に置かれた立食用の粗末な手作りの細長いテーブルでそれらの砂糖漬けをごちそうになって小休止。ふと見るとスプーンを入れてある缶詰の缶が日本の雪印のもので、英語で上の方にSNOW BRANDと書いてあり、その下にその文字をそっくりロシア文字にして СНОУ БРАНД と書いてある。ロシアではアメリカ系のファーストフード店の名称とか化粧品名も同じやり方でロシア文字で英語名を書いているから、こういうのは当たり前なのだろう。

もう6時半になって13℃。7時半にビュッフェへ戻り、夕食。

室内の壁にロシア語で

「地下水および凍土生成に関する国際シンポジウム参加者へのサービス」

といったことを書いた紙が貼ってある。普通はここではやらない料理を出しているのだろうか。ソーセージ、カツレツに米添え、ニンニクソース(?)、ブドウ、ジュース、白ワインなど。福田氏がひとりのアメリカ人と専門的な話を始めたので部屋へ帰った。リアさんもこういう場合は用事がなくなり引きあげた。

シャワー室を借りて石鹸を使っても、少しもサラツとした感じにならない。水質のせいだろう。

10時頃、福田氏がシャワー室へ行く途中で立ち寄っての話。

「モスクワでアメリカのジャーナリストが殺されたと言ってアメリカ人たちがうわさしている、アメリカ大使館へ電話したが途中で切られてしまったとか、マガダンまで行ってチャーター便でアラスカへ帰ろうかと言っている。それに対して日本の明智光秀の三日天下の話をして、このクーデターは3日もすれば失敗すると言って慰めてきた。」

我われは、しばらく様子待ちにしようと言って別れた。私はなぜか、別に深刻な気分にもならず、そのまま眠ってしまった。

8月22日

7時半起床。

一夜明けてみると、事態は一挙に好転。ゴルバチョフをフルネームで大統領と呼んでいるテレビの放送が流れていた。14℃。外はスモッグ、空には黒雲。チュコト半島以外、東シベリアは雨とのこと。

大ニュースに玄関ではみなが集まって歓声を上げていた。握手したり抱き合ったりしている人もいた。事態が元に戻るということになったということで、皆は福田氏は正しかったと彼に握手を求めている。食事の間もその話でもちきりだ。A4版1枚の紙に ВНИМАНИЕ (「注目」というか「お知らせ」というのか)と題された新聞の号外のようなものをだれかが持って来た。回し読みになって、あまりじっくり読んでいられないので写真に撮った。

その写真に写した記事を改めて読んでみると、日付もなく、どこで出したものか書かれていないが、ソ連邦あるいはロシア連邦最高会議、同幹部会、つまり議会や行政府の立場に立った文面からアナドゥイリの行政機関(市役所)でタイプライター打ちして作成されたものらしいと察しがつく。そこには概略次のようなことが書かれている;

.....国家には憲法にのっとった正しい秩序が回復されたとして、政権奪取を狙った事件の概要が10項目に分けて記されている。事件での死者は3人、負傷者は合計5人とあり、ラフテフ議長のもとにあるソ連邦最高会議幹部会(内閣)は犯罪者らをとったあらゆる処置を非合法と確認する、事件の中心となった犯人グループのひとりとして共

産党幹部のアナトーリー・ルキヤノフの名が挙げられる、ソ連最高会議幹部会はミハイル・ゴルバチョフをソ連大統領の職に復帰させる、逮捕を逃れた冒険主義者・反乱分子はモスクワから逃亡したが、居所は判明している、ブラウダ、ソビエツカヤ・ロシアその他の新聞は発行禁止になりうる、無節操なタス通信、深夜のニュース番組ヴレーミヤは3日間に2回も態度が変わった(直訳的にはカメレオンよろしく3日の間に2回もお色直しをした、と読める)、昨夜、すべては最終的に正常化した.....(幽閉されていた)ゴルバチョフ大統領がアナドゥリ時間で朝6時頃、特別機でシフェロポリ空港を発ちモスクワへ向かった.....

以後、この文書もよりどころにしたソ連政権体制の責任も問われることになった。このいわゆるクーデター事件の首謀者が共産党幹部であったことなど、党の諸機関に対する各方面からの非難が起り、ゴルバチョフは、党中央委員会の解散を宣言し、自らも党書記長を辞任した。そして最高会議(国会)が共産党指導部の活動停止を議決したことによって、この年の12月には74年にわたったソビエト連邦は崩壊した。

この朝には、アメリカ人のジャーナリストが殺されたなどいうあの前夜のうわさや、大使館への電話が切られたという話には、もう、だれも触れようとしなかった。あまり天候が思わしくないが、船をチャーター出来ればエクスカージョンを行うはずであったが、結局、研究発表を続けることになった。

この間に、アメリカ人のブラウン氏は家族サービスとか称して、ロビー活動に熱心だ。

地下水の化学組成について(ソ連人)、アラスカのパイプラインにともなう地下水の変化について(アメリカ人)、映写機等を使わず木枠に図を掲げてのアイソトープによる地下水の研究(リトワニア人)などが続いた。

12時半、茶の休憩。3時から研究発表を続行し今日中に終わらなければ、明日も続けるという。ジャムを食んだビスケット1枚食べ紅茶を飲んでから外出して街の一部を回ってみた。とくに変わった様子もない。気温が20℃近くになって冬の衣服では暑い。

海に臨んだ崖の上へ行って下を見ると、琵琶湖のえり漁に少し似ているが、T字形に網を海に張ってある。その横のずっと先には港のクレーンが林立している。そちらの方へ行って見るとこも相当大きな規模の港湾だということが分かる。

共同住宅の高床の部分の道路に面した所はコンクリートで網状の壁にしてある。美観への配慮であろうか。さらにその外側、道路沿いにはフロンを封入したものか鉄のパイプが並んで立っている。

1時過ぎにホテルへ帰ってみるとテレビがもとの2チャンネルに戻っていた。1つのチャンネルでは白鳥の湖を茶化した番組をやっていた。

3時から研究発表を再開。チェルスキーで会った人が来ているのに気づいて挨拶。

1時間ほどしてまた茶の休憩をとり、5時過ぎに再開。バム鉄道の建設にともなう凍土の問題が注目を引く。**инженерно-геологический разрез** (工学地質学的切断面という直訳になりそう)などという話で私には理解できない。第2シベリア鉄道と称されるこの鉄道建設には永久凍土上を走る区間の問題をどう解決するかが以前から別の会議などでも内外の研究者によって取り上げられていた。1997年のハバロフスクでの太平洋学術会議では、この問題をめぐってソ連とアメリカの研究者が鋭く対立していたことがあった。

6時過ぎに研究発表が終了し、総合討論や挨拶となる。司会者から政治的事件が解決したことを祝いたいとの言葉があり、新しい専門誌を英露両語で出すことになったが、これも昨日までのような情勢では自由を失って不可能になったであろうとの締めくくりの言葉があった。

事務的報告で、この会には48人の出席者があり、国外からアメリカ、日本、国内からはモスクワ、ヤクーツク、マガダン、ノリリスク、アルマトゥイ、エストニアのタリンからであるとのことであった。

25日のハバロフスク行きの航空券を受け取る。先日、2人分で750ドル払ったが、ありがたいことに、なぜか200ドル戻って来た。

ホテルへ帰ってみると、ロシア・テレビに「勝利者たちの集会。91年8月22日」というタイトルが画面に出た後、モスクワでの祝賀の大集会の中継を延々とやっていた。(写真31)クーデターの鎮圧に力を発揮したエリツィ

ンが戦車の上に乗って演説し、大勢の群衆が「ウラー」と叫んで大歓声上げている映像が10時半まで続き、さらに解説とニュースの番組でも祝賀の集会場面が繰り返される。私は別のところにいたのか気がつかなかったのだが、この場面をめぐって、福田氏が後に教えてくれたことがある。

みんなで番組を見ていたリアさんが「これがロシアの悪いところなのよ！」と叫んだあと、けんけんがぐがくの議論になった。



←写真31 「勝利者たちの集会」のテレビ画面

つまりロシア人は自らが努力して社会変革をしないで、いつも強力な権力者の出現を期待してきた、昔のツァーからレーニン、スターリン、フルシチョフ、ゴルバチョフ、そして今度のエリツィンだ、これも長続きしないだろう、なぜこうしたロシアの国民性が生まれたのか、タタールの軛だ、タタールが悪い、などといった議論に口角泡を飛ばしていた、というのだ。13～15世紀のタタールによるロシア支配がこん

な場合にもこんな風に登場するとは。

食堂(ビュッフェ)で、ここをシンポジウムのために貸し切りにしてくれたことへの感謝の辞を、クニツキー氏が長々と書き、各自署名。福田氏と私は漢字で署名した。さらに、リアさんの通訳としての卓越した能力と人柄を誉める書状も書いた。これは彼女の昇任人事の際に使われることになると思う。

8月23日 5時半起床 曇り スモッグは消えたが雲がたれこめていた。12℃。

“Вставай !” “Вставайте !” (起床！、起きてください！)と叫ぶ人が次々と廊下を通って行く。エクスカージョンが予定通りに行われるのだ。海岸に凍土層が崖になって露出している場所へ行くことになっていた。昨夜のうちに準備してあったので急ぐことはない。アナドゥイリでも蚊に悩まされることはないので蚊よけの帽子などは持たないことにする。ハエは食堂などにかなりいる。今日はおそらく寒いだろうと思い、長袖の下着、ウールのシャツ、ジャケット、木綿のズボン下に膝までの長靴下、ウールの帽子、フード付きアノラック、それに折りたたみ傘、雨カッパ持参、ゴム長靴を履くという身支度だ。

6時半にクニツキー氏の部屋で昨夜の食卓から取って来たビスケット、パン、それに同氏持参のカンヅメなどで朝食をすませた。

ホテルから30分ほど歩いて、石炭の荷揚げ場の横から船に乗る。かなり大きな船でシートをかけた大きな救命ボートもあった。シンポジウムの参加者ほぼ全員とその他の人びとも乗ったようだ。

7時40分、出帆。どこの船を借りたのか甲板には折りたたみ自転車やおもちゃの船、魚網などが散らばっていた。

アナドゥイリの街の全景が崖の上に展開して、なかなかの絵になる風景だ。少し離れた岬の先端に近い山の上には、チクシで見たのと同様、アラスカの方を向いた大陸間弾道ミサイルの監視用アンテナが霞んで見える。レーダー基地だそうである。気温は13℃。大きく半島を回るようにして航行し、9時半頃、投錨。出迎えた小型船に数人ずつ乗り移っては上陸したので、全員が上陸し終えるのに1時間ほどもかかった。(写真32)

何の作業をしているのか工事現場の感じの場所だ。小さなバラックが建ち、サウナの小さな小屋もあった。チクシのヴェイコフスキー半島の岬で見たヴェズジェホード(キャタピラ付きの戦車型車両)がエンジンをかけたまま停まっていた。運転台の後ろにはホロを被せて、そこに小窓も付いたバス仕立てになっている。錆びたド

ラムカン2個の間に古びた分厚い木の板を渡したのをまな板にしてサケ、シークなどの生魚をさばいているところであった。紅茶とこの切り身をパンに挟んで、みな立ったままで食べてから、ようやく11時半頃、凍土の露頭を見に列になって海岸に沿って歩き始めた。空は快晴になって緑の斜面と穏やかな海がきれいだった。狭い白い砂礫の浜を歩くこと約1時間。透明な氷が露出した崖下に到着した。

崖下まで行った人たちが、氷を掻きとって投げてよこすのを見ると、透明な氷に直径5mmほどの気泡がかなり多く含まれているのがわかる。このような透明な氷の中の気泡にはメタンが多く含まれると言われている。これらの氷片を手にして、数人が盛んに議論していたが、私はそれには加わらなかった。



←写真32 かなたの船からボートで上陸

崖の上のツンドラには直径が40～50cmのポリゴン(冬の極低温でひび割れが出来て多角形模様になった地面)に灌木類が密生していて、コケモモやブルーベリー類の木イチゴが、ここにもたくさんあった。

このツンドラに横たわってみるとバツらしい虫の鳴き声はするが蚊はいなかった。好気さでさわや

かな風が吹いており、ベーリング海の波の音が聞こえる。空には時々、カモメが飛んで来る。気温は15℃ほどあり、寒くはない。

2時過ぎに帰ることになり、あちこちに散らばっていた人びとが集まってきた。ヴェズジェホードもやって来ており、運転士が帰るから私に助手席へ乗れと言うので、乗せてもらった。ツンドラの植生を破壊する元凶だと言われている車両だが、エンジン音は相当なものながら、道のない起伏の多い所を走るには本当のところ、なかなか快適で速い。(写真33)運転士にケントのタバコを1箱進呈すると、臭いを嗅いで、ありがとう、ありがとうと言いながら(ロシア語でだが)、大事そうに胸のポケットへ収めた。

この車両はまた先ほどの場所まで戻ったらしく、今度は数人が外枠につかまって乗って帰って来た。

水道の蛇口のようなのがあったので、水を出してみたが、薄い塩味がする。水温は15.3℃でさして気温と変わらない。

3時半から食事。新しく分厚い木の板を組み合わせて作った細長い台が少しガタつく地面に据えてあったが、私の胸に近いほどの高さだ。その上へウハーを、これこそ本当の洗面器と言える大きさのホウロウ引き

の器に入れて各自に配られた。他に塩漬けのサケ、パン、バター……。食後、みな付近に散らばって休息。また、野イチゴをさがす人も数人。



←写真33 ヴェズジェホード

5時に船へ戻ることになり、海岸へ出る。水際は砂利で海草が少し打ち上げられている程度で水もきれいだ。また1時間ほどかけて全員が小型船から本船へ乗り移った。

夕日の中を航行した。操舵室の後ろの甲板で、

中年の女性研究者4人が大声でしゃべっているのが聞こえ、はじめは雑談かと思っていたが、ゴルバチョフとエリツインのどちらを支持するかで対立して論争しているのであった。それが長々と続くのでカメラを向けると4人とも笑顔で手を振って答えた。ロシア人はよほど政治論が好きだと思えなかった。8時20分にアナドゥイリ港へ帰りついたが、随分寒くなった。

何かの手違いがあったそうで夕食なしであった。

リアさん、福田氏と3人で食堂のテーブルでバター、ビスケット、コーヒーをもらった。タダだという。そこへ食堂の主任というのか店長が現れて、ソ連の軍用品だと言って双眼鏡と時計を持ってきた。さらに、マンモス牙の彫刻品のイルカや少数民族の守護神像とやらを出し、牙製品はそれぞれ10ドルだと言う。金がないので見せてもらうだけにすると買って買うのは断わった。

クニツキー氏の部屋へ行くとベルンステイン氏も来ていて、持ち合わせのものをみんなで食べた。どういわけかケフィール(ヨーグルト)まで出てきた。

自分の部屋へ引き揚げてテレビを見るとニュース番組のヴレーミャでモスクワへ戻ったゴルバチョフの記者会見の様を放送していた。日本の海部首相ほか各国の元首への感謝の辞を述べて、(リビアの)カダフィと(イラクの)フセイン以外は、と付け加えて笑わせている。

8月24日 雨風が強い 11℃

昨夜は2時ごろ目が覚めて眠れなかったので「三国志」の最後に近い部分を読んだ。今日も完全に名古屋での冬の服装にするのがよさそうだ。レストランへ行くというのでゴム長靴にする。風は強いが雨はさほどでもない。

朝食には分厚いレーズン入りケーキが出て来た。その他はいつものパン、ソーセージ、バター、コーヒー……

レストランへの行き帰りに通った街のГАЗПРОМ(食料品店)と書かれたビルの窓下の青い壁に白いチョークで縦が1mほどの大きさの文字のスローガンが横に1行で書いてあった。往きに黒っぽい服を着た中年の男が脚立を立てて書いているのが見えたが帰りには書き終えてあった。走るバスの窓越しにすばやく写真に撮った。不完全で、十分には読み取れないが、はじめはロシア文字で書いて、あとはローマ字にしたつもりらしく、英語混じりのようでもある。綴りや文字・単語を間違えたり、私には解釈できない語もあるが、クーデター事件に関連したスローガンであることは確かだ。(写真34)

## ДИКТАТУРА НЕ ПРОШЛА

NO PASARAN YRA! VIWAT DEMOKRATII ROSSII !



ひとつビルの前に置いてあった大きな箱に2行に;

←写真34 青い壁面に白チョークで「独裁は成功せず」

最初のロシア文字の文「独裁は成功せず」は分かるとして、次は意味不明だが何とか万歳、最後は綴りがおかしいがロシアの民主主義者万歳ということか。VIWAT(正しくはVIVATだろう)は、ラテン語起源の言葉で原義では彼/彼女を生かしめよ、といった意味だろうから、ロシアの民主主義者たちよ頑張れ、と書いたつもりなのかもしれない。いま

と書いてあった。KAPUTはドイツ語めいているが、この3語は一体何語なのか意味不明だ。狩りたてろ、ファンストどもはもうおしまいだ、とでもいうのだろうか。

雨が止んだので、街の中をまわり、書店で白地図と絵ハガキを買った。歩道でシャシリックを焼いて売る準備をしている老人がいたが、まだ、出来るまでに時間がかかりそうだった。ところが、ホテルへ帰ってみると、クニツキー氏がそれを買ってきたから部屋へ食べに來いと呼びに來た。なかなか良い薬味の効いた牛肉でうまい。街頭で突然誰かが何かを売る、ということがこの国にはよくあることだそうで、そのためにモシカブクロといって、買い物を入れる袋をいつも持ち歩くと、初めてソ連へ行った時に、ソ連通の日本人に聞いたことがあるが、このシャシリック売りもその例だったわけだ。

福田氏が来年の調査の打ち合わせをするらしいので、部屋へ戻って休息。魚獲りか博物館見学に行くとの話で博物館を希望したが、休館日だと分かって中止。

5時から少し坂を登って左へ行ったところにある科学アカデミー極東総合研究所アナドゥイリ支部の古めかしい建物の見学に行った。I.B.M.のコピーだという韓国製のコンピューターがあった。図書室には地理学関係のものが少しあったが、大部分は自然科学系の図書である。多くの人があまり興味を持たず、玄関口でゲームをしたり、あちこちの研究室、実験室などを覗いて歩いただけだった。

7時からシンポジウムの打ち上げ立食パーティー。とくに挨拶もなく、いつの間にか始まった。きっちりとスーツ姿にしている人もいれば、よれよれのジャンパーを着た人もいる。さほど豪華な料理というほどでもなかったが、パンにイクラを盛り上げたのなど数種類の皿が出た。生ネギや生の葉ものの野菜の根の部分を取り切っただけのをそのまま皿に盛ってあった。家畜のエサみたい、という感じだ。会の途中でテレビが持ち込まれ、騒乱の犠牲者の追悼式の模様が中継されていて、テレビを囲んで熱心に見る人だかりが出来た。

その一方では、テーブルでチェスをやっている人もおり、そのひとりが当日の新聞記事の1箇所を指差すので読んでみると、エンゲルスの書いた文章の一節だというのであった。

「最近の世界大戦は全世界から反動的階級と王朝のみか、あらゆる反動的国民も拭い去るであろう。それもまた進歩であろう……」

というような文章で、その男はこんなのはおかしいではないかと怒っているのであった。

Роман-9 (ロマン-9) とかいう記事でどういう文脈なのか分からないので何とも答えようがなかった。それぞれが勝手に楽しんでいるような会で、あちこちの人の写真を撮るなどして私もしばらくすごしたが、ひとり早めに切り上げて帰り、シャワーを浴び、部屋でテレビを見た。10時すぎだったが、まだ追悼式の中継をやっていた。途中でスイッチを切った。

### 13 ハバロフスクにひらめく三色旗、そして帰国

8月25日 曇り。窓の外はみぞれか雪で風の音が強く外気9.9℃。室内は17℃あった。

ロシア人の一部は7時ごろ出発し、モスクワへ帰って行った

8時半、人数が減り、いつもとは別の小部屋で朝食。野菜、果物なし。パン、バター、サラミ、レバーペーストのバター添え、ブタの焼肉の薄切り、コーヒー……

11時に出発するというので部屋へ戻り準備。風が強くみぞれ模様なので長靴に冬の服装として、そのままハバロフスクまで往くことにした。

10時から国営テレビがクーデター事件の始まりから終わりまでを放送している。

11時のフェリーに乗るように福田氏、リアさん、クニツキー氏と私の4人のほか別の2人の人が研究所支部のジープに乗せてもらった。ベルンSTEIN氏は、ここから別行動となった。忘れ物をした人がいたので研究

所の方を回って港へ着いた。乗船場はまた、かなりの混雑で、おまけに風のためにしぶきが上がり、苦勞してスーツケースと共にフェリーに乗った。客室の入り口に立っていたが、かなり高い波としぶきで濡れそうでもあり危険だった。船員が奥へ入るように指示するので人の間に割り込んで、客室へ進んだ。

11時半に対岸に着き、貨車のような待合室でバスを待ったが、なかなか来ない。ようやく1時過ぎになって空港行きバスが来た。

30分で空港に到着して、やっと暖かい所へついた感じがしてアノラックのフードを脱ぐ。

.....

しかし、ここからがいささか大変なことになった。長々と待って3時近く、搭乗手続きが始まりスーツケースを預けたが、まだ飛行機が着いていないというのでデュッフエに入って昼食をとった。ニンジンの前菜、スープ、ハンバーグ煮にマカロニー添え、茶など。

ところが、食事を終わって待合室へ出てみると、あと4時間待ちといわれる。やがて、3階に案内され、そこは空港ホテルであったが、ソファも椅子もないホールで1時間も待たされた。なぜか係員が椅子をひとつだけ持ってきて座れと言う。

4時半頃になって、やっと4つベッドのある部屋へ案内された。空港らしくない静かさに2回ほどエンジン音がしただけだった。6時ごろ1機が発進して行った。ハバロフスク行きの飛行機は、まだ、ハバロフスクを発っていなとかいう話で、まともにベッドにシーツを掛け枕カバーをつけて、眠る準備にすべきだということになった。

7時20分、大型機が到着したので喜んだが、モスクワ行きだというのがっかりした。

もうレストランも閉まっていたが夕食の時間になった。待合室でクニツキー氏のカバンから昨夜のパーティーのパン、パイなどが次々に現れた。別の人のカバンからはコーヒーやチョコレートが出てきた。クニツキー氏は、自分たちは今のソ連社会の諸々の制度などを当てにしない、というより信用していない、なるべく食べ物でも何でも手に入った物は大事しておくのだと言う。この旅行でも、いつ食べ物が手に入らなくなっても良いようにこうしてもって歩くことにしていたとのことであった。

福田氏とドルの清算をした。ここからハバロフスクまで272ドルで済んだことになった。

8月25日 4時頃、22℃。目が覚めて外を見ると晴れだが、時々、雲が青空を覆う。

トイレへ行くとドアが閉まらず、ひとり分ほどの排泄物が残ったままなのは閉口した。仮眠のつもりが結構眠ったらしいが、まだ寝不足の感じがするが、もう眠れない。他の3人はよく眠り続けていた。相変わらず空港らしくない静けさなので、いったいどうなってしまったのだろうと思った。「三国志」は読んでしまったので、しかたなくソルジェニツィンを読み始めたが、いやな話だ。

7時過ぎにみんな起き出してきて、待合室に次々と集まって来て食事になった。またも、いろいろな食べ物が出てきた。塩漬けの魚の切り身をはさんだサンドイッチが一山も現れたのには驚いた。

ここの洗面所には豊富に水も湯も出る。コップにヒーターを突っ込んでたちまち紅茶が用意された。みんな陽気にふるまっているので、何となく安心だった。

建物の外へ出てみると9℃しかなくてかなり寒かったが、アナドゥイリの街が岬の先端の山の斜面に広がり良い景色だったが、空港でカメラを取り出すとトラブルになりかねないので写真を撮るのはひかえた。

8時頃になると、建物の内外がにぎやかになってきて、クルマの音や子供たちの声が聞こえ、案内のアナウンスも始まった。

10時10分によくハバロフスクからの飛行機が到着した。予定より約1日遅れたことになる。11時になって搭乗の案内があり、20分ほどで乗客は急いで乗りこんだが、空調と何かの音楽の音が小さく聞こえるだけで1時間ほど待たされた。

12時半にやっと動き始め、滑走路手前でまたしばらく待ち、ようやく発進した。たちまち雲の中となった。昨夜来、食事らしい食事をしてなくて空腹だったが、発泡水がコップ一杯配られただけ。大抵の人と同じく私も眠ってしまった。

2時過ぎ、気が付くと降下し始めていた。一面の雲を抜けて下へ出ると意外にいい天気で、マガダンは15℃とのアナウンス。頂上付近には樹木のないツンドラの山並みがよく見えた。あの付近まで行けばトナカイ飼育民に会えるのかもしれない。やがて緑の採草地か畑、集落、道路などが見えて来て、2時半にマガダン空港へ着陸した。給油のためだと言う。貴重品だけ持って降り、いそいで空港のレストランで昼食をとった。やっとまともな食事にありつけた感じで、注文するとスープ、牛肉料理、なぜか大量のジュースが来た。

ところが、ここで意外なことを聞かされた。あの乗ってきた飛行機の運行はここで打ち切りだというのだ。急いで機内に残してきた荷物を取りに走った。クニツキー氏がスーツケースを運んで来てくれた。

何ということか、次のハバロフスク行きの運行は未定だとのこと！ビザが明日で切れるのだからどうしてくれるのだろう。

状況が分かるまで休んでくれとクニツキー氏が空港から緩い坂を登った所にある空港ホテルをとってくれて、とにかくそこへ行ってくれと言われた。行きたくない気持ちだったが、仕方なく坂を登ってホテルへ入った。応接間付きの広い部屋だった。クニツキー氏とリアさんは情報を求めて空港へ引き返した。福田氏はソファでいびきをかき始めた。私はヒゲでも剃ろうかと洗面所へ入ろうとしたとたん、ハバロフスク行きのレジレーションが始まったと言われ、大あわてで、空港のカウンターへ走り戻った。ホテルの料金がどうなったのかは、後々まで気が付かなかったがどうしたのだろうか。ゲートを出て1時間時計の針を戻し午後4時半。

搭乗してみると、乗客が随分少ない。先ほどマガダンへ泊まることにすると行って、空港を去った人もいたから、乗りそこねた人がいるのではないかという感じであった。飛行機が動き始めたので発進かと思ったら、何と先ほどの飛行機に近づいて停まり、荷物を残してきた人の分を載せ替えるのであった。この直前に1機飛び立って行ったので、ひょっとしてあれが先ほど乗ってきた飛行機ではないかと思ったが、あれは別の飛行機だったのだ。マガダン着陸以後のこうした事情が分からずウロウロしたのは我われだけではなく、別の乗客にもかなりいたようだった。

5時10分に離陸。とにかくこれでひと安心であった。

ハバロフスクに近づくと、またすっかり雲の上になった。水のサービスだけで飛行し、7時前にアナウンスがあり、気温22℃とのこと。やはりアナドゥイリとは大変な違いであった。こうしてやっとの思いでハバロフスク空港へ帰りついた。ルサコフ氏が、また出迎えてくれた。7時13分に着陸し、8時には荷物も出てきて、タクシーで出発時に泊まった一部でまだ改装中の建物の部屋へ入った。

夕飯はクニツキー氏、ルサコフ氏、リアさんへの感謝をこめて、我われ2人で日本料理をごちそうすることにして、「レストランさっぽろ」へ行った。ここは建物から料理の材料まで日本から取り寄せているそうで、本物の和食が食べられる所である(いまひとつラーメンの店がシベリア鉄道駅の近くにあり、以前、ひとりで行って見たことがあったが、ラーメンとは似て非なるものであった)。

下の方の階はロシア料理の店で上階が日本料理店になっていた。畳はなくテーブル席であったが、日本料理の定番は一通り何でもあった。外国人にも比較的よく知られていると思われるてんぷらとすき焼きを注文し、日本酒とつまみを少々取った。

初めての割り箸に3人は戸惑いながら、それでも喜んで食べてくれた。ただ、最後の御飯についてきた海苔を嗅いでみて食べあぐねていた人がいたのは気の毒な気がした。ここにあったカラー写真入りでクーデター事件の記事を載せた日本の新聞をリアさんが非常に興味深そうに見ていた。シベリアではまだ新聞にカラー写真はなかったかもしれない。

8月27日 16℃ 晴れ。

6時半に起きて、荷物のパッキングを済ませた。ルサコフ氏にヤクーツクから先に運んで来てもらっていたサモワールは、これだけ別に手で持って帰るしかなかった。

朝食後、福田氏と2人で市内を歩いてみた。天気が良く、すがすがしい朝であった。街は全く以前と変わらない様子で、街頭で木の台を並べて花を売っているおばあさんたちもいれば、大通りは人通りが多く、宝石



店に人だかりがしていたりする。歩いていて5階建てのビル(市役所)に近づくと、屋上に真新しい3色のロシアの旗がひるがえっていた。しかし、残念ながらあまり良い写真は撮れなかった。隣の3階建ての部分の外壁には足場を組んで作業をしている人たちが見えた。ソ連でおなじみの壁に書かれた赤い文字のスローガンを塗りつぶしているところであった。こちらがカメラを構えると、作業をしていた男のひとりが「オー！」と叫んで拳を握った右腕を高くかかげてポーズをとった。

ビザの期限の切れる日、たいへんなお世話になった3人に別れを告げて午後3時15分発の新潟行きアエロフロート機へ乗った。

## 14 おわりに

以上は1991年の予備調査を中心にした記録である。煩雑になったきらいはあるが、それ以前に私が参加したことのある学会のエクスカージョン(見学旅行、現地踏査)からもいくつかのエピソードを拾って書き加えた。

それらは、1978年の国際地理学会議(ヤクーチア中・西部)、79年の太平洋学会議(マガダン、コリマ川クレストフカ～チェルスキー)、84年の国際地質会議(イルティシュ川トボリクス～オビ川サレハルド)、90年の第四紀地質シンポジウム(インジギルカ川上流～中流)などである。日本からの参加者は私ひとりの場合と、3～4人の時があった。

いずれも、主としてソ連側のお膳立てによる自然環境に関する現地調査・見学の催しであり、ソ連の国家の威信をかけたとさえ思われるような、周到な準備とサービスをともなっていた。安全に見学するための支援隊員、よく整えられた宿泊用の船舶、快適なテントの準備などをともない、考えられないような低料金の参加費であった。社会主義国なればこそ可能なのだと主催者側は豪語していた。その一方で、予定されたコースをはずれること、とくに単独行動は厳しく禁じられた。これは危険な崖や野生動物への警戒のためでもあったらしい。見学の空き時間に、人気(ひとけ)のないタイガの中の湖へ釣りに行った人たちは、事故があった場合は自己責任である旨の誓約書を書かねばならなかった。コリマ川中流域やインジギルカ川上流へ行った際には、一行の安全のためのライフル銃が携行され、イヌも連れて行かれた。幸い危険な目に会うようなことはなかった。もっとも、狭い谷沿いを縫うようにヘリコプターが飛行して私は恐怖を覚えた場面があった。そして、こうした機会以外では決して到達できないような山間僻地にまで案内してもらい、それらの機会を通じて、私はそれまで知らなかった永久凍土の諸現象や自然の驚異を目のあたりにすることが出来た。しかし、私が元来関心をもっていた先住民やその文化に関連した事柄を直接見聞できる機会は、ほとんどなかった。私以外にも、たとえば同行したハンガリー人のある民族学者がシベリアの少数民族に会える機会を求めていたことがあった。そうした要望は決して受け入れられず、むしろ、慎重に彼らの集落などを避けて案内されたように想像される。ソ連体制の下では望ましくない、おくれていると見なされた、現地の人びとの生活や生業を外国人に見せるわけにいかなかったのであろう。もちろん、軍事施設等は全く目にするのがなかった。

ところが、ソ連にゴルバチョフ政権が出現し、ペレストロイカ(建直し)、グラスノスチ(公開)の言葉が盛んに唱えられるようになると、シベリアの諸事情もかなり変わってきたらしかった。

従来から、厳しい制約の下にありながらもヤクーツクの永久凍土研究所との研究協力の維持に努めてきたのは北海道大学低温科学研究所であった。私の管見の限りでは、同研究所教授の木下誠一氏とそのあとをつがれた福田正巳氏のお力は非常に大きかった。

ソ連が変わりつつある事態を受けて、日ソの両研究所間では本格的な共同研究をスタートさせる方策を探り始めた様子であった。

福田氏がそのための予備調査に行かれることになり、いささか畑違いながらシベリアへの関心を持ち、若干のロシア語の知識もあった私に友人として福田氏が同行を求めてこられた。

私としてもこの機会にまだ行ったことのない地域の自然を自由に見せてもらえそうなこと、トナカイ牧畜民など、それまで文献でしか知ることのできなかった先住民の生活に直接接触した調査・研究の可能性を探ることができそうだとの期待があった。

結果は、本稿の通り、期待以上のものであった。そして、1993年からは待望のシベリア先住民の民族学的研究が共同研究の形で始まった。日本にシベリア地域のフィールドワークを行なう若手の研究者が出てきたのもその共同研究がひとつの契機となった。

\* \* \*

#### 後記

本稿は、すでにふた昔も前になりますが、現役時代に繰り返していた海外学術調査の際のフィールド・ノートのうち、記録としても比較的詳しいものを基にしています。自然現象は別にして、今ではすでに過去の物語と化した事柄も多いかもしれません。

退職後、同時に撮影した写真やビデオを参照しつつワードのソフトを使用して多少の補足をしながら清書しました。

最近、パソコンを更新したのを機に、その文章へ外付けのハードディスクに入れてある当時の多葉の写真の中から記述に沿ったものを適宜選んで挟みました。

なお、本稿のタイトルですが、本地域はシベリアよりはロシア領極東とよぶのが地理学的にはより正確であろうと考え「ロシア極東の旅」としました。

2010年2月10日

齋藤晨二(さいとう しんじ)

注) 写真:全て著者撮影

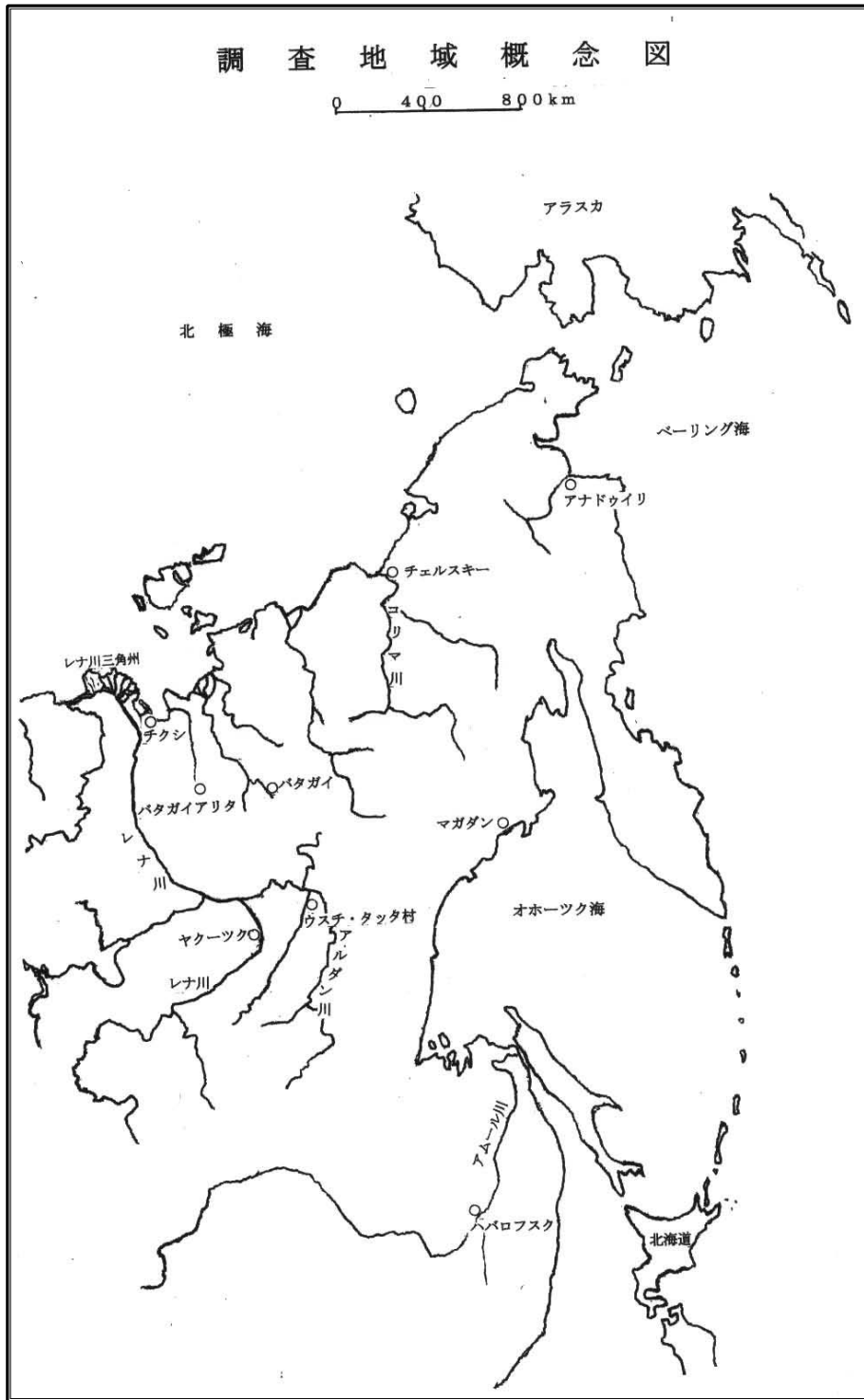


図1 調査地域概念図

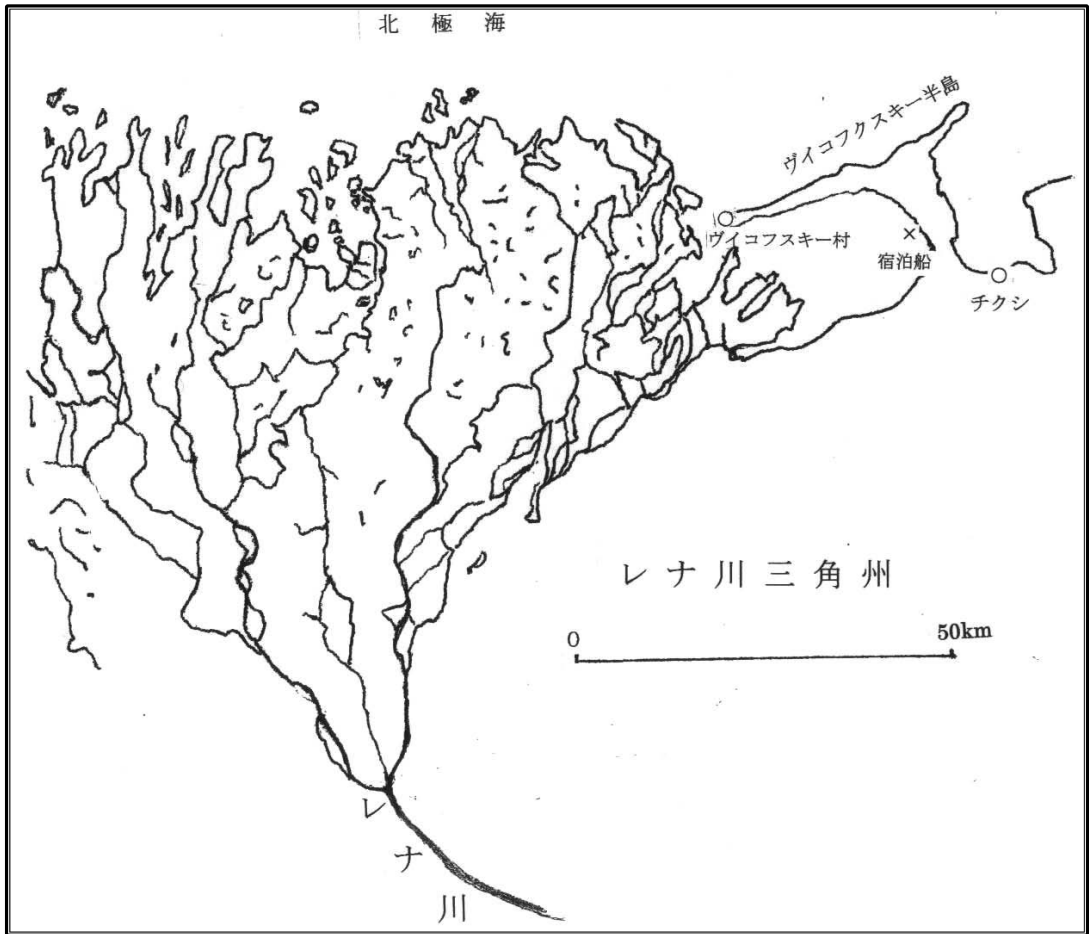


図2 レナ川三角州

The Preliminary Research Travel to Russian Far East in 1990's  
Part I: Permafrost, summer in the break-up of Soviet Union

SAITO Shinji

This manuscript is one of two diaristic memo, compiled by field note and photographs, recorded during author's field work in Russian Far East in early 1990's. Part I is the record of the preliminary research on permafrost condition in several regions in Yakutiya, Magadan, Anadiri. Part II is the record of the first Japanese ethnological research on the reindeer herders in Yakutiya in summer, 1993, which will be published in next number of this journal.